

---

# 幻神月花

平井純譚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻神月花

### 【Nコード】

N5289L

### 【作者名】

平井純譚

### 【あらすじ】

遙か昔：時間の概念を突き止めた種族が万物の王が指揮をとる「外なる神」によって終焉を迎えた。しかし大魔術師であった「エイボン」は、死ぬ間際に自身の弟に特殊な術式を施し不死にした。その者の名は「シラガミ」……………

彼は人類を守るために近い未来に待ち受ける審判の日に神と戦うことと宿命づけられた。死ねない苦しみ、逃れない狂気の連鎖の中で彼は親となり孫が生まれ自分の役割を意識する。

現在、シラガミは新しく出来た人格「月南」の中で行動している。

シラガミを処刑するために行方を追う外なる神

謎の目的のために動く不気味なツインテールの女

全ては審判の日明らかになる……カオスファンタジー

**覚醒(巻)、序章(前書き)**

連載再開!!

次回は夢の章になります

よろしく!!!

後書きにオマケあり

## 覚醒（巻）、序章

覚醒の世界・・・我々の言葉では現実の世界を指す

この世界で科学が発展を続け  
魔術や霊体が否定されている

この物語は、牧場を営む一人の少年の身に起きる不可思議な現象と  
世界を動かす「真理」について  
突き詰めていくモノである  
まずは少年の身の上について知って貰おう

\*\*\*\*\*

ここは何処・・・？

私は何者・・・？

山間の山林に一人の人間の形をした者が彷徨い歩いている  
ここは日本であるがその者はあらゆる所が違っている  
髪は見る者すべてを日の光へと誘うかのような金色であり  
まるで絹のように柔軟で繊細である。

その金色の髪からは白く細長い耳がピョコツと顔を出している

腰元まである長い髪は山林に降っている雨により泥まみれで傷が見  
受けられる

瞳は純粹な海をイメージさせるほど深い青色

そして金色の髪に縁取られているのは、まだ幼さが残る世にも美し

い白面であつた。

自分が誰で何処から来たことも分らず彷徨う

何日間歩いているだろうか？

そんな疑問が幾度となく頭によぎる

気がついたら土の中だった・・・まるで埋葬されたかのように埋められていた。

埋められたと言っても棺桶の中に丁寧に葬られたわけではなく身体が直接土が掛けられた様子だった。

その者は、土の中から脱出し鬱蒼と茂るなんとも不気味な山中に目を回しながら数日歩いていたのだ。

気力は限界に近い・・・どうやらこの身体は、食物を欲しない（必要としない）ようで体力の低下による死（餓死）の心配はなさそうだった。

着ている服装から戦を生業とする戦人のような身軽な服装（爆発に巻き込まれたのか、服は焼け焦げていてそれ以上の情報は望めない）私は、その場で崩れ落ちた。自分の正体が定まらないのは、余程精神に負担をかけるらしい・・・  
何も・・・思い出せない・・・

近づいた鼻に湿った土の匂いが<sup>いまだ</sup>匂っている。意識が途切れ視界が暗転していった・・・

「・・・大丈夫？・・・」

巫女姿の少女が無表情の顔でその子を見つめる

偶然、山に修行に来ていた巫女が倒れている人を発見したのだ

\*\*\*\*\*

2年後

大霊山「神南備」

古くから神や霊が神留る（かんずまる）場所として御霊代・依り代みたましろよりしろを無数に擁した（いだした）領域

科学がいくら発展を続けてもこのような考えは減るどころか増える一方である

その山の裾野に広がる小さな農村から物語は始まる

村の名前は「月影の村」

山の近くにひっそりと社があり

代々その一族が霊山の管理し許可なく山に侵入することは出来ない  
人口は20人程で村と呼ぶのも憚れ（はばかれ）そうである

この村で有名なのはその社を管理する「真槌家」まづちけとその隣で小さな  
牧場を営む青年「真槌月南」まづちつきみなであった

同じ性であるが社の真槌家とは血の繋がりを持っているわけではなく  
ある日突然、霊山に行き倒れていたのだ

異国から来たと思わせる金色の髪に青き瞳

細長い耳

村人はその見慣れない風貌に驚き誰も彼とは積極的に会話をしよう  
ともせず

無視をし続けた

追い返さなかったのは靈山を守る社の12代目当主

「真槌清孝」まづちきよたかの配慮による所が大きい

さらにその青年は、どうして自分が靈山を彷徨っていたことと自分が何者かがわからないのだ・・・

・・・記憶喪失である

自分の帰る場所がない青年に真槌家は社から近い所にある小さな牧場を紹介した

なんでもすぐに働いて助けてくれた恩を少しでも返したいのだそうだ

今（現代）の若者にしては達者な考えである

村人は思えた

「金色の異国の者に農作業は上手くいくはずがなきゃあ・・・どうせすぐに諦めて村からいなくなるすら・・・」

村人が言うのも一理あったその小さな牧場は長い間誰にも使われず荒れ放題であったからだ。

雑草は人の腰まで伸び

畑の中は石がゴロゴロと奇妙な凹凸を作り出している  
お世辞にも牧場とは言えない所である

しかし、その青年は文句の一つも言わず  
開拓を始めていった

どうせ2、3日したら・・・疲れて泣き付いてくるに決まってる

村人にとっては青年の行動は滑稽にしか見えていない



しかし、それをよそに青年は畑を綺麗にしていく

1ヶ月・・・2ヶ月が経った頃

畑は綺麗になり青年が種を植えて水やりをしているのだ・・・

村人は感心した・・・

さらにその青年は誰にも分け隔てなく接し

どんなことにも一生懸命

村人と打ち解けていくのもそう時間がかからなかった・・・

長くしゃべり過ぎてしまったな・・・

では視点を真槌月南に変えよう

げんしんげつか  
幻神月花

## 覚醒の章

小さな農村「月影の村」

山の東側から朝日が一筋の閃光を示し大地に朝が来たことを告げる

農家の朝は早く

朝日が出始めるのと同時に今日の活動こんにちを始める

一軒の木造の家からクワとじょうろを手にした青年が出てきた

その青年は大きく伸びをし「う~~~~ん!!」

今日もいい天気だ」

快晴程でないが空全体に占める雲の割合が少ない

青年の名は「真槌月南」

「つきな」と女の子みたいな名前だが  
れっきとした男である。

しかし、その自信も鏡を見てしまうと薄れていく

絹糸のように柔軟な髪質で見た者すべてに日の光を思わせるほどの  
こんじき  
金色の髪

あまり切る機会がなく肩まで伸びている  
さらに顔になると最早

「貴方は女の子です」  
と断定される程のモノである。

吸い込まれてしまいそうな位の深い蒼眼  
花びらのように可憐な唇

雪の雫と思わせる白面

身体つきもどちらかと言えば華奢なほうだ：身長は、現代の長身若  
者と比べても低く150cmしかない。

体重は30kg：風が吹けば飛んでしまいそうである。

そんな美人が朝から泥にまみれ野菜を育てているとは想像し難い

「お！！！月南も早えーじゃんよ」

「あ！！！紀久さん（のりひさ）おはようございます！！」

「あはは、相変わらず丁寧じゃんけ……これなら何処に嫁に出しても恥ずかしくないの!!!」

「やめてください……私は男ですから嫁に行きませんし、まだ修行中ですから結婚の予定もありません」

「そんな顔しとるのに

私なんて使うから間違えられるだよ

この間もほうだったずら（そうだっただろ）

神南備に見学しに来た観光客に勘違いされて」

「またそれですか……誤解を解くの大変でしたよ」

月南と会話をしている男性は「稲羽紀久」いなばのりひさ

今年で52歳になる男性だ

神南備の観光客を案内することや街で販売員の仕事をを行っている。  
ちなみに二人の子供の父親でもある

「ああー!!!」

お父さん!!! また月南をいじめて!!!!!!

早く仕事に行きなさいよ

今日はゴミをぶちやある（捨てる）日でしょ!!!!!!」

「おっと!!! 家のうるさいのが来たの!!!」

じゃあ……仕事に行ってくる!!! はあ、朝早いのえらいの（きついの）」

紀久さんは村の南東の出入口へ慌て踵きびすをかえして進んだ

それを確認すると両耳を隠しているように結ばれている黒髪の女の

子が制服の姿で月南に近づいてきた

「全く・・・すぐに月南をいじめるんだから・・・大丈夫？」

月南・・・お父さんに傷つくと言われてない？」

なんとも利発そうな娘であるが先ほどの稲羽紀久さんの二人娘の長女である

「稲羽いなば 奏かな」

調子の良い父親とは違い

面倒見がよく

いつも村に来たばかりの月南を気にかけている

少し暴走する所が玉に瑕たまにきず

「おはようございます

奏さん・・・今日は随分早く学校に行くんですね」

「え!! いや、朝練があってね・・・この村けっこう街から離れて  
いるからこの位に出ないと間に合わないのよ」

ため息を混じらせながら月南の農地の柵（猪被害対策）に背中から  
寄りかかる

「朝練ですか・・・何かの部活に入ったんですね!!」

「そんな大したことないわよ・・・陸上部に入っ  
てね まだまだ下手よ

それにしても・・・月南も学校に来たらいいのに・・・!!  
真槌の人達もオーケーしてるんでしょ？

絶対!!!! 月南は優等生になると思うけどなあ」

「いや、私はいいですよ（否定の意味で）  
農業もありますし・・・

いつものように奏さんと燐靜さんに教えて貰うので満足してますから」

昼間は農業に勤しみ

夜になったら

学校から帰って来た二人に今日の授業内容を教えて貰っているが

月南は大半の知識を持っていて二人を驚かせている（自分の生い立ちには思い出せないが）

何処で学んできたのか

月南にも分からない・・・

燐靜りんせいさんとは

真槌家の一人娘で

一族最強の霊力が宿っていると噂されている

特徴は・・・無口

と月南と奏が話をしていると

「奏・・・来た・・・」

噂の燐靜が学生服を身に纏いやってきた（いつもは巫女装束）

「アンタまた・・・小学生で習う初期の文法法則を・・・  
てか何でこんなに早いのか！！巫女修行をやってからいくから毎日遅

くに来るじゃない!!!」

燐靜はまんじりともせず

「部活・・・入ったから・・・  
剣道・・・」

見事な第3文型

S（主語） V（動詞） O（目的語）

「・・・そうですか・・・」  
なんかこっちまで無口になるわ

燐靜が無表情のまま近づいてきて

「月南・・・いつ婿入りする？希望があれば明日にでも・・・同じ  
性（名字）だから・・・」

説明）燐靜は月南の時は結構話します  
他の人には初期文法

「え!!!・・・いや・・・そんな」

あからさまに顔を赤くする月南  
助けて貰った張本人の為  
強くは言えず

「アンタ!!!月南が困ってるでしょ!!!」

すると燐靜はゆっくり無表情の顔で奏の方を見ると

「奏・・・話してない・・・」

首を横に二、三回横に振る

せめて「は・を・に・の」等を付けなさいよ!!!!!!

「あんたね・・・ん・・・!!!!!!

やばもうこんな時間

燐も朝練習でしょ

急がないと間に合わないわよ」

燐靜の学生服の首回りを手に掴み

引きずるように奏が燐靜をずんずんと突き進んで行った

「じゃ!! また・・・夜ね」

「では・・・返事もその時に・・・・・・・・（ガン!!）・・・・奏・・・痛い・・・・・・・・」

奏が燐の頭をげんこつで叩く（左手で引きずっているので右手で）  
ぶたれても無表情のままだ

「が、頑張って来てください・・・・・・・・」

月南は苦笑いで二人を送り出す

いいなー学校・・・

月南はクワを手にとり畑の整備を始める

これが月南の日常

自分の正体が分からないなら

それでも構わないと思いだしている

しかし不思議な現象は今晚も月南を旅立たせる

それが何を意味しているのかわからない・・・



## 覚醒(巻)、序章(後書き)

祝 幻神月花スタート!!

月南「どうも・・・えっと・・・真槌月南です・・・」

奏「そんなに緊張せんでも誰も恐がらせないって・・・」

月南「本当ですか!! 完全に人物描写で最初女の子って思った人がたくさんいると思いますよ・・・」

名前も女の子みたいですし・・・(シヨボーン)」

燐靜「助けた時・・・てっきり女の子だと思ってその名前にした・・・ダメ？」

月南「だめじゃないですけど・・・もっと男らしい名前にしてくださいよ・・・」

燐靜「男らしい・・・男らしい・・・男塾・・・」

奏・月南「え!!!! 何でそこにいった(ですか)?」

燐靜の意外な思考回路を発見した

さあ、男らしい名前は付けて貰えるのか・・・

## 夢(?)、プロローグ(前書き)

最近見た変な夢

紙にやたら英語の「I」の文字を書いて敵と戦った夢  
よくわからずに勝利

最後のエンディングを見て起きた

夢診断できる人はこの夢の意味を教えて・・・

## 夢（?）、プロローグ

夢……睡眠中に起こる体感現象の一種

ある研究によれば夢とは記憶の整理とされ

人間の脳内で凄まじいスピードで情報のやり取りをしている

その世界で自分の考えはなく勝手に自分が喋り出す（そこに対して疑問を持たない）

起きると同時に大半のことを忘れてしまうのも特徴の一つ

月南は一年位前から同じ夢を見続けている

今回は彼の夢の世界の話

### 幻神月花

### 夢の章

岸辺に沿って雲の破れ

ふたつなる太陽が湖の彼方に没し

蔭が長く尾をひくは

カルコサの地

暗黒書物の一つ「黄衣の王」より引用

そこの大地は変わっていたふたつの月が浮かび

一つは空を包む万華鏡のような大きな月

もう一つは空の彼方より獣の目のようにポツカリと漆黒の闇を照らしている

何処にあるか分からない

万華鏡の月を貫かんばかりの尖塔がいくつも連なり

その都市の異様さを物語る

その都市の名は「カルコサ」

太陽は存在しておらず唯一の光はふたつの月であった

「はあ、はあ…一体ここは、わらわは森にいたはずじゃが…」

「そっちに行ったぞー!!」

「いたぞ!! 待て!!!」

何で…ここは何処なの？

月灯りに照らされた道に尾が小さく九つに分かれた狐が兵士の格好の人間に追いかけられていた

(ここなんて…知らない

わらわは…散歩をしていただけ…)

いつものように森に入り

木の実を食べようとした時

万華鏡の月が浮かぶ都市に来ていた

訳が分からず都市の人間に追いかけられている

狐は小さい尾をコントロールしながら月灯りの道をひた走る

いくつも塔の脇をすり抜けなんとか元の森に帰ろうとする

「はあ、はあ・・・!!!!!!」

狐は曲がり角を疾風の如く走り抜けた時  
不意に一筋の人影が目の前に立ちふさがる

「小ギツネか・・・よく入り込めたな」

狐はキキィーとブレーキをかけるが耐えきれず前のめりになり転んでしまった

すると後ろから兵士がざっと5人程やってきて  
狐の周りをグルリと取り囲み鋭利な槍を向け始める

「ネフレン!!カ様  
ようやく侵入者を捕まえました!!!!!!」

虹色のローブとファラオの冠に身を包んだ高貴な男性が虫けらでも  
見るかのように狐を睨み付けていた

「九尾のガキか・・・」

男は無造作に狐の九つに分かれた尾の付け根をがっちり握り持ち上げた

「離せ!!! わらわを誰だと思っておる!!!!!!」

逆さまになりながらも男に食ってかかるが既に目は涙目であった

「生け贄の用意だ・・・すぐに準備に取り掛かれ・・・」

男がそう指示すると兵士達は一斉に大きな魔方陣を描き始める

大の大人が軽く3人入る程の大きさだ

男が狐を乱暴に魔方陣の中に叩きつけた

「ぎゃんっ！！！」

あまりに強く叩きつけられたのか前足があり得ない方向に曲がってしまっている

狐が入った時

鋭く不気味な閃光が魔方陣から放たれる

「あ・・・あ・・・」

直後、魔方陣の円周から紫色の靄もやが溢れだし  
狐の周りを取り囲みだす

息を吸うのが苦しくなる

肺に鉛が入り込んできて

潰しているかのような感覚に襲われた。

私はそれを遠くから見ている

塔の上から片膝を立てて・・・

夢の私が重い腰を上げ男の元へ飛び降りる

「その辺にしておけ・・・」

月灯りに照らされた白く短い髪

目は鋭く、真っ直ぐ男を見つめる

その様子に周りにいた兵士が持っている槍で威嚇を始める

身体付きは筋肉質でもなくとりわけ魔術が高いわけでもない  
そんな成人にもなっていないような少年に兵士達はにじりよるが

「お前達は城に戻れ・・・どうひっくり返ろうとも  
コイツには勝てないぞ」

意外な言葉が男から飛び出す

「しかし・・・まだガキですよ・・・我々を甘く見ないでくださいよ  
!!!!」

5人の兵士は少年に向け一斉に攻撃を仕掛ける

刹那

倒れているのは5人の兵士

目の前で何が起きているのか分からず目をパチクリさせる狐に白髪  
の少年が歩みより

「解」

地面へと染みるように魔方陣が消え去り

紫色の毒々しい靄も姿を消す

「相手の力量も分からずに・・・バカモンが・・・」

男は地に伏せる兵士に向け吐き捨てるように言い  
視点を白髪の少年に向ける

「久しぶりですね・・シラガミ・・元氣そうで何よりです」

「やはりナイアルか・・その男はどうした？」

「ネフレンⅡカですか？」

フフ・・本物は何処かの墓の中にいますよ

私の目的のために「顔」の一つとしてね

でも・・どうしたのですか？ 貴方ともあろう方が・・  
こんなガキを助けるなんて・・」

「少し気になることがあってな・・・  
貰っていくぞ・・・」

白髪の少年は狐を脇に抱き抱えるようにするが  
前足が折れているので狐は苦痛で顔を歪ませ

「痛い・・」

今の状況での精一杯の声

「ん・・・足が折れているか・・フン！！」

白髪の少年の白い瞳が狐の小さな前足に移り  
折れていた前足が徐々に元の位置に戻っていく

「！！！！？」

前足が全然痛くない

どんなに体重をかけても・・



「困りますね・・・九尾の暗狐は滅多に生け贄に出来ないんですよ・  
・」

白髪の少年は狐から視線を変えずに

「なら・・・俺と戦うか？」

ナイアル・・・」

白髪の少年から燃えている骸骨が飛び出してナイアルに威嚇をした。

「冗談言わないで下さいよ貴方と私では決着が付きませんし・・・  
第一にカルコサが滅亡してしまいます

。それは私にとっては都合が悪い・・・今回は譲りますよ」

「……………」

虹色に光を放つローブが徐々に闇と同化しながら、男は言った。

「全く：相変らず反則的な身体ですね：神に狙われるのも領けます」  
自嘲じみた口調で男が言うと言霧のようにその場から姿を消し、それ  
と同時にさつきまであった万華鏡の月が無くなり鬱蒼と茂る森へと  
景色が変わっていく。

「ここは・・・わらわがいた・・・」

狐はキョロキョロと周りを見渡す  
間違いない

「さて：お前：「溟邏様（めいら）……！！！！何処にいますか……！！！！」

遠くから森林を掻き分ける音が二人の耳に届く

「わらわはこっちじゃー！！」

音のした方に狐が叫ぶと

木々の間から天狗が颯爽とやってきて地面に着地する

山伏の姿をした鳥人、赤い顔に大きな鼻を持ち

長い髭を生やした天狗がそこにいた。

「何処に行って居られた！！心配しましたぞ」

「すまん、じい…心配をかけた…」

「<sup>おさ</sup>長も大変心配しておられ…まさかこの小僧が姫様を…」

天狗は白髪 of 少年を睨み付け

並の妖怪なら失神する位の覇気をだす

しかしそんなモノが白髪の少年には効くはずもなく

興味なさげに真円を描く満月を眺めていた

「大天狗様…！！姫様はいましたか？」

わらわらと空から烏天狗がやってきて着地する

「おい！！小僧！！キサマは何者だ！？」

「別に…通りすがりの者だが…」

「おのれ！！」

その少年から見ればどいつもこいつも自分より後に産まれたガキ共にしか見えなかった。

いきり立つ天狗達でさえ、子供の戯言にしか聴こえていない。

興味があったのは、子狐が何故異空間にある「カルコサ」の大地に立っていたのかということである。

答えは、彼にとって明白であるが…

「ま、まで!!こやつはわらわを助けてくれたのじゃ  
是非とも礼がしたい・・・」

それを聞くと一斉に天狗達の態度が変わり  
謝りだした

いつの時代も同じだな…  
\*\*\*\*\*

## 九尾の暗狐の祠

「そうか・・・そなたが我が娘を助けてくれたのか・・・」

祭壇のような所で人間の5倍以上の巨体を横にさせ  
白髪少年を見下ろす

「礼を言う・・・我が名「瑞祥」  
この地の妖怪を統べる者じゃ・・・  
さあて・・・何がお望みじゃ・・・何なりと申せ・・・」

薄ら笑いを浮かべ瑞祥が顔を持ち上げる

「……………貴女方は最近、不幸が続いているか？  
例えば……………貴女の夫が亡くなったとか……………」  
少年の眼には生氣は無く、生きているのか死んでいるのかも分らない

「!?!?!?!……………確かに我が夫は暗殺されてから

よくないことが続いておる・・・何故知っておる・・・？」

やはり・・・ここに一冊あるな・・・

「全ての元凶・・・ある一冊の書物が関係している・・・恐らく貴女の娘もそれが影響して異世界に飛ばされた・・・」

「なんじゃと・・・！！！！」

大きく身を乗り出し白髪の少年を見やる

「その書物の名前は「黄衣の王」・・・見る者、読む者に邪悪なる呪いをかけるモノ・・・表紙には楔くさびのシンボルが記され蛇の皮によって装填されている・・・」

「た、確かに・・・渡りの男から貰った書物がそのような物であった・・・烏天狗！！すぐに持ってまいれ！！！」

瑞祥の命令により地下の書斎からまがましいオーラを持つ一冊の本が運ばれてきた

「まずは・・・一冊」

白髪の少年が暗黒書物に触れるとまばゆい光が放たれ視界が零に・・・

\*\*\*\*\*

ガバッ

「はあ、はあ

変な夢・・・」

月南が薄明かりの窓の外を見て呟く

汗がひどい・・・

一杯の水を飲もうと台所に移動しコップに水を注いで飲み干す

「はあ・・・」

夜明けまで後2時間



**覚醒(弐)、月南のある日(前書き)**

次回から夢編が長く続きます

次の月南の出番はいつになるかな？

## 覚醒(弐)、月南のある日

覚醒の世界

月南の牧場)

まだ動物がいないので農業を主な収入源としている  
栽培しているのは季節に沿った旬の野菜

現在は春のため「カブ・キャベツ・キュウリ・ジャガイモ・イチゴ」  
を育てている

無農薬栽培のため出荷先の街(説明は後の話で・・・)ではちよつと  
した有名な野菜である

無農薬栽培はかなり体力を使う栽培方法である

農薬を使わないのは勿論のこと病虫害にかかりにくい農作物を作る  
上記が発生しやすい環境を作らない

また連作障害(次第に生育不良となる現象)を回避するため毎年大  
量の有機肥料を施し、こまめに土の状態を管理しなければならない  
農業の最も気を付けていかなければならないのは

生態系(生物群集とそれを取りまく非生物的環境)を壊さないことだ

なかなか気を抜けない・・・

「おはよう!!!月南!!!」両手をブンブンと振りながら月南の  
牧場の南東から登ってくる(月南の牧場は社と同じく北側にある)

「おはようございます・・・奏さん・・・」



「大丈夫？なんか疲れてるみたいだけど・・・」

「いえ・・・変な夢を見まして・・・」

若干フラフラとしてゐる月南

「どんな・・・夢？」

「うわ！！・・・り、隣静さん！！いつからそこにいたんですか？」

「月南の冒頭の語りの所から・・・」

恥ずかしい所を見られていました／＼／＼／＼／

「な、なんで！！！！見てるんですか！！」

私凄く恥ずかしいですけど／＼／

「月南の・・・観察・・・」

どっから見えたのでしょうか？

「ってあたしを無視するな！！！！」

夜明けの月影の村に奏の声が餌する

そんなこんなで元の話

「月南はどんな夢を見たの？」

「えっですな〜・・・（大半忘れた）なんか・・・黒い狐を助けてました」

「黒い狐・・・!?・・・」

何やら物思いにふける燐靜

「どうしたの燐？」

「少し調べたいことがあります・・・」

スツと燐靜は向きを変え社に赴こうとする

が・・・

「あんた!! これから学校でしょ!!! バカやってないでいくわよ」

またもやズルズルと燐靜を右手で掴み奏が学校へと向かう

「そうだ!! 今度陸上部の大会があるから月南も応援に来て!! まだ出れるか分からないけど・・・じゃ、行ってきたーす!!」

「行ってきます・・・」

それを見送る月南

デジャビュ・・・?

\*\*\*\*\*

最近農具の刃こぼれが顕著になってきたので  
村唯一の鍛冶屋「光世屋」に行くことにする

朝に全ての作物に水撒きを終わらせ雑草を刈る

それが終われば村の一番南に位置する鍛冶屋へと向かう

鍛冶場が近づくにつれ

匂ってくるのは石炭の燃えていく炭素臭

見えてくるのはモクモクと長い煙突からの煙

コークス炉が大忙しだろう

「失礼します・・・国定さんいますか？」

店に入ると奥の部屋から

金属を叩く音が響いてくる月南がそう呼び掛けると

音は止み中から20代後半位の屈強な男性が姿を現す

「おお！！月南じゃねーか

どうだ俺のやった農具は役に立ってつか？」

「ええ！！重宝してますよ・・・そのこと何ですけど

刃こぼれが最近ひどいので直してただけませんか？」

月南はそつと斧と鎌を渡す

「ありゃ！！こりゃーひでーな！！・・・直してやるよ

なんたって俺の先祖は名工「光世」だからよ！！

お代は高いぜ！！？」

「・・・・・・・・分かりました・・・足りなければここで働いて返しますで・・・」

「はっははは！！！！相変わらず真面目だな！！

そんなに取らねーよ！！

友達だしな！！！！」

背中をバンバン叩く国定さん・・・痛いです

この人は「三池国定」さん

みいけくにさだ

村唯一の鍛冶屋を営んでいる

口癖は「俺の先祖は光世」

エド時代に活躍した名工が先祖らしく

表の広告に「あのイエヤスの刀を打った名工一族!!!」  
とデカデカと載っている

ホントかどうか定かではないが・・・

「こりゃー少し時間を貰うな!!!材料が足りねーから採りに行ってくる!!!」

明後日の昼頃までには完成させておくからよ」

「あ、はい!!!お願いし・・・早い・・・もういなくなった・・・」

月南がお辞儀をしている間に国定さんは材料を調達しにいった・・・  
・さすが仕事人三池国定（彼女募集中）

\*\*\*\*\*

さあて農具が修理に出されたので久々に真槌家の本堂に向かい経過  
を報告することにした

真槌家 本堂へ

「いやゝわざわざ来てくれるなんて嬉しいな!!!」

「いえいえ、お世話になってますから」

「嬉しいね、燐静は全然しゃべらないからつまんないんだよ!!  
この前なんて娘の気を引くために「燐静!! リンスせい!!」とい  
うだじゃれを言ったら……」

「寝ます……」

あれは実の父親に向ける目ではなかった  
(どんな目で見たのか皆さんのご自由に)

遠い目を見る哀愁の父親

「そ、そうですか……」

燐静さんが無言になったのは父親のせいでは!!

と突っ込みたかったが我慢

もうわかつていると思いますが

この人は真槌家 当主

真槌 清孝さんであり

燐静さんの父親である

「さて……牧場の仕事はどうかね？」

社の縁側に二人で腰かけ

清孝さんは話を切り出す

「まだ牧場には程遠いですけど……全力を尽くしたいと思っ  
ています」

苦笑しながらも答える月南を見ながら清孝は

本来の仕事の目で月南を見ていた

（やはり・・・この子の霊力は常人を遥かに超えているな・・・  
ここまで高いのは・・・「ボリア一族」しかない）

清孝が思っているボリアとは

この世界の礎を築いた男の名前である

現在 ニホンを支配しているのがこの「ボリア一族」と言っても過言ではない

月南の正体は・・・？

それを語るには月南の夢の世界の話をしなければならない

しばらく・・・覚醒から夢の世界へと視点を変えなければならない

真槌月南↓シラガミ

## 覚醒(弐)、月南のある日(後書き)

幻神月花      オマケ

月南「紀久さんに国定さん・清孝さん・・・

なんか・・・この村の人達は調子のいい人が多いですね」

奏「もう！！お父さんは本当に！！！！夕食の時間が一番うるさいのよ！！！」

燐靜「同感・・・」

奏「だからついつい・・・月南に普通の会話求めちゃうのよ！！！」

燐靜「同感・・・」

月南「そ、そうだったんですか・・・」

ダブルパパ「「はは！！娘よ

その血は確実に受け継がれているのだよ」」

奏・燐靜「絶対！！！！嫌！！！！」

月南「はは・・・」

**夢(?)、シラガミの正体(前書き)**

今回から少し長めの夢編になります

本日鼻血が二回出ました

貧血気味です(弱っ!!!!!!?)



## 夢(?)、シラガミの正体

夢の世界

シラガミが暗黒書物「黄衣の王」を手に入れてから  
数日後

暗黒書物に認定されているモノは全部で12冊  
どれも邪悪極まりない本である

ある書物は見ただけで発狂し  
またある書物は「カニバリズム（人肉を食らう）」推奨本

その中でもシラガミが手に入れた「黄衣の王」は読む者に発狂と死  
をもたらす本であり

「カルコサ」の地へと誘う暗号が描写されている

不可解な台詞が並ぶ本であり常人には理解出来ない箇所がほとんど  
である

「次はこちらの町じゃな!!」

シラガミの一步先に行くのは髪が漆黒の長い髪に気の強そうな目付  
きをし妖麗の美しさを持つ女性がいた

身長はシラガミと同じ位で暗黒書物を巡る旅に無理矢理引っ付いて  
きた

九尾の暗狐の子供である  
溟邈であった

溟瀛は嬉しそうに鼻歌を交えながら歩みを進めている

どうしてこうなったというと・・・

話しは瑞祥の祭壇の所に時間が戻る

黄衣の王を手にいれ

その場から帰ろうと踵を返した時

「わらわはそちが気に入ったぞ・・・わらわも旅に同行したいのじやが!!?」

巨大な狐の瑞祥の脇から

顔を出したのは黒い髪を生やした年若い女

「姫様!!それはなりません!!どこの馬の骨とも分からない男におのこ姫様を預けるのは!!!!」

「なんでじゃ!!!わらわの勝手であろう!!」

わらわは意見は変えんぞ」

大きく開いた口から鋭い犬歯が顔を覗かせる

どちらも一歩も譲らない

状況に長である瑞祥が白髪の男に質問をする

「そなたの名は何と申す？」

一番困る質問が来たと白髪の少年は目を細めた

（俺の名前はここまで・・・届いていないと信じて  
言ってみるか・・・）

「・・・シラガミだ・・・」

「!!!!!! な、なんじゃと」

その言葉に反応したのは  
瑞祥と天狗達

「?？」

溟瀛はよく分からない感じにシラガミと瑞祥の顔を交互に見る

「・・・あの大战の総大将が・・・まだ生きておったとは・・・」

「・・・・・・・・」

「お待ちください!!」

長様・・・その者は偽物ではないでしょうか？

あれを生き残るのは・・・」

「馬鹿者!!!! 偽物が名を語るほど安い名ではない  
第一にあの男がそれを許さん!!!!」

まずったな・・・ここまで俺の名前が知られているとはな・・・

あの大战のせいか・・・

かつてこの大地に歴史上

類を見ない恐ろしい戦いが行われた

ノーデンス率いる旧き神軍とクトゥルフ率いる旧支配者との戦いであった

この戦いは当初はこぜり合いであったが

ある二人が両者に入ってから全世界を巻き込む大戦へと発展してしまった

クトゥルフ側にナイアル

ノーデンス側にシラガミ

この大戦は旧き神が負けてしまったと文献に残されているが事実かどうか信憑性が薄く

世界中の人々の記憶に深く刻まれたのは

「ナイアルとシラガミには逆らうな」であった・・

現在の生きる者にはこの二人の名はビッグネームであり

一部の地域では崇拝している人も少なくない

二人の姿を実際には見た者は少ないが・・・

~~~~~

「まさか・・伝説の者が我が子を助けてくれるとはのう・・・気に

入ったぞ・・・どうじゃ・・・溟邏を連れて行ってやってはくれんか？  
まだ年若く経験が未熟なのだが・・・なかなか頭も良い邪魔にはならんぞ」

微笑を浮かべシラガミの方を見る瑞祥

シラガミは少し悩むフリをしつつ

「ダメだ！！・・・ガキの遊びではない・・・危険すぎる・・・というのが建前だが  
今は少しでも仲間を増やしておきたいからな・・・  
ただし！！自分の命は自分で守って貰うぞ・・・」

\*\*\*\*\*

まあ、そんな感じに話しが決まり  
半ば強引に引っ付いてきた溟邏だったが

あまり森から出たことがないのか  
人間の作った人工の看板などにも興味を示し

「ふむふむ・・・」この先セイレム 魔女立ち入り禁止」とな・・・  
魔女が出るのか！！恐ろしいのお！！」

黒い狐の尻尾を横に振りながら文字を読んでいく溟邏

「そろそろ町に着くから  
尾と耳を隠せよ・・・それとこれからは俺の名前は「エイボン」と  
呼べ・・・」

「ん！！なんでじゃシラガミ？」

おそらく後者の質問だろうな（現に今使ってきたし）

「俺の名前は結構有名だし崇拝者も少なからずいる  
余計な混乱を避けるためだ・・・」

「わかった・・・シラ・・・エイボン！！」

今「シラガミ」って言いそうになったな

ただいま向かっている町は「魔女狩り発祥の地 セイレム」である

ここに暗黒書物の一つがあるということを感じとったためだ

町に入ると異様な空気が二人を包んだ

入口には誰もおらず

町全体が静かなのだ

旧イギリスのモダンな印象を与える家は何軒も立ち並ぶ中

一斉に町人の怒号ともべき叫びが町の奥から響いてきた

「なんじゃ・・・？何がおきたんじゃ？」

「おそらく・・・」

シラガミと溟邏は声のする方へ向かっていくと

ある小さな一軒家たいまつに松明を持った大勢の町民が取り囲んでいた

「魔女はこの家に潜んでいる!!」

魔女はこの町を生け贄に悪魔を召喚しようとしている魔女に鉄槌を  
!!

魔女に神の怒りを!!!!」

町人は声を揃えて言っていた

魔女狩りである

ここでセイレムの闇の歴史をお話しよう

ここセイレムがまだ村だったとき

得も知れぬ奇妙な発作を起こした村の牧師の娘を含む少女たち。

その原因が魔術にあるとされ、疑いをかけられた三人の女性が魔女  
として逮捕されたのである。

事件は周辺地域にまで及び、容疑者は二百名にまで達したそうだ。

ある者は獄死し

またある者は絞首刑に

殺されているのは魔女ではないのに……

人間が一番残酷だね

~~~~~

「あ!!<sup>おなじ</sup>女子がつれだされてきおったぞ……何をされるのじゃ?」

「大方・・・魔女裁判にかけられるな・・・100%有罪にな  
ってな・・・」

その言葉に驚く溟邏

「な、何故じゃ!!!??

あの者は人間と変わらないのじゃぞ・・・なぜ魔女にされなければ  
ならぬ!!!!」

「人間の歪んだ恐怖心だ・・・一度そう言われれば  
弁解はできない・・・」

魔女裁判は酷いものだ

大抵が拷問じみたもの

例を挙げるなら

「魔女でなければ火で身体を焼かれようとも無事であるはずだ!!  
!」

と言われ

赤く鉄がドロドロ溶けている窯に無理矢理  
足を入れさせたり

目玉を剝り貫かれたり

・・・

キリがないな

「それに・・・こんな馬鹿気たモノを広めたのはアイツだしな・・・



まあしょうがないな」

「誰なのじゃ？その者は・・・」

「・・・お前を殺そうとした奴さ・・・ナイアル  
アイツはこういうことが大好きなんだよ・・・」

人間の狂気が奴を喜ばせる・・・さて、そろそろ行くぞ！！  
図書館を回らないといけないからな・・・

魔女狩りで警備が手薄になるからちよいどいい・・・」

シラガミが踵を返してその一軒家から離れようとする

「ま、待つじゃ！！」

助けなくてよいのか？

か、可哀想ではないか！！！！あの者には何の罪もないのじゃぞ！！！！」

溟邏の発言にシラガミは歩みを止め

「・・・助けてどうする？

今回助けたとしても・・・魔女狩りは続くぞ・・・

お前の自己満足に付き合うつもりはない・・・

それとも・・・全員助けるか？」

「え・・・！！？」

「半端なことは止めろと言っているんだ

助けないのなら無視

助けるのなら全員だ

どうする？」

諭すように話すシラガミ

百戦錬磨の彼だからこそ  
言えることだ

冥邏は頭を右手で抱え少し悩んでから

「半端なことはせん!!」

わらわは全てを助ける!!

迷いはない!!」

「だと思ったよ……まあ行動を起こすのは  
今夜かな……夜には拷問が始まるから……そこを狙う……」

詳しい話は後でいいかな？

## 夢(?)、シラガミの正体(後書き)

幻神月花      オマケ

溟羅 「どうもじゃ!! 今回から仲間に入った九尾の暗狐溟羅じゃ」

シラガミ 「暗い所では瑞祥と見分けがつかない」

溟羅 「色々勉強になるの!! わらわも修行をせねば」

シラガミ 「今どきの古典的な喋り方」

溟羅 「なんじゃ!! さっきから  
言いたいことがあるならはつきり申せ!!」

シラガミ 「いや・・・時代的に古いかな(獣娘) と思ってな・・・  
狼の香辛料とかぶる気がしてならんな」

溟羅 「うっ!!」

溟羅 「わらわが大活躍する話を書くんじゃぞ!!!!」

作者 「は、はい・・・」

あの(汗)・・・牙が刺さって痛いですけど・・・」

溟羅 「はあっ!!!!?」

作者 「なんでもないです・・・努力します・・・」

**夢(?)、魔女狩り(前書き)**

長らくお待たせしました

次回は覚醒の世界です

いよいよそちらも動きだしますよ

夢(?)、魔女狩り

深夜

満月が不気味に世を照らす

おり

うっすら見えている

それ以外は暗闇の静寂に包まれるものしい雰囲気

この闇は人間の恐ろしい所業を全て隠しているのだ

セイレムの町

# 教会の地下3階

神の審判部屋とされた所に蝋燭の灯りがボンヤリと部屋を照らす

ない

「……………！！！！つ！！！！………んっ！ん！！！！」

一人の若い少女が手足を縛られ涙を流し懇願するが

喋ることが出来ないのか口からは空氣の漏れる音しか聞き取れない

なっており全く抵抗することが出来ない状況であった

少女を取り囲んでいるのは一人の神父らしき人物と二人の修道士

神父は片手に聖書を開き

「汝、魔女と認めるか？」

つとあまりにも冷たい口調で言い放った・・・少女は恐怖に身を震わせ涙を流しながら首を横に振り  
必死に人間であることを主張する

が・・・

「キサマ!!!! まだ認めんのか!!!! 忌々しい魔女の分際で!!!!」  
聖書を開いている神父のすぐ隣にいた修道士が手にもっていた革製の鞭で思いつ切り少女の右頬を打つ

少女は半強制的に自分の左方向に顔が向けられてしまい少女の美しい頬に残酷にもつけられた鞭の跡が三筋の傷となり  
赤い鮮血が滲む出ていた

「フーッ!! フーッ!!」

次第に呼吸が荒くなっていき手足をガチャガチャとするが  
鉄製の鎖に勝てるはずもなくダラリと身体から力が抜けていき  
再び元の姿勢になってしまう

「これこれ・・・あまり手荒にするでないぞ  
まだ聞きたいことこの娘にはあるからな  
アレを持ってこい・・・」

神父姿の男性が修道士にそう指示を出すと  
奥の拷問部屋からあるモノを抱え少女の前に立ち  
神父に渡す

神父はゆつくりと少女の利き腕とは反対の親指に装着した

少女は抵抗する事が出来ない。血の気の失せた目で左手を見やる。

「さて・・・この娘は何本まで耐えることが出来るかな？ お前が魔女と認めるまで何度でも・・・潰すがな」

そう神父が言った途端に少女の全身に激痛が襲いかかる

「……………」

「んっ！……！」

!!

親指が万力の力により押し潰されていく

「指締め」である

古来より尋問などに用いられる拷問器具であり、公式に拷問と記録されないため「尋問の口割り」の道具として扱われている。

この尋問は想像絶する苦痛に伴うモノであり

最初の一本を潰されても他の指に拷問器具が移るため精神的にもキツイ

「  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
ツ  
！  
！  
！  
！  
！」

ギリギリと親指の肉を潰し骨が軋む

少女はあまりの激痛に首を四方八方に振り苦痛から逃れようとするが無駄であつた

グ  
チ  
ユ

「――――！！！！！！」

親指が完全に潰れた・・・

少女は息も絶え絶えとなりあまりの激痛に意識が混濁していく

直後、残酷な言葉

「まだ認めんか・・・次は人差し指だな・・・」

その言葉を聞くと少女は目を大きく見開き

あからさまに首を横に振りながら手足に力を込めるが頑丈な鎖と椅子はそれを許さない

ぬちゃっ・・・

もはや原型を留めていない親指から指締め器具を外しにかかった

ここまでになってしまうと解放されて重力の作用で激痛が少女の顔を歪ませる

「さて・・・早く認めないと指が全部雑巾になってしまうぞ・・・」

少女の人差し指に拷問器具がつけられ始める

イヤ・・・コンナノイヤ・・・

少女が顔を横に向けきたる痛みに備えるが・・・

ドオオオオオオオオオ

突如として地下の尋問部屋の天井が大きく崩れ



二つの影がなだれ込んで来た

一人は白髪を頭に宿した若い少年

もう一人は黒くしなやかなカミを持つ女性

「そこまでだ・・・」

白髪の少年 シラガミがそう切り出す

「だ、誰だ!!!? キサマら!!!! ここは神の代弁者であり  
神聖なる現人神 あらびとがみ ナイアル様の御霊であるぞ!!!!」

アイツが神だと!!!!

ふざけるな!!!!

「よくあのバカ（ナイアル）を信用したものだ・・・  
アイツはお前達を只の暇潰しにしか見ていないのだぞ・・・」

アイツは元々、空間を造り出すのが得意だから・・・  
人間から見れば神に見えるか・・・

くだらない!!!!

くだらない!!!!

「キサマ!!!! ナイアル様を侮辱するのか!!!!  
今に神罰が下るであろう」

神父がそう言い終わるか終わらないかで  
先ほどまで少女を虐めていた修道士がシラガミにより瞬殺され力な  
くグッタリしていた

すぐさま、シラガミは神父の男との間合いを詰め

一気に拳を人体の急所である鳩尾みぞおちに沈める

「グアアーーーー！！！」

神父は吐瀉物を吐き散らしながらその場で転げ回る

「気絶出来ないように手加減した・・・まあ、胃に穴を開けたから地獄の苦しみだろうがな・・・」

真っ白な瞳が冷酷に神父を見下ろす

「大丈夫か？お主・・・」

溟邏が椅子に縛られている少女の鎖を破壊（さすが妖怪・・・」

少女の視界が一気に狭まり溟邏の腕の中で意識を失ってしまった

溟邏はもしかしたら死んでしまったのではないかと慌てたが無事呼吸を確認してホッとす

「随分弱いな・・・黄衣の王を使うまでもない・・・」

セイレムな町がこの事態に気付くのはまだ先である

\*\*\*\*\*

「シラガミ・・・この後どこに行くのじゃ？

暗黒書物とやら此処にあるのじゃろ？」

まだ夜も明けきらぬセイレムの町にケガをした少女を背負い移動するシラガミ達

「・・・この町で魔女狩りが始まっているとなると・・・ここにはなさそうだな・・・」

知り合いがこの町にいたんだが・・・処刑されたかな？

とりあえずこの町から離れ・・・」

突然歩みを止めるシラガミそれにつられて少女を背負う溟邏も足を止める

「・・・見つけた・・・そうか「アーカム」に逃げたか・・・  
アイツも利口になったな・・・」

シラガミは上空にぽっかりと浮かんでいる満月を眺め

「アンサズソウイルカノオシュリカ（オーディン神の太火により世襲されし大地）・・・」

シラガミが呪文のようなモノを詠唱すると

先ほどまで遙か上空にいた満月がみるみるシラガミ達の方へと雲を掻き分け迫ってきたのである

溟邏には不思議と恐怖心はなかった

動物（妖怪も含め）達は自分の考えの範疇を<sup>はんちゅう</sup>超えてしまうと

凄まじい集中力を発揮し

コンマ数秒の時間でも瞬時に自分が今まで成長してきた過程が頭の中を駆け巡る

俗に「走馬灯」と言われる現象に溟邏は囚われたのだ

満月が落ちてくるのは数秒も無かったが

溟邏は自分を少なからず振り返ることにはなった

視界が全て黄色い満月一色となる

気が付くと先ほどまでの満月はなくなり

漆黒の闇に灯りがポツポツとある建物が軒を連ねていた

明らかに先ほどいた「セイレム」ではない

古くから伝承されてきた駒形切妻屋根の家屋

河（ミスカトニック河）を挟んで南北に分かれた地形  
全てが黒一色であった

前に訪れたカルコサとは違い

どちらかと言えば地味な印象を与える

「おやおや・・・久しぶりの客人だねえ・・・

此処は闇の住民が集まる町「アーカム」じゃよお

ワシの魔術の実験材料にしてやろうかえ？

ヒィッヒヒ・・・」

大きな建物の扉からしわくちやの老婆が覚束ない足でシラガミ達に  
近づいてきた

「久しいな・・・ギザイヤ・メイスン・・・てっきり魔女狩りで処刑  
されたと思ったぜ」

シラガミが前に出て服のポケットに手を突っ込みながら老婆を見る

「！！！！シラガミ！！！！」

しゃがれた大きな老婆の声が闇に吸収されていった

\*\*\*\*\*

## 老婆の家

「フエツフエフエフエ・・・まさかシラガミと会うことになるとう・・・」

老婆が黒い豆を潰し飲み物のようなモノを作り（コーヒーのような感じ）

人数分ガラス張りのテーブルに並べていく

「300年ぶりくらいか・・・  
お前も老けたな・・・」

「フエツフエフエフエ・・・アンタと比べないでくださいじゃ・・・  
シラガミも昔のような金気を帯びた髪、深い蒼眼  
も色を失い真っ白になりおって・・・」

凄く親しげの老婆とシラガミ  
普通の人から見れば祖母と孫と言われても何ら遜色はない

「???」

気を失っている少女をベッドに寝かせたまま肩に変な力が入ったままの溟邏

事態が飲み込めない・・・

「スマヌ・・・お主らどういう関係なんじゃ・・・？」

「ん・・・あ！・・・言ってなかったな・・・」

コイツの名前は「ギザイヤ・メイスン」 本物の魔女だ・・・まあ、簡単に言えば学友つまり・・・学校の同級生だ」

ど、同級生ですとお！！！！？

不思議なモノを見るようにメイスンとシラガミを交互に見続ける  
溟邏

「ええ！！！すまん話しがぶっ飛び過ぎてよく理解出来ておらん・・・」

「フェツフェフェ・・・混乱するのも分かるのお・・・見た目はこんなにも違うがワシとシラガミは同じ年齢じゃよ・・・確か・・・526歳くらいじゃったかのお・・・」

「おっ！？・・・もうそんなになるのか？  
200歳までしか数えてなかったが・・・」

口があんぐりと空いたまま固まる溟邏

化け物・・・？（お前が言うな）

「それにしても・・・その少女はどうしたんじゃ・・・？」

メイスンはベッドに横になっている少女に視線を向ける

「・・・お前の身代わりになりそうになった娘だ・・・  
アイツはお前を抹殺しようとしたのかもしれない・・・」

メイスンは老婆の目を大きく開き  
そして目を細めて意味深に話します

「ナイアルか・・・お主と双壁を成す天才だったのじゃが・・・」

「メイスン・・・ぶしつけで悪いが・・・お前の所有している暗黒書物を渡してくれないか・・・？」

「シラガミ・・・お主まだ・・・」

兄の仇を探しているのか・・・エイボン・ボリアの仇を・・・」  
暫く沈黙が降り掛かる

すると

今まで気を失っていた少女が目を覚まし不思議そうにシラガミ達を見ている

「お！！気が付いたようじゃな！！！！」

溟邏が嬉しそうに少女の目の前にグイッと顔を出す

「・・・・・・・・！！！！？？？」

キョロキョロと周りを見渡し此処がああ恐ろしい拷問部屋とは違うと一瞬だけ  
ホッとするが

ズキンッ！！！！！！

忘れていた親指の潰れた激痛が覚醒と共に脳天に突き刺さる

「~~~~~！！！！！！」

左手の手首を掴み大きく顔を歪める  
冷や汗が尋常じゃないほど出ていた





「!!!!」

「メイスン・・・そこをどけ  
この娘を治す・・・」

シラガミはメイスンを後ろにやり、少女の寝ているベッドに近づく

少女は上半身を起こした状態であり

自然と少女との視線が合う

シラガミは少女の頭に手を置き

真っ白な瞳の目を閉じ

右手に力を込める

すると・・・ボンヤリと青白い光が右手に纏いだし

少しずつ少女の頭に溶けだしていくようであった

しばらくはそんな情景が空間を支配する・・・

「これでいい・・・声を出すのは自分しだいだ・・・  
後は左手の親指か・・・」

そう言うときシラガミは布団から優しく左手を出し

その手にシラガミは両手を翳す（かざす）

「修復開始・・・」

今度は緑色のボヤ～とした淡い光が少女の損傷した親指を優しく包みこむ

信じられないことにボロ切れのようになった親指が綺麗な形に整い

健康そうな色へと変貌を遂げた

目の前で起きた奇跡の所業に少女は目をパチクリさせ自分の指とシラガミの顔を往復させていた

「・・・久しぶりに回復魔術を使ったな・・・成功してよかった・・・」

徐々に明らかになるシラガミの正体

月南とシラガミとの関係は？

## 夢(？)、魔女狩り(後書き)

幻神月花      オマケ

新コーナー      シラガミ新喜劇

目指せ復興収入      1億円

溟邏が座長を務める  
異色の旅芸人集団

シラガミ新喜劇

「ももたろう」

むかし、むかし

あるところにシラガミという少年が住んでいました

シラガミが川へ洗濯しにいくと

「なんで・・・俺がこんなことを・・・ブツブツ」

川上の方からどんぶらこ

どんぶらこ

それはそれは大きな桃が流れてきました

「でかい・・・桃だな」

シラガミはそれほど桃が好きではないので洗濯を続行  
桃は川下の方へ流れていきました

めでたし　　めでたし

「待てえーい！！！！　拾わんか！！！！　話しが進まんではないか！！！！」

川下の方から桃が凄いスピードでシラガミに突進を繰り返す

「・・・・・・イタッ！！」

だって拾ってもそんなに食わないし  
半分以上確実に腐るし・・」

「ええい！！　食わんくていいから拾って中身を取り出すだけでよい  
のじゃ！！！！」

その後わらわが大活躍するのじゃ！！！！  
台本をしっかりと読め！！！！」

シラガミ新喜劇

ももたろう

おばあさん？　　シラガミ

桃　　溟羅

「終わり！！！！！！！！？」

まだまだ道のりは険しいぞシラガミ新喜劇

## 覚醒(参)、ボリア一族(前書き)

覚醒編の新キャラを宜しく!!

やばい・・・女しかない

オマケ編もパワーアップ

## 覚醒（参）、ボリア一族

覚醒の世界

（うーん・・・やっぱり夢の内容が続いている・・・  
シラ・・・ガミだっけ・・・？

私が見る視点は・・・）

一際難しいそうな顔をする月南

はたから見れば恋煩いしている金髪の美女にしか見えない

「すげーぱつきん美女が歩いているぞ！！！！」

なんか悲しくなる・・・

月南が現在訪れているのは月影の村から電車を乗り継いで約1時間  
ほどの大都市「溟神都市<sup>めいじん</sup>」

ニホンの科学技術が集中する主要都市であり  
科学技術を急速に発展させた人類史上最高の天才「エイボン・ボ  
リア」を発端とする俊英なる一族

「ボリア一族」がこの世界を引っ張っている

エイボンは人類の進化を700年早めた大天才、文句をつける輩も  
いない程

没後200年経っても未だに人気は衰えを知らない

「まあ、私には関係ありませんね・・・」

月南はポケットに入れてある小さなメモ帳を取出し  
今日の予定を再確認する

月南がこの都市に来たのは主に買い出しである（月影の村にはそんなに売っていないため・・・）

さすが科学主要都市と言われるだけあって

新種の野菜の種等が毎月売りに出されている

「栄養満点　ゴーヤバナナ」

「新感覚　トマトとスイカを合わせた　スイート」

なんだかいけない融合を見ているようです・・・

アヤシイ商品を横目に月南は苦笑いをしつつ通りすぎる

とその時・・・

「君、かわいいね」

月南の目の前に現れたのは同じくらいの年齢の女の子が明らかに不良の男

3人に囲まれていた

（た、大変だ！！前にテレビで見たことがある「ナンパ」というモノだ・・・）

ナンパされている女の子は帽子をかぶり

黒の薄手のTシャツ

青色のジーパンを身に付けていた

ここまでであれば男と思うかもしれないが

この子には結構大きめの胸があり、月南はそれで判断したのである

髪は帽子を少しはみ出す程度の長さで色までは確認できない

女の子は髑髏がプリントされた服の腰元に左手を当てうんざりした顔で不良達の方を見ていた

「そんな帽子より

俺らがもつとイイモノ買ってやるよ……

それか……俺らといいことしちゃう？」

不良の一人は女の子の大きな胸をいやらしい目で見る

(た、助けないと……)

月南が意を決して不良達の所に行き

「やめてあげ「うるせーな!!!!オレに構うな」

都市に響く女の子特有の高い声

月南の声を遮断したのは

絡まれている女の子

「だから、てめえらはクズなんだよ!!!!

少しは自分の能力を上げる努力をしやがれ!!!!」

……へえ!!!!!!?……

女の子は身を屈め不良の懷の中に入り

強烈なボディーブロー!!



次々と不良を手際よく片付ける帽子をかぶった女の子  
・・・・・・・・・・凄いです・・・・・・・・

「ちっ!!弱いな・・・・・・・・!!」

もつとエイボン様を見習うんだな・・・・・・・・」

両手をパンパンと叩きあい埃を払う

あまりの出来事に固まる

月南

「・・・・・・・・ますます私の尊厳が・・・・・・・・（男として）」

そして落ち込んだ

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・!!!!やべえ

待ってくれ・・・・・・・・これは違うんだ!!!!」

少し遠くで落ち込んでいる月南を見ると

女の子が急に狼狽え（うろたえ）出す

「えっ!!!!!!?」

女の子は月南を抱えあげるように抱き

脱兎の如く走り出す

私・・・・・・・・男なのに・・・・・・・・（涙）

女の子に軽々持ち上げられ尊厳は奈落の底へ

女の子は凄まじいスピードで都市の街を忍者のように駆け巡り  
どこかの物置小屋に月南を押し込み

月南を固定するように上に乗り押さえつける（凄い力）

「な、なにするんですか／＼／＼／＼？」

「スマン・・・親父への報告は止めてくれ！！！」

今日は結構やり過ぎて・・・小遣いがヤバイんだ！！」

何のことですかー！？

「これ以上無くなったら・・・オレは・・・ん！！！！？」

お前・・・見ない顔だな・・・新入りか？」

月南を押さえた姿勢のまま問う

顔が近いです・・・

「・・・何の話ですか？

グズッ・・・（情けないやら悔しいやら）・・・放してくださいよ」

月南が人違いと分かるとすぐに解放

\*\*\*\*\*

「す、スマン！！！！人違いだった悪い！！」

それにしても・・・我が一族以外に金色の髪を持った者がいるとは・  
・

オレは初めて見た・・・」

なんとか解放され

月南と女の子が向かい合うように座っていた

「私の髪は普通の人とは違うのですか？」

「金気の高貴なる髪

深き蒼眼……これはボリア家の証拠ともされている……自己紹介が遅れた

オレの名前は「ノゾミ・ボリア」

尊敬する人物はこの世界を造り上げた天才「エイボン・ボリア」だ」

そんな特徴があったのか……（月影の村にはあまり届かない情報）

「ノゾミさん……私を誰と間違えたのですか？」

気になる質問をノゾミにぶつける

「……ボリア一族の誰かかと思って……親父にオレが暴れたこと知られるとマズいからよ……」

ノゾミはあぐらで座り

悩んでいるかのように手を頭におく

女性はそんなことをしてはいけません

「さっき話したことは本当か？」

記憶喪失……だと……」

「はい……自分が何者か分からないのです……一応、今の名前は「真槌月南」なんですけど……私の正体って……ボリア一族と関係が……」

「……ぶっちゃけ言うと

ボリア一族の特徴はそれだけじゃねーんだ……これは秘密の部類

に入るけど・・・」

ノゾミが深くかぶっている帽子をおもむろに取り出すと

ピョコッ

頭为天辺から二つの二等辺三角形をした狐の耳が自己主張している

「え・・・獣耳・・・?!」

ノゾミは器用に耳を動かしながら

「これがもう一つの特徴だ詳しいことは知らないが・・・何処かで妖怪の血が入っているらしい・・・あまり役に立つ情報じゃねーけど」

「そうですか・・・やはり私の正体はわからずじまいですね・・・」

まだわからない

ここに来て・・・2年

はあ・・・と落ち込む月南にニコニコと視線を交えるノゾミ

「あの・・・どうかしましたか？」

「いや、久々に見たなあと思ってな・・・オレって結構男っぽいだろ・・・こんなかわいらしい女の子に憧れてるんだよな・・・勿論、一番はエイボン様だけだな

まあ、友達からよろしく

月南ちゃん（・・・!!!!）」

「・・・・・・・・・・」

「ん！！どうした？」

プルプル・・・

「私は、男です！！！！！！」

月南の叫びが天まで<sup>こだま</sup>飮したような衝撃が・・・  
まあ、月南・・・無理ないって・・・

次回 暗黒書物を巡る旅「夢編」のシラガミ達に新展開が・・・

## 覚醒（参）、ボリア一族（後書き）

幻神月花      オマケ

世界を制すシラガミ新喜劇

登場人物

シラガミ      主に企画担当ムチャ振りの名士

溟邏      団長だが騙され役

燐靜      無言の鬼プロデューサー

シラガミ新喜劇

シェフ溟邏スペシャル

シラガミ「どうも・・・皆さん・・・これから夏に向かうに従い旬の野菜を使った

料理をご紹介しますと思います・・・では、紹介します「シェフ溟邏」です」

溟邏「どうもじゃ!!! 今回はわらわの手料理をふんだんに使った料理を見せることにするかのう」

シラ「では移動を開始します・・・」

車で目的地まで行くご一行

題、世界一長い料理番組

移動中、だんだんと道が無くなり  
しまいには土手を走っているかのように車内では四方八方に揺れて

いる

何処に行く気だ……

燐靜「着きました・・」

と降ろされたのは月南の農地

溟瀛「……?……」

しばらく訝しげに月南の牧場を眺めていると  
ある看板が目飛び込んできた

「シラガミ新喜劇 開墾予定地」

急に始まった新シリーズ

次回 料理!?!? まずは野菜だろう!?!?!!

開墾編

**夢(？)、暗躍(前書き)**

さあ、始まるザマス

行くでガンス

ムガァー

特に意味なし

幻神月花    スタート



## 夢(?)、暗躍

夢の世界

アーカムのギザイア・メイスンの家の前

「ホレ・・ワシが保管しておいた暗黒書物「無名祭祀書ナコト写本・屍食教典儀」

そしてお主の兄 エイボン・ボリアが書いた「エイボンの書」じゃ・  
・・・・」

メイスンが四冊の本を手を抱えシラガミへと渡す

「スマンな・・・無理を言って・・」

「いいのじゃ・・ワシが持っていたとしても役には立たんからのお・  
・」

暗黒書物は邪悪な魔術を封じ込めておる

不適な輩がそれを狙っているという噂が絶えぬから  
気を付けるのじゃぞ・・・」

「わかっている・・・・」

シラガミが持っている数冊の暗黒書物を眺める

手に入れた暗黒書物

無名祭祀書・・・別名「黒の書」 世界中の隠された伝承や秘

儀などが集約された書物表紙は鉄枠に黒い革

ナコト写本・・・情報断片集。邪悪なる神々の詳細が書かれている

ナコトの意味は現在も不明

屍食教典儀・・・降霊術、人肉料理など反人徳的な記述が多くある

「エイボン・・・兄貴・・・」

（男なら悔いのない人生を生きろ！！）

懐かしい兄の言葉がシラガミの脳裏をかすめる

エイボンの書・・・シラガミの兄 エイボンが残した

深遠な呪文、儀式、典礼の集大成

暗黒書物の中でも魔力はトップクラス

シラガミは四冊の書物を自ら造り出した蒼色の空間の穴に投げこんだ  
これで好きな時に取り出せるのとむやみに暗黒書物が人目に触れる  
のを避けるためだ

（見ただけで人を狂気に落とすのもあるため・・・）

グイッ！！

「ん・・・？」

シラガミの黒い服の後ろ部分を誰かに引っ張られる感覚がよぎり  
首だけを回して確認すると魔女狩りの時に助けた  
少女が恥ずかしそうにシラガミに引っ付いていた

少女の名前はカムナギという名前らしい  
生まれつき話すが困難であり、そのことで魔女とされ迫害を受  
けていた

年は12歳ほどで両親はいないとのこと

拷問を受けていた時にシラガミと溟羅に助けられ二人を慕っており特にシラガミは魔術で少女の話し能力を回復させたり潰れた親指を再生させたのでとても懐いている

カムナギはシラガミの腰元に両手を回し嬉しそうに顔をこすりつける  
スリスリ

「では・・・メイスン世話になった・・・」

シラガミは表情の乏しい顔のままメイスンに一礼するとカムナギに気を遣いながら踵を返し

アーカムの次元の裂け目を造りだした

「シラガミ・・・次の目的地はどこに行くのじゃ・・・？」

黒い髪をなびかせシラガミに付いて行く溟羅

「次は・・・ネクロノミコンを手にいれるつもりだが・・・」（シラガミはカムナギの方を向き）  
「お前も来るつもりか？」

元より帰る所が無くなった少女は嬉しそうにニコツと笑い首を縦に振る

「そうか・・・」

シラガミ達は次元の裂け目から元の地上へと移動した

現在 ネクロノミコンが所蔵されている場所

「無名都市」へ

\*\*\*\*\*

セイレムの街から離れ一向は西南へと向かい  
その日は日没となり野宿することになった

焚き火をたき獣（我々の世界で幻獣に位置するモノ）  
焚き火のパチパチという木を焼く音が辺りの静寂に包まれる中

溟漚がとある質問をシラガミに言った・・・

「お主は・・・何故暗黒書物というモノを集めておるのじゃ・・・  
？」

シラガミの膝の上には微睡んでいるカムナギがいた

「・・・強いて言えば・・・仇・・・俺の兄 エイボンは「外  
なる神」という化け物に命を絶たれた・・・そいつらの情報が書  
かれているのが  
この世に存在する12冊の暗黒書物・・・」

外なる神・・・現在不明の存在  
人間の理解を遥かに超える

「外なる神・・・？」

溟漚は今までに聞いたことのない単語に首を傾げた

「・・・あ！！そうじゃ！！  
もう一つよいか？」

先ほどの魔女はお主と同じ年齢と言っておったが  
どうしてお主は若い姿なのじゃ？」

シラガミは髪こそ白いが

見た目で言えばまだ十代後半の風貌である

「・・・これか・・・輪廻学を修めているからだな・・・

これは輪廻の理ことわりから外れる学問・・・要は妖怪に近づくことだ」

「そんな学問が・・・!!!!」

「まあ、誰にでも出来るモノではない・・・俺の所でも4人しか  
いなかった・・・

そいつらは裏の世界では重鎮になっている・・・

「ソロモン」「オーデイン」「ナイアル」そして俺・・・  
凄まじいメンバーである

「・・・全て聞いたことがある名じゃ!!  
お主・・・それほど凄かったとは・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

溟邏の尊敬の眼差しとは打って変わりシラガミは複雑そうな顔をする

気になるのはナイアルの動き

奴は急に人が変わったように地獄の研究に没頭し

「真理は狂気によって・・・」

口癖のように何度も呟いていたのを思い出す

今回の魔女狩りも溟羅を生け贄にしようとしたのも  
奴の企みであろう

変幻自在に自分の姿を変え暗躍するモノ「ナイアル」  
今日も何処かで・・・

\*\*\*\*\*

ある山賊のアジト

「そいつは本当か!!!?!」

「ええ!! 暗黒書物を手に入れば  
貴方がたは世界を支配するのも容易くなりますよ」

身体が異様に大きく獣の革で出来た服を身に付けている男が  
目の前にいる奇妙な赤いアクセサリーを付けた男と会話をしていた

「あくまでも・・・噂の域ですが。      ダンウィッチの村に一冊が  
隠されているとあります」

赤いアクセサリーをした男が一同に会する山賊達に不気味に微笑み  
かけた

「つまり・・・俺様達にその村を襲ってこいと言うんだな?・・・  
・お前は何を企んでいる?」

やはり山賊・・・警戒心をあからさまに抱いている様子だ

「……私は暗黒書物に興味はありませんよ……強いて言うなら……その村に根を生やしている「ウェイトリー家」を滅ぼして戴くだけで結構です」

万華鏡の満月が不気味な光を地上へと乱反射させている  
蟲が一匹も飛んでいない夜であった

\*\*\*\*\*

翌朝

ネクロノミコンが保管されている無名都市に向かう途中にダンウィッチの村に立ち寄ることにした  
(セイレムの街から最も近い村)

シラガミの言うにはここには暗黒書物はないとのこと……

「エイボン（人里でのシラガミの呼び名）！！！！  
凄い数の商品じゃぞ！！」

溟瀛とカムナギが店に並べられた果物や絹でできた服などに好奇心旺盛の子供のように見ている

まだカムナギは自ら話そうとはしていない

「……さて……必要なものは買って……次に進むぞ」

今日はダンウィッチ村の年に一度のバザーが行われており普段あまり流通していない商品が売られるている

これがダンウィッチに寄った主な理由  
まあ、ロクな物はないが

とシラガミは商品を真っ白な瞳で捉えていく

「えっと・・・これかわいい！！！！これちよーだい！！！」

不意に隣の露店から女性の声が響いてきた  
女性が手に持っているのはグルグル目にハゲ頭の妙な感じ（怪しい）  
の人形

頭の部分を押すと頭が揺れまっせ！！

女性は赤色の長い髪を持ち露店の品物をあさっている

「・・・・・・・・あ！！！！やっぱり！！！」

シラちゃんお久しぶり！！！」

女性は隣にいるシラガミに気付くと元気よく指差す

ゾクッ

俺をこんな呼び名で呼ぶのは・・・

「・・・・・・・・う・・・ラヴィニアか・・・」

半分逢いたくない奴にあってしまった・・・

「どうしたのじゃ！！！？顔が真っ青ではないか！！！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（心配そうに見るカムナギ）」

そんなに高くない身長 of 女性はシラガミの頭を頑張って撫でている



(やめてほしい・・・)

まあ・・・コイツがいるということは「あの二体」もいるこということだ

コイツ面倒くさい!!!!!!

## 夢(?)、暗躍(後書き)

幻神月花 オマケ

シェフ溟邏スペシャル

登場人物

シラガミ・・・・・・出演

頭脳をいかしたハイセンスなムチャ振りをする

溟邏・・・・・・出演 主に騙され役

隣静・・・・・・鬼プロデューサー

月南・・・・・・畑の提供者

アシスタント

あらすじ・・・・料理を作る企画と聞いて溟邏は意気揚々と車に乗り込むが

連れていかれたのは荒れ果てた農地であった

現場到着!!!!!!

溟「何じゃ・・・・」

シラ「やはり・・・・新鮮な料理から・・・・」

溟「いや・・・・待て」

シラ「料理人は食材を選ぶ・・・・」

新鮮！！！　　こだわり！！

シラ「では・・・これから夏野菜を植えたいと思います・・・」

植える！！！！？

シラ「見てわかる通り・・・まずは畑の開墾から・・・」

溟「開墾？・・・！！！！」

燐靜「・・・家庭菜園を作る・・・」

溟「なななな！！！！？・・・わらわは料理を作りに来たんじゃぞ！！！！」

当然の反応

溟「おかしいことを言うのお・・・いい買ってくるから（スーパーで）」

燐靜「・・・ここから料理は始まっている・・・」

溟「・・・いや待て！！例え今日・・・今日育たないじゃろ一日で！！！！」

燐靜「・・・頑張ればなんとか・・・」

溟「お主、バカか！！

気持ち悪いわ！！！！

一日でによきによき育ったら！！！！  
マリオの蔓とは訳が違うじゃぞ！！」

普通は2ヶ月かかります

次回 開墾スタート

世界一長い料理番組

作業着に着替えろ!!!

**夢(?)、怒濤の領域(前書き)**

挿し絵は出来しだい載つけます・・・

ギャー!!!

## 夢(？)、怒濤の領域

ウェイトリー家・・・

魔術師、輩出の名家であり数多くの随

所にも記載されている

シラ

ガミ達が露店商の所で見かけた赤毛の女性の性である

シラガミ達は田園風景が広がる大地を横切り

歩を進めていた

先頭にいるのはハキハキとした赤毛の女性 ラヴァニアであり

その後をシラガミ、カムナギ、溟邏の順に進んでいく

村の郊外というより内側にある 「センチネルの丘」を背景に一つの大きな屋敷が田園風景の中からポツンと姿を現した

全体的にオレンジ色の色彩で決して周りの景色を濁すことはなく見事に溶けている

女性は露店商から買い占めた怪しげな人形の入った袋を左側に持ち右手で朱色の大きな扉をあける

「クーちゃん♪ただいま」

ラヴァニアが満面の笑みで開けると同時に言い放つ

すると・・・

螺旋階段の上から4段目あたりに赤い髪をした若い青年がシラガミ達を見下ろすように階段の手すりに手をかけていた

「おふくろ・・・その呼び方は・・・!!!!!!」

青年はラヴァニアの左手に抱えている物を一目見るなり

顔色が変わり慌て階段の下部まで走る

「おふくろ!!!!何を買ってきた!!!!?」

「ん、いろいろ買ってきたよ!!!」

ラヴァニアには買い物袋に手を入れ中身を確認するかのよう漁りだす

そして一つの人形を取出して

「かわいいでしょ——♪」

私のお気に入り!!!

是非、お客さんの目に届く所におきましょう」

と手にしているのは・・・

先ほど露店商から買い占めた

バーコードヘアー

グルグル目にハゲ頭に昔ながらの腹巻の格好をした

お世辞にもかわいいとは言えない人形・・・

が首の部分をテケテケと震わせている

赤い髪の青年は大きな溜息を吐き

「おふくろ・・・すぐに還してきなさい!!!!家には必要ありません!!!!!!」

「クーちゃんキライなの？」

クーちゃんキライなの？

ほらかトちゃん（人形の名前らしい）

もお願いしてるわよ」

「還してきなさい!!!」

「え〜ん!! クーちゃんが意地悪するう!! グズッ」

何だこれ・・・!?

すっかり忘れられているシラガミ達は一言もかけず  
黙ってその様子に視線を合わせるだけであつた・・・

「ん!!・・・シラガミ!!?」

赤い髪の青年は視線に気付いたかどうかは知らないが泣きじゃくる  
ラヴァニアをよそに言う

シラガミは、それによっていつもの調子に戻り

「元気そうで何よりだ・・・あの戦争以来だな・・・」クトウルフ・・・  
」

赤い髪の青年はゆっくり穏やかな笑みを浮かべ

「そちらもな・・・あの戦争で死んだと聞いていたが・・・」

クトウルフ・・・昔に旧支配者と旧き神と間に起きた小競り合い（  
後に世界を巻き込む大戦争にまで発展した）を起こした張本人の一人  
シラガミもこの戦争に加わっていた。

旧支配者の筆頭である

勿論、一般人がこのことを知るよしもない

「うえ〜ん!!!」

子供のように大泣きする

ラヴァニアにクーちゃん（クトウルフ）が半ば諦めたかのように



「わかったから!!泣くな  
おふくろ!!その人形置いていいから!!」

「グズッ・・・本当に・・・？」

わーい♪ さあ、シラちゃん達も上がって♪」

先ほどとは打って変わり笑顔になったラヴァニア  
\*\*\*\*\*

シラガミ達は屋敷の応接間のような部屋に案内された  
ラヴァニアの趣味であろうか  
グルグル目シリーズの人形が大量に安置されている

正直いやだ・・・

「おふくろ・・・少しシラガミと話したいことがあるからシラガミの  
連れと一緒に席を外してくれ」

とクトウルフがラヴァニアに言う  
と待ってましたと言わんばかりにラヴァニアは立ち上がり溟邏とカム  
ナギの手を引いて部屋の外に行こうとする

しかし、シラガミに懐いているカムナギはシラガミにくっついたま  
ま離れようとせず  
首を横に振っていた

「悪い・・・カムナギ  
少し溟邏と一緒に行ってくれ・・・俺も話があるから・・・」  
シラガミは真っ白な瞳でカムナギを見ると

名残惜しそうにその場から離れていった

ボタンツ・・・

三人が部屋から出るのを確認すると  
まずは・・・

「シラちゃんか・・・」

シラガミをそんな愛称で呼ぶのは世界中探してもラヴァニアしかないだろう

軽く落ち込む・・・

「スマンな・・・おふくろは昔からそうなんだ・・・  
さて・・・シラガミ！！本題に入る」

クトウルフの目付きが変わった  
旧支配者達を束ねるあの眼に

「シラガミ・・・あの戦争のことだが・・・単刀直入に言う！！  
！あれは我々の負けだ！！」

「どういうことだ・・・？」  
ナイアルが関係してるのか・・・？」

「違う・・・戦争にアイツが参加していたんだ！！！！  
アイツは負ける予定だったオレ達 旧支配者側に付き旧き神の最大  
戦力である

「シラガミ」を殺害したのだ！！！！」

シラガミは目を大きく見開き驚く

（ま、まさか・・・あの時俺は・・・ナイアルと一騎打ちをしている時・・・あと少しで倒せる所に・・・

奴の身体から現れたドス黒い闇が俺の胸元を貫いた・・・）

ナイアルの魔術ではない・・・もっと邪悪な・・・  
そんな感情であった

「お前は知っているのか・・・？俺を殺した奴を・誰なんだ・・・？  
そいつは・・・」

クトゥルフの目をが怒りに震えていたが  
口調はわりと冷静であった

「教えることは出来ない・・・名前を知った所で、お前が勝てる  
相手ではないからだ・・・  
それに・・・お前は運がいいアイツの攻撃を食らって生きてるなんてな・・・」

「いや、死んだぜ・・・俺・・・  
おかげで苦勞したがな・・・何年間も記憶が戻らなかったから・・・」

ダンウィッチの村に  
昼間なのに「万華鏡の月」が昼間にも関わらず  
不気味に太陽の光を乱反射していた

そのことにシラガミ達は  
まだ気付いていなかった・・・

村の郊外へ

「さあて、暗黒書物を戴くか!!!  
ヤロー共!!!! 攻め込むぜ」

「「「「オォー!!!」」」」

大きなカトラスの刃を水平に伸ばし  
村を一直線に睨む

団体の影は幾重にも重なりまるで一体の獣のように見えた

\*\*\*\*\*

こういった農村には、山賊から強襲の情報を村全体に伝えられるよう  
火の見櫓ひのみやぐらの一番上に大きな鐘が吊されており  
当番の村人が鳴らすという仕組みをとっている

カン カン

「山賊が来たぞー  
山賊が来たぞー」

けたたましい金属音が響き  
バザーで賑わっていた村人達は混乱の渦に叩き落とされた

「きゃああああ!!!!」

「ゲエヘヘヘ!!!!」

村に火の手が上がり山賊達が一気に侵入を果たす

鐘の警戒音はシラガミ達の耳にも届く

「クーちゃん!! 大変よ

山賊が村に……」

応接間の扉をガンツと開けラヴァニア達が飛んできた

「山賊……? まさかお前の命を狙った奴らか……?」

シラガミは溟邏達に合わせていた視線をクトゥルフに向け問う

「いや、違うな……オレを襲う者はそうそういない大方、金品を盗るバカ共だな……シラガミ

少し手伝ってもらうぞ」

\*\*\*\*\*

その頃

村の中心では、山賊達が暴れ回り

村人は逃げ回り、ある者はカトラスにより負傷していた

下品な山賊の笑い声が飴する中……

「何をやっとなるか!!!」

赤い髪をした青年と

白い髪をした少年・黒い髪をした女性が山賊達の前に現れた

旧支配者の筆頭 クトゥルフ

九尾の暗狐 溟邏

そして旧き神最大戦力 シラガミ  
であった

村人はクトウルフの姿を見ると安堵の表情を次々と浮かべ  
「クトウルフ様だ!!!」

「おお!!!クトウルフ様」

「我々を助けにきてくださった!!!」

「シラガミ・・・ここはオレとお前の連れで相手をする  
お前は、山賊の頭を探し出してくれ」

シラガミは一回頷くと  
高く飛びあがり頭を探しに向かう

「さて・・・この村を襲った代償は大きいぞ・・・」

「わらわは、お前達のような他人の利益を盗む輩が大キライじゃ!  
!!!」

クトウルフは長い双剣を取出し  
胸の前でクロスするように構える

溟邏は黒くしなやかな九尾を身体の後ろに花卉のようにし  
腕を大きく開き山賊達を睨み付けていた

・ ちなみに、ラヴァニアとカムナギは屋敷の中に避難しているが・・・

「だ、だめよ！！ナギちゃん外に出ちゃ！！」

カムナギはシラガミのことが気になり落ち着いていなく  
しきりにシラガミを探しに行こうとする

必死にラヴァニアは引き止めようとするが  
とうとう屋敷を飛び出してしまった

ラヴァニアは一瞬迷ったが小さい子一人では危ないと判断して  
必死に後を追うことに決めた

\*\*\*\*\*

シラガミは昔ながらの家々を軽く乗り越え  
山賊を指示しているであろう  
頭を探す

すると村の外れの所に一人だけポツンという  
体格のいい男が黒毛の馬に跨り村が襲われている様子を観察してい  
るようだ

「アイツが頭か・・・」

シラガミは恰幅のよい男が頭と判断し  
その男の近くに降りる

「すぐに、部下の奴らを引き上げさせないとまずいぜ……お前も知ってるだろ……！！！！」

男は無言のままシラガミに大きな槍を突き立て襲いかかってきた  
しかし槍はシラガミを貫かず空を突く

「言っても無駄か……なら攻撃するまでだ……」

シラガミは間合いを詰め馬に跨る男に殴りかかる

だが・男はシラガミの攻撃を見計らったように馬の背中から大きく飛び上がり

空中で身体を一回転させ  
地面に着地した

男が着地をした時、地面が重い物を落としたような音を破裂させる

「……図体がでかいわりに結構速いじゃねーか……」

男はその体格には似合わず素早く動いてシラガミに強烈な右腕を突き出す

シラガミも負けじと拳を振りかざし突き出す

双方の頬を掠めるように拳は止まり

二人の後ろには強烈な爆風が吹き

木々の小枝がパキンッという音を立て折れていく



シラガミの耳元で

「知ってますよ・・・クトゥルフがいるのでしょ・・・そのための捨てゴマですから・・・」

「!!!!!!」

シラガミは男の正体に気付き間合いを一氣にとり

急いで空を見る

「何故気付かなかった・・・」

上空には太陽よりも遥かに大きい万華鏡の月が不気味に光っている

これがここにあるということは・・・

「キサマ・・・ナイアルだな・・・」

「ご名答です!!」

恰幅のよい男は、耳まで裂けそうなほどの笑みを浮かべシラガミと対峙する

（予想していなかった・・・コイツがここにいるなんて・・・ここで戦うのはマズいな・・・）

シラガミの背後には森林が生い茂っており

時折、風の影響によりパキパキと音を立てる

ギュッ

シラガミの背後から小さい影が現れ  
シラガミに後ろから抱き付いてきた

シラガミは慌て振り向くとそこには・・・  
安心したカムナギがいた

「お前！！！！すぐに離れろ！！！！」  
怒鳴るシラガミだが時既に遅し

「子連れでしたか・・・残念ですね・・・」

ナイアルから一瞬目を離したことにより  
背後に回ったナイアルの存在に気付くのが遅れてしまった・・・

「さて！！！！この娘は関係ない！！クソー！！！！」

シラガミは背後にいたカムナギを抱き上げ  
そのままナイアルとは反対側に常人ではありえないスピードで投げる  
投げ飛ばした刹那

「随分隙だらけですよ・・・」

一方・・・投げ飛ばされたカムナギは右腕から地面に激突するが  
すぐに起き上がりシラガミの方に視線を合わせる

そこには・・・

ナイアルに心臓を貫かれたシラガミが口からおびただしい量のドス

黒い血液を吐きながら必死で立っている  
「!!!!!! し、しらがみ!!!!!!」  
初めての少女の叫びであった・・・

## 夢(?)、怒濤の領域(後書き)

本編が凄いことになっているが・・・

オマケ シェフ溟羅

なんだかんだで作業着に着替えさせられた一同

溟「まさか・・・開始早々、作業着に着替えさせられるとは・・・」

シラ「乗り気じゃないな・・・」

溟「乗り気のある無いではないぞ・・・なんじゃけれどひょっとしてこのロープの中か!!!!?」  
「けっこー広いぞ」

ロープで仕切られているのは、幅3m 長さ 7mの範囲の畑

ゲンシン農園である

溟「あれ放題じゃぞ!!!!!!」  
「なんじゃ!!!!この切り株!!!!」

燐「汗を流した後の食事は美味・・・」

溟「料理出来る訳ないじゃろ!!!!成るわけないぞ!!!!」  
「なんかそこに、苗みたいな物が置いてあるが・・・今日やるじゃ・・・これ食うしかないぞ!!!!」

「夜にはトマトが・・・」とバカ気たことを言っとなるが・・・」

シラ「では、今回この苗を用意したのですが・・・こちらの畑も提

供して下さいました・・・アドバイザー兼スタッフの「真槌月南」  
さんです・・・」

農園アドバイザー  
月南

今回育てる物

激辛唐辛子

ピーマン

しし唐

トマト

ミニトマト

ブロッコリー

小玉スイカ

長なす

キュウリ

かぼちゃ

黒なす

ジャガイモ

枝豆

とうもろこし

ゴーヤバナナ（！！！！）

溟「待て！！一つおかしいのが混ざっておったぞ！！」

どうなることやら・・・

次回いよいよ開墾！？

どうしてこんなになるまでほっといた！！！？？

**覚醒（四）、動き始める真実（前書き）**

覚醒の世界もえらいこっちゃ

## 覚醒（四）、動き始める真実

覚醒の世界

真槌家 本殿

剣道の道場かのような板張りがその空間を作り出している

その部屋の中央に二人の影があつた

一人は、年若い女性

もう一人は、小柄な白髪の老婆である

「それは本当か？ 燐静・・・あのモノが夢に見たという  
黒い狐は・・・」

白髪の老婆が目が良く見えていないのか目を瞑るか  
目の前の燐静に焦点を当てずに呟くように言った。

「はい・・・大婆様・・・間違えありません・・・」

「九尾の暗狐・・・じゃな・・・一度・・・あのモノに謁見させて  
みるか・・・」

大婆様は、燐静の曾祖母にあたる人物であり  
村の重鎮という役目をおっていた

あまり表舞台には、出てこないが神南備の管理は全てこの人が握っ  
ている

「清孝！！・・・すぐに支度を・・・燐静は、あのモノと関係者を

呼んでくるんじゃない!」

\*\*\*\*\*

月南と奏は、燐靜に呼ばれ神南備の入口に集合していた

「急に何なのかしら・・・それにしても・・・月南、大丈夫?  
凄く顔色悪いけど・・・」

奏が心配するのも納得であった

月南の顔は、血の気が失せたかのように真っ青になっていたのだ

「いえ・・・少し嫌な夢を見たので・・・大丈夫です」

金色の髪と対比しているかのように青白い

夢の中で月南は、山賊の首領に心臓を貫かれるという夢の中でも最悪のジャンルを見てしまったのだ

未だに心臓の部分が痛い

しばらくしていると・・・

「全員・・・集まったようじゃな」

杖を地面に突き刺しながら大婆様が月南達の目の前に姿を現した

傍らには、清孝と燐靜が歩いている  
いつもの羽織袴であった



「月南・・・お主は、ボリア一族という者を知っておるか？」

「はい、一回だけ会ったことがあります・・・」

この村の長老を前にいささか緊張する月南

「お主の身体的特徴は、その一族と酷似しておる

ワシもそのことを考えたが現在、ボリア一族に行方不明の者は居らんのじゃ・・・

そこで・・・神南備の祠に行く・・・」

「それが、月南の正体がわかるのですか？」

奏が食らいついた

「奏ちゃん・・・それは分からないよ・・・だけど・・・もし月南君がボリア一族ならば・・・今回会う人物によって記憶を取り戻す手助けになるかもしれないから・・・まあ、凄く人間を恨んでいるけど・・・」

清孝が答える

「今回会うのはじゃな・・・ボリア一族創設に関わっており神南備の守り神として封印されている・・・

妖怪の総大将 九尾の暗狐「溟邏」様じゃ・・・」

溟邏・・・！！！！夢で出てきた狐の女の子！！

月南は、鳥肌が立つような感覚を覚える

\*\*\*\*\*

春先となり木々が幾重にも重なりそこで生まれる木漏れ日が笹の葉を反射させている

月南達が歩いている所は、道というよりは獣道という表現が正しいと思うような勾配の富んだ道である

獣道を歩いている時に

清孝さんから九尾の暗狐についての情報を話してくれた

今から溯ること2000年近く昔に「限界世界大戦」という悲惨な戦争が起きた

この戦争は、初めて原子爆弾が武器として使われニホンは、想像絶する被害を受けてしまった

ボリア一族創設者である

大天才 「エイボン・ボリア」もこの戦火により命を落としたと言われている

そんな中、神南備の山（旧名は、八積根）に一匹の黒い狐が舞い降りこの地を襲い始める

憎い・・・憎い・・・

口癖のように呟きながら9本の尾を振りかざし暴れ回っていた

それを、止めたのが現在の真槌家の元となるカムナギであった

カムナギと大妖怪 溟邏との死闘は1週間にも及び  
なんてか封印することが出来た

しかし、その痛手によりカムナギは命を失ってしまう

周りの人達は、命をかけて戦ってくれたカムナギにあやかり  
戦闘の地であった・・山の名前を「神南備<sup>かみなび</sup>」と名付けられた

それが、この村に伝わる伝説である

とそこまで話した所で「溟邏」が封印されている祠へとたどり着いた

周りの空間に溶け込むように大きなしめ縄が岩に張られ  
緑色の苔が生育している

月南は、この場所から少し離れた所で雨の日に倒れていた

大婆様がみんなより一歩前に立ち

小さい声ながらもはっきりと聞き取れるような声で

呪文のような言葉を呟き始める

「ソウレイシ・・ヤオロズノカミガミタチノシヨウゲン・・・キユ  
ウビノアンコ・・メイラタテマツル・・」

そう言い終わると同時に

大きな岩に亀裂が入り

ポツカリと一人が入れる穴が開きだした

先頭到大婆様が入り

次に月南、奏、燐静、清孝の順に岩の中に歩みを進める

中は思ったよりも暗くなくボンヤリとぼんぼりの灯りのような暁<sup>ひかり</sup>が  
岩肌を照らしている

中心部分に一層大きいしめ縄が月南達とその妖怪を遮るように目の前にぶら下がっていた

全身が黒くしなやかな毛が体表を覆っている  
九つの黒い尻尾がまるで威嚇をするように  
先の方を月南達に向けていた

「何しに来おった・・・人間風情が・・・」  
酷く冷たい口調

「溟邏様・・・お久しいございます・・・今回は・・・

「帰れ！！わらわは、今機嫌が悪い・・・お主らを見ておると・・・  
ズタズタに引き裂いて五臓をぶちまけたくなるわ・・・忌々しい  
人間め・・・」

大婆様の話しの途中でそっぽを向き  
歯をきしませる

「・・・・あなたの子孫のことと言っても無視をし続けられますかな？・・・ボリア一族のことでございます」

ピクツと黒い耳が動き  
顔だけを向ける

大婆様は、月南の袖を掴み前へと引っ張る

予想外の力により月南は、転んでしまい、溟邏の黒い体と対応するような黄色の瞳を見上げる

「この者は、夢であなたとお会いになったと聞いております・・・  
何かご存知でしょうか・・・？」

「夢・・・！？」

溟邏は、一回大婆様を見ると再び月南に視線を向ける

溟邏の脳裏に懐かしの顔が思い浮かんでいた

それは・・・既にこの世を去っているはずの人物

「まままま、まさか！！！！そんなはずは・・・シラガミ・・・？  
お主生きておったのか！！！！？」

溟邏は、勢い良く立ち上がり四足歩行のまま月南に飛びかかろうとする

・・・が

バチンッ

封印は、当然の効力を発揮し溟邏を中心に押し戻す

溟邏は、体勢を立て直して再び四足で月南達を見る

シラガミが生きていた

それだけで溟邏の顔は、緩んでしまう

溟邏は、そのまま原身である狐の姿から  
人間へと姿を変える

足元まで伸びた黒い髪に  
鋭い目

どこから見てもかなりの美人であった

「こんな封印なんぞ・・・フン」

パリンッ

「なっ！！！」

全員の目の前で封印が破られ大妖怪 溟邏が自由の身となる

封印の式が長い年月により劣化していたことが主な原因であろう

すぐに臨戦体勢になる

大婆様と清孝、憐静

溟邏は、そのまま月南の元に走りより  
思いつきり抱きつく

「わあああああ／＼／＼／＼／＼／  
ちよっと何ですか？」

「よかった・・・シラガミが生きておった・・・」

月南の首筋に顔を埋め頬擦りする溟邏  
しかし、問題はそこではなかった

なんと人間に戻った時の姿は、一糸纏わず（要は裸）の姿で抱きつ

いたため

月南の顔は、火にかけられたヤカンのように真っ赤である

拍子抜けする場面だが

「悪霊・・・クロスクロスクロスクロス・・・」  
怖いです・・・燐靜さん

「離れなさいよ!!!!!! 月南が困っているでしょ!!!!!!」

と奏が溟邏を引っ張るが  
全然剥がせない

シラガミが生きていた!!!!!!

溟邏は、美しい顔から笑みがこぼれている

## 覚醒（四）、動き始める真実（後書き）

オマケ

シェフ溟邏スペシャル

開墾スタート

1R （6…00～7…00） カン

シラ「では、鋤を入れる前に表面を綺麗にします」

溟「切り株が邪魔じゃな」

オラァ！！！切り株を山に投げる

燐「では、月南も・・・頑張って・・・」

月「はい！」

少しずつ木屑を片付ける

溟「これ放送できるのか？」

盛り上がりがわからんぞ！！？」

燐「一時期ごとに・・・十分の休憩」

1ラウンド1時間で

休憩10分をはさむ

10分経過～



オラッ　オラッ（地面に突き刺さった木を抜く）

シラガミと溟邏、月南で協力して引っ張る

燐「月南・・・そこにある草は危ないって・・・」

かぶれるそうです

痛い

月「イラグサですね」

溟「触ったら危ないっていうイラグサ  
こんなにあるぞ」

雑草の大半

シラガミが鍬を入れる

シラ「あ・・・笹の根があるから・・・深く入れないと入らないぞ」

溟「これタレントの仕事か・・・？」

40分経過

燐「ん・・・？・・・溟邏・・・血が出てる・・・」

溟邏のおでこから謎の出血

燐「吸われた・・・？」

溟「何じゃ？・・・月南！！！！ここヒルか何かいるんか・・・？」  
ハンカチで拭き取り溟邏が見る

溟「あー!!!!!! すぎえ量の血じゃ!!!!!! どこで噛まれたんじゃ!」

職場に戻った溟邏は、信じられない行動する

何やら月南に指示を出す溟邏

二人で畑の敷地を維持しているロープを持ち上げ

いざ農園縮小

燐「何やってる・・・シラガミ何かやってるぞ」

シラ「何やってんだ・・・・・・・・俺見てねーぞ」

えー!!!!!!!!!!

シラガミ――

1時間経過

燐「第一ラウンド終了・・・

休憩はあっち」

次回、ハプニングだらけの開墾

## 夢(?)、第二部 記憶(前書き)

昨日、大学の友達に

「お前、松山ケンイチにそっくりだな・・・」  
と言われました。

えっ!!!!!!!!!!

幻神月花 第二部スタート

## 夢(?)、第二部 記憶

夢の世界

山賊の頭に姿を変えた

変幻自在の存在「ナイアル」の強力な一撃がシラガミの心臓を捉えた

「ぐっぐうう!!・・・き、キサマ・・・」

シラガミの魔導師特有の黒い服におびただしい量の鮮血に染まっていた

普通の人間であれば即死は免れないが

シラガミは、なおナイアルを睨み付ける

「ふっ・・・これで貴方の動きは、暫く封じられますね・・・さて・・・  
・今度はいつ・・・本来の貴方に会えますかな・・・」

山賊になっていたナイアルの身体がぐにやぐにやと粘土のようになり  
次第に形を変えていった

ギロツと鋭い三つ目に巨大な翼を身に付けたコウモリへと・・・

「・・・さて・・・次は何処にいきますかな・・・？」

早く・・・魔術を廃れさせなければいけませんからね・・・

シラガミ・・・さようなら」

「ま、待て・・・」

シラガミの制止に関わらずコウモリの姿になったナイアルは、万華鏡の月に向かって羽ばたいていき  
鋭い光となって月と共に姿を消した

「し、しらがみ・・・」

カムナギが目には涙を浮かべながら  
心臓部分を押さえているシラガミに近づく

「はあ・・・はあ・・・カムナギ・・・溟邏達を呼んでこい・・・」

しかし、カムナギはあまりのショックに鳴咽が始まっており  
その場から動こうとしない

「ちっ・・・はあ・・・泣くな！！！！早く呼びに行つてこい！！！！  
時間がねえ！！！！」

普段では、絶対に大声を出さないシラガミが  
カムナギを叱責するように怒鳴る

カムナギは、一瞬ビクツとし  
慌て溟邏達のいる村に走りだした

（し、しらがみが・・・死んじゃう・・・そんなの嫌・・・）

途中何度も転びながらも懸命に走り続け溟邏達の元へ  
ダンウィッチの村に攻め入った山賊達は、旧支配者の筆頭　クトゥ  
ルフと

妖怪の総大将である瑞祥の娘　溟邏の前では当然のように歯が立たず

「ひっいいいいい  
ば、化け物めゝ!!!!!!」

尻尾をまいて逃げていった・・・  
さて、シラガミの方は、終わったかな？

とクトウルフと視線を合わせる溟邏

そこへカムナギが慌てた様子で村の林から走ってきた  
「!!!!!!カムナギ!!!!

どうしたのじゃ!?!?  
涙を流して!!!!!!」

カムナギは、息を切らしながら二人の前に立ち

「しらがみが・・・死んじゃう・・・」

「な、何!?!」

二人の表情が固まった・・・

\*\*\*\*\*

シラガミの胸からとめどなく流れでる赤い血

「シラちゃん!!!!しっかりして!!!!  
死んじゃイヤよ!!!!!!」

カムナギを追い掛けていたラヴィニアが深い傷を負ったシラガミと  
出くわした

シラガミの真っ白な瞳が次第に虚ろになり  
震えながらも意識が無くなることに抵抗をしている

（カムナギ・・・急げ・・・

まに・・・）

シラガミの<sup>まぶた</sup>瞼が重くなり

死んだようにグツタリとし口から血を吐いた

「シラちゃん!!!!!!」

死んじゃ嫌

死んじゃ嫌!!!!!!」

シラガミの亡骸（と思われる）を抱き寄せ

泣き叫ぶラヴィニア

しかし、亡骸になっているはずのシラガミの身体から

パキッ パキッ

という何かが組み合わさるのような音が聞こえだし  
微かに心臓の拍動が皮膚の下から響く

まだ・・・生きてる

\*\*\*\*\*

何処かの街へ

幼い自分の手を引きながら誰かが私の顔を見ている

「・・・シラガミ・・・この世界は、人と人が繋がって生きて

いる・・・

暴力だけでは、誰も前に進めないぞ・・・」

私は、おそらく喧嘩でつけたであろう傷だらけの身体でその人をギロツと睨み付ける

「まだ・・・難しいな、いずれ分かるよ・・・」

その人物は、前を向き歩みを進める  
必然と私も前を向く

不意に酒屋のような店から中年の男が出てきて

「お、また喧嘩をしたのかこの問題児は！！！！？」

エイボン・・・お前も大変だな」

私の手を引いている人物は「エイボン」という名前らしい

急に視界が変わりだす

\*\*\*\*\*

ガバッ

ここは、何処？

私は辺りを見回すと豪華な屋敷のベッドで寝かされているらしい

私は・・・一体・・・？

ベッドに横になっているのは、見る者すべてに日の光を感じさせ  
生気あふれる金色の髪



深海の海と同じような神秘的な蒼き眼

そして金色の髪からピョコツと顔を出しているのは  
細長い耳を持つ者であり

何も知らない人から見れば女の子と思われるが  
男である

彼には、自分がどういった人物なのか全く覚えていなかった

いわゆる、記憶喪失という奴であろう

少年は、布団から上半身だけ起こして自分の両手をじっと見る

日の光さえも反射しそうなほどの真っ白な皮膚だ

すると、扉の外から複数の人の声が聞こえる

「まさか、ナイアルがいたとは・・・」

「かなりの重症じゃ・・・意識が戻るのも否めんな・・・」

ガチャッ

木製の扉が開かれ入って来たのは

赤い髪をした青年と黒くしなやかな髪を持つ女性

その後ろから小さい女の子と赤い髪の女の人が順次入ってきた

黒い髪の女性には狐のような耳と尻尾を持ち

「シ、シラガミ!!!」

お主だいじょ・・・なぜ金色の髪になっておるんじゃ？」

「?????」

溟邏が嬉しさ半分と訝しさ半分で金髪のシラガミの右サイドにやってきたが

当のシラガミは、何が何だかわからないようすであった。

だっだっだ!!! ギュッ

カムナギが走り寄り

思いつきシラガミの胸元に顔を押し付けた

「えっ!!!!? えっ!!!!?」

凄く顔が真っ赤になる金髪のシラガミ

「しかし・・・お前は、よくわからんな・・・  
なぜ・・・あれほどの傷を負って生きているんだ・・・」

赤い髪のクトウルフが指先を顎に当てシラガミの顔を見ながら考える

「きっと!!!! 奇跡的に急所を外れていたのよ!!!」

そうよね!!! シラちゃん!？」

「????? し・・・ら・・・がみ・・・?それが、私の名前？」

「あ、あの・・・誰ですか? 貴方達は？」

私の知り合いですか？」

「シラガミ!!!!!!?」

「わ、私って言ったぞ!!  
何が起きたのじゃ」

一同、軽くパニック

幻神月花 第二部

記憶を失ったシラガミ

始まり

## 夢(?)、第二部 記憶(後書き)

オマケ シェフ溟邏スペシャル

休憩

溟「一時間で結構片付くもんじゃな・・・」

燐「若干、土地が狭くなるハプニングがあつたが・・・・・・・・」

溟「いや、最初からあんなもんじゃったぞ

それにじゃな・・・今日中に作らないとマズいな・・・

友達(妖怪の)に頼んで

料理で使うパイ生地を練ってきて貰ったからのお・・・・・・・・腐ってしまう・・・・・・・・」

燐・シラ・月南「え!!!!」

燐「・・・・・・・・下ごしらえは、もう・・・・・・・・何故、そんなことをする？」

溟「お主らがよく話をしないからじゃろう!!!!」

「シェフスペシャルだから料理を・・・・・・・・」と

2ラウンド(7..00~8..00) カァン

燐「休憩入ると違う？」

溟・月・シラ「違うな・・・」

さっきよりも元気よく働く三人

溟「割と、働けるんじゃない・・・」  
ただいま、鍬入れ作業

15分経過

燐「一気に進むね・・・力が違う・・・」

ウオリャー――！！！！

ガッ ガッ

ガチンッ！！！！

?????

溟邏の鍬に異変が！！

燐「・・・どうした？・・・」

溟「すーい・・・」

スポッ

鍬の先っぽがなあゝい！！

抜けた

シラガミがすぐに地面に埋まった先っぽを取出し

カン カン

修復

45分経過〈

黙々と作業

57分経過〈

溟「・・・経ったじゃろ？」

一時間・・・」

燐「・・・後、2分30秒・・・」

溟「融通のきかん奴じゃ！！！！偉そうにストップウォッチ持ちおつて！！！！」

第二ラウンド 終了

## 覚醒(伍)、第二部 新た(前書き)

不思議探偵団が超好き  
(そうですか……)

## 覚醒（伍）、第二部 新た

覚醒の世界

九尾の暗狐、溟邏の封印が解かれ（無理やり解いたという表現の方が正しいかもしれん）た3日後

月南が農作業の鍬を畑に入れているのを溟邏は、邪魔することもしゃらず黙って見ていた。

「シラガミ、次は農業……お主は本当にそれで良いのか？」

月南の牧場と近くにある森林を隔てる柵の上に腰かけ鋭い目付きで問う

月南には、溟邏の言っている言葉の意味ができずに作業を中断して溟邏を見るが言葉は出てこない

それを察したのか

「……人間との繋がりを持つのを辞めるのじゃ……人間なんてクズ……」

溟邏は、何かを思い出すように狐の耳の生えた頭に手を置き、怒りの形相を浮かべる

「シラガミ……わらわと共に人間界から離れ、一緒に平和に暮らそうぞ……」

と言い終わるか終わらないの時

「アンタ……！何言ってるの……！」



「聞き捨てなりません…」

学生服姿の奏、隣靜が溟邏の座っている柵の外側に來て仁王立ちをしていた。

「シラガミ、シラガミって何処の誰だか知らないけど月南の記憶に関係ないなら、さっさと村から出て行って!!」

封印から解かれた溟邏は、頑なに月南の過去を話そうとはせずに人間への憎しみを口癖のように何度も呟いていた

奏の発言に溟邏は、一瞬で奏の前に移動し喉元を握りギシギシと絞めあげる

「人間のクセに、シラガミの名前を口に出すな!!!! 殺すぞ!!!」

「あっぐっ!!!!」

溟邏の口が深く裂け鋭い犬歯が露になる

その姿は、まさに怒れる獣であった

尖った鋭い爪が奏の喉に食い込み、少し血が滲んでいる

「止めてください!!! 溟邏さん!!!」

月南が二人の間に割って入りこの騒動を止めに入る

溟邏は、月南の顔を見るなり、すんなりと奏から手を離し、奏は重力の影響によりドサッと音を立てて落下した。

その時の溟邏の顔は、悲しくもあり怒りもありという複雑な表情を

浮かべていた

「ゴホッ げホッ……」

「大丈夫ですか、奏さん？こんな事、酷過ぎます！！  
溟邏さん」

いつも温厚な月南も溟邏の所業に怒り心頭といった感じであった。

「…シラガミ……」

溟邏は、睨み付け続けている月南に手を伸ばそうとするが

バチッ

！！！！？

溟邏の手が何らかの力によって弾かれ、身体が大きく仰け反る

「二人に近づかないで下さい……」

力を受けた方向を見ると手を前に突き出し明らかな敵意を向けている

「……カムナギの子孫か……あやつも所詮は、人間じゃった…最後の最後にわらわ達を裏切りおって…

シラガミに助けられた恩を忘れてな！！！！」

耳まで裂けた狐の口を人間のナリに戻す溟邏

「シラガミ……お主は、奇妙な夢を見続けているじゃろ………暫く見続ければ記憶は戻るじゃろ

そして、思い出すのじゃ！！人間達の薄情さを！！

その時までわらわは、主の側にいるつもりじゃ」

再び柵に跳び乗り黒い尻尾がヒラヒラと空を切っている

（私が見ている夢は、私の過去?!）

そう言われても覚えがない懐かしい気もするが……違う気もする

何だかよく解らない……

溟邏は、何処か悲しげに天を仰ぐ

青々しい空が視界いっぱいに広がっていた  
悲しみの蒼色と何処か同調するかのよう

「はあっ……はあっ……アンタは、何者なの？」

月南の何なの!？」

月南の後ろで奏が呼吸を整えながら溟邏を見る

「……お主らよりもじゃがな……」

相変わらず空を見続け両足を組んでいた

\*\*\*\*\*

溟邏との騒動から数時間後奏と隣静は、今日も学校に出かけていった

奏の傷は、見た目よりも深くなく簡単な治療で済んだ

朝の仕事を終えた月南は、真槌家に呼ばれ

「そうか……そんなことがあったのか……」

袴姿の憐靜の父、清孝に朝の溟邏の行動について話したのだ。

昔よりも能力が弱ま<sup>ちから</sup>っているため再び封印の陣を描くのが難しいた  
め溟邏をそのまま自由にしておくことが正式に決められた

唯一、月南に心を許している様子であつたので

監視役も兼ねて月南の家に溟邏を居候させることになったのだが：

月南と二人っきりの時は、引っ付いてきて離れようとはせず

月南以外の人には、敵意をむき出しにして威嚇をし朝のようなこと  
を引き起こしてしまっている

月南自身もこの事が悩みとなっており解決の糸口が掴めないでいた

「うーん……何故かは分からないが九尾の暗狐の溟邏は、人間に対  
して深い憎しみを抱いていると聞いている……難しいな……」

腕を組み難しげな顔をする清孝

いつものおちゃらけた憐靜の父親とは違い真剣だ

「とりあえず……そのままにしておこう……もしかしたらその訳を溟  
邏様は、話してくれるかもしれないからな」

やはり、現状維持が限界

「わかりました清孝さん……私も早く記憶を取り戻したいと思いま  
す。

それでは」

月南は正座を崩し立ち上がろうとすると

「あー!! 待って!! 今回は、もう一つ話がある」

月南は、予想外の出来事に目を丸くし  
もう一度、清孝の前に正座をし直す

「何でしょうか？」

「月南……どうだ村の生活に慣れてきたか？」

「はい、皆さんいい人達だらけなので、ありがたく思っています」

「そうか……月南、そろそろ学校に行ったらどうだ？いつまでも憐  
静に教えてもらおう訳にもいかないだろ？」

清孝は、芯が真っ直ぐ通ったような口調で月南に話しを始めた

「学校ですか……でも」

「憐静の通っている「白邏高校」の校長には話しが付けてある  
編入試験をパスすれば通ってもいいそうだ」

と言いながら清孝は、編入の資料を自身の鞆から取りだし

月南の目の前に広げた

A4程の大きさの紙に日時・場所等が記載されており月南の心が揺  
らぐ

「しかし、私には仕事があります……学校になんて行ってしまった  
ら……」

月南は、資料を決して手に取ろうとせず困った顔をしながら清孝

の方を見る

「大丈夫だ……牧場の方はそのまま続けて良い  
ただ、月南にも学びの機会を与えたいだけだから!!  
締め切りまで時間は、あるからゆっくり考えなさい」

資料を見ると願書の締め切りは、2週間後と記載されていた  
そして、試験は来月の初め頃

ちょうど、今日から6週間後に位置している

試験科目は、「数学、理科（化学・物理）、英語、国語」

受けるなら今日から始めないといけない日数であった  
学校でいろいろなことを学びたい……  
そんな欲求が月南の脳内を駆け巡った

「わかりました……少し検討します……」

月南は、目の前にある募集要項を手に取り眺める

学校か……

家に帰って暫くその事について考える

月南と一緒に九尾の暗狐である溟邏もその紙を眺め

「学校に行くのか？」

「まだ考え中ですけど……早目に決めないとマズいと思うんですよ」

月南は、溟邏を極力刺激しないようにやんわりと答える（朝の事が

あつたため)

溟邏は、少し考える動作をし

「受けたらどうじゃ!？」

わらわは、一向に構わんぞ」

「え!?!？」

予想外の答えが

絶対に「人間の中に入るのは言語道断じゃ!?!！」  
とか言われると思つてた

「お主が学びたいと思つておるから悩んでおるのだろ？」

だったら学舎に行つた方が利口じゃ

人は、誰もが知識欲を持つておる。それに抗うのもおかしいからの  
う」

溟邏は、手に持つていた資料を無造作に空中で話し

ヒラヒラと紙が左右を一、二度旋回をした後

床に音もなく落下した。

「かつてのお主がそうであつたように……」

私の方を見てイタズラに笑う溟邏

鋭い犬歯が見えるが朝程の怖さは感じられなかった

受けてみようかな……

「ところで、シラガミは何を学ぶのじゃ？」

溟邏は、身を乗り出して月南の顔を覗きこむ  
ち、近い／＼／＼／

「えっと／＼／主に、理系科目ですかね  
物理などがありますけど  
正直、自信ありません」

と言いながら本棚に手を伸ばし物理の教科書等を取り出（奏や憐靜  
が去年使っていた）

溟邏の目の前でパラパラと中身を軽く見せた

溟邏は、少し驚きながらも何か納得したかのように笑みを浮かべ

「そうか……記憶がない時は、こういう事態になるのじゃな……何  
だか滑稽じゃ」

またしても月南の理解が追いつかない言葉

「今見せて貰った学問は、シラガミが造った学問じゃよ  
まあ、それも面白そうじゃな」

私が造った……？  
記憶があった時代の？

え、ますます私が何者か分からなくなってしまった

ワタシハ、ナニモノ

「かっかかー♪」  
弾く音のような溟邏の笑い声が響く



月南は今日、試験を受けること決めた  
もしかしたら記憶が戻るかもしれないからだ  
(半信半疑だが……)

## 覚醒（伍）、第二部 新た（後書き）

オマケ シェフ溟邏スペシャル

休憩

溟邏達が休むビニールシートに夏の太陽が攻撃を始める

溟「照りすぎじゃ……暑い休憩にならんのか」

燐「あと4分……」

溟「はあ……!!」

燐「トーク……面白くない」

3ラウンドでは、盛り上げろと!!

3ラウンド（8…00～9…00）  
カン

三人で分担して作業

畑を耕す

畑の悪路に足を取られシラガミ、まさかの転倒

すかさず、溟邏がかけより溟「どうしたのじゃ……!!  
しっかりするんじゃ……!!」

シラガミを担ぎ安全な場所に避難

燐「やらせ……?」

暫く作業を続けると

シラ「痛てッ」

農作業により手の豆が潰れたのだ

そこでも

溟「どうしたのじゃ!!!!?」

溟瀧は、すぐに作業を止めてシラガミの助けに入る

燐「……………」

燐「もういない……」

これ以上は、ダメらしい  
盛り上がってきたのに!!

50分経過

新たな工程に移る

「土をふるいかける作業」

次々とスコップを手にし

土を掘ってはふるいにかけていく

燐「画が地味……」

変な機械は出てきたけど……

溟「でもじゃな……月南

これは、一日の作業量としては、終わりの方じゃろ？」

月「はい、一人だったらそうですね……でも三人でやっていますから」

ガックリ

隣「3ラウンド終了……」

次回、いよいよ溟邏達が壊れ始める

誰も支持者がいなくても続けます

## 夢(?)、これから(前書き)

何故か「トマト」のフレーズが気に入っています。

トマトって名付けた人、天才!!

そんなにトマトは、好きではないが

## 夢(？)、これから

### 夢の世界

変幻自在のモノ「ナイアル」の一撃により記憶を失い

何故か、老齡を思わせる程の白い髪と色を失った瞳がシルクのようにしなやかな金色の髪となり

深い深海を連想させる位の蒼眼へと変わった「シラガミ」

果たして彼らの旅路は……

\*\*\*\*\*

「あ、あの……少し離れてくれるといいかな……」

椅子に座って本が読める位にまで回復したシラガミが顔を赤くしながら自分の膝の上を陣取り甘えてくる

カムナギに言った

カムナギは、首を横にブンブン振り否定の色を見せる

金髪のシラガミは、何故この女の子が自分に懐いているのか解らないが……

シラガミの黒い服（服の全体には解説が容易ではない言語がびっしりと書かれている）の裾を掴み  
彼が行く所々に引っ付いていく

シラガミが椅子に座ると当たり前のように膝の上に乗る

夜、寝る為に布団に入ると少女も入ってきて

抱き付いてくる

そんなことが連日続くのだ

(私も男ですから……恥ずかしいです)

金髪のシラガミは、持っていた書物を閉じ、近くにある木製のテーブルに本の角が少しはみ出る所に置いた

シラガミは、豪邸のような屋敷の天井を見上げ、自分が何者であるかを考える

なぜ…私とカムナギさん、溟邏さんで旅をしているのでしょうか？

\*\*\*\*\*

シラガミが休憩している部屋から少し離れた所にある部屋（応接間？）で溟邏と旧支配者の筆頭 クトゥルフが椅子に腰かけ何やら話し合いをしていた

「これからどうするんだ？」

シラガミは、この後も旅を続けると言っていたのだろうか？」

「………確かに言っておったが……まさかこんな事態になるとは……記憶を失う前に「無名都市」に行くと言っておったが、そこを指すべきか」

九つの黒い狐の尻尾を膝の上に重ねている溟邏

顔色から見て、現状は芳しく（かんばしく）ないようだ

無名都市の発言に驚いたのは、クトゥルフであった

「無名都市だと………あそこはかなり危険な所だぞ………それに………」

「それに……何じゃ!？」

クトゥルフは、顔をうつむき考え事をしているような格好をとる

（シラガミの頭脳なら行けるかもしれないし

上手くいけば「アルバザード」にも会える……だがそれは、シラガミの記憶があつた状態でなければならぬ……）

クトゥルフは、顔を上げて目の前にいる溟邏に視線を合わせる

溟邏もその様子に狐の耳をピョコンと上げて聞き逃さない対策をとる

「それに……無名都市はこの世界との時間軸がズレていてな……簡単に入れないようになってるのだ

入るには特殊な術式が必要だったはずだ

行くのは、シラガミの記憶が戻ってからの方がいいだろう」

この話は、クトゥルフのついた嘘であつた

勿論、この世界の時間軸がズレている訳ではない

現在でもその場所に行こうと思えばいけるのだが

シラガミ無しでは、話しを通じる種族がそこにいなくかなり好戦的な為、危険と判断してのことであつた

「そうか……その場所に行くのは、シラガミの記憶が戻ってから行くのでしょうか」

溟邏自身も危険を察知し（暗黒書物の邪悪さを知っている）

シラガミの記憶を戻すのを最優先に決めた



「また、カルコサとか言う所に連れていかれたら困るから……」

冗談混じりでしたつもりの溟邏だったが

「……!!ま、待て!!今「カルコサ」と言ったな……!!  
本当に行ったのか!!」

椅子から凄い勢いで立ち上がるクトゥルフ  
そして溟邏の両肩を掴み力を込める

痛いのが……

「わらわが初めてシラガミと会ったのが、確かそうじゃ……わらわ  
は、「黄衣の王」という暗黒書物を見て行ったのじゃが  
離すんじゃ!!痛いぞ」

「あ、スマン!!……そうか暗黒書物に生き方が書いてあったのか  
……」

クトゥルフは、いつもの冷静な口調とは違い  
少し興奮気味であった

「どうしたんじゃ!？」

その場所に何かあるのか？」

「……溟邏……シラガミの記憶が戻ったら、その暗黒書物を貸して  
欲しいと言っておいてくれ  
ようやく、助けにいけない」

窓から差し込む光を浴びつつクトゥルフは、何かを隠すかのように  
話した

「誰かおるのか？」

お主の助けを待つ輩が」

「…………オレの弟が幽閉されている…………助けに行きたかったが「カルコサ」の地に行く手段が見つからなかったのだ…………」

「弟！！お主に弟がおったのか！！…………了解じゃ、シラガミに伝えておくとしよう」

「…………頼んだ」

とクトウルフが言った時に屋敷のエントランスから元気な声が響いてきた

「たーだいまー！！！！なかなか良いのがあったわよ！！」

クトウルフの母親であるラヴィニアが買い物から帰宅したようだ

溟瀝とクトウルフは、それに気づきエントランスに向かう

「おふくろ…………随分時間がかかった…………！！！！はっ」

またもやクトウルフは、何かに気づきラヴィニアの元に慌て駆け寄る（デジャブ？）

明らかに袋が多い…………

「何を買ってきた…………？」

「あ！！クーちゃん気が付いた！！実は、すんごくかわいい人形見つけちゃったのよ！！！！見てみて！！！！」

そう言うとき袋をがさごと漁るラヴィニア

大きな買い物袋から一つの品物を取り出しクトゥルフ達の前に出す

「かわいいでしょ——！！」

と言って見せたのは

東の国のトノサマの格好（オレンジ色の）、顔の大半が白く眉毛の部分を濃く描かれている親父が腕と顎を突き出したポーズをしている  
ちよんまげの部分を押すと「アイーッ」と言いまっせ

かわいい……？

暫し固まる二人（溟邏・クトゥルフ）

「あ、お帰りなさい！！ラヴィニアさん」

金髪のシラガミがゆっくりとした足取りでエントランスにやってきた

後ろには、引っ付いているカムナギが顔を覗かせている

「返してこい！！！」

突如として大きな声を上げるクトゥルフ

それには、シラガミとカムナギもかなりびっくりした

特に、カムナギはシラガミに顔を押し付けて震えてしまった

「クーちゃん！！キライ嫌いなもの！？」

こんなにかわいいのに！！」

ラヴィニアがトノサマの格好をした人形を前に突き出し必死にアピール

ついでにちょんまげの部分を押して

アイーン、アイーン……

「だあああ！！うるさい！！

もう止めろ！！そのシリーズはもう、うんざりだ」

エントランスの所でやいやい言い合う親子

「さっきまでの空気は、何処に行ったのじゃ……」

溟羅がボソツと呟いた

シリーズなのか？

## 夢(？)、これから(後書き)

オマケ シェフ溟邏スペシャル

休憩

タオルで汗を拭く三人(溟邏・シラガミ・月南)

燐「農業……実際にやってみると違う……？」

無視の一同

燐「……実際にやってみると違う……？(再び)」

シラ「虫に刺されたな……」シラガミの腕に蚊に刺されたような跡が

燐「……………」

燐静は、持っていたポテトチップス(コンソメ味)を溟邏に投げつける

ガサッ!!

溟「……………」

燐「実際やってみると違う？」

溟「ハアッ!!何がじゃ

さつきからうるさいぞ!!」

燐「感想を聞いている……答えろ……農業の大変さがわかっただろ……………」

溟「何じゃ！わらわが「農業なんて簡単じゃ」とか言ってたか？  
いつも感謝しとるわ！！大変なのはわかっておる」

月南が溟邏に投げつけられたポテトチップスを広げ  
皆で食べようとしようとする

溟邏とシラガミも便乗して食べ始める

燐「動物みたい……」

月南がポテトを手にとると手を弾いて口に入れる動作をした

それを見た溟邏達は

溟邏も挑戦

手を弾いてポテトを口には入らず鼻の下に当たり急降下

シラガミも挑戦

手を弾くが力が強かったのか放物線を描いて後ろへ

もう一度

ポテトを上空に上げみんなで食べる……（あまりに痛々しいシーン  
のためカット）

燐「3時間で人間こうなる……」

溟「実験みたいじゃな」

次回、開墾も大詰め

苗植えを始められるか！？

## 覚醒（陸）、試験勉強（前書き）

短いです……

ここ数日、おさまっていた心臓の発作が再びきてしまい執筆活動が出来ませんでした（作者は、心臓に障害あり）

これ以上悪化するようであれば、一度活動を休止しなければならなくなると思います（極力、そうならないように注意します）

これから頑張っていきます

## 覚醒（陸）、試験勉強

覚醒の世界

学校に行くとは決意した月南。奏と憐静の通う学校の編入試験を受けるべく本気で勉強を開始した

毎日、日中は農作業をし空いた時間があれば勉強をする

そして、夕方から奏達が帰ってくるので半ば家庭教師のように教えて貰っている

奏達がいる時の溟邏が少し怖いが……

あと、溟邏からも教えてくれるが

さすが長く生きているだけに知識量も半端じゃない

そのことを溟邏に話したら苦笑いされて

「全部、お主から教わったのじゃが……やはりその状態は、察しが悪いのう」

と不思議なことを言う

解らないなあ

そんな日常に切り替わった私であるが今日も張り切って行きます

「英語は、これ位でいいかな……

あと、問題なのは物理か……」



奏達の高校は、理系に重点を置いているため編入試験の理系科目は、深い所まで勉強しないといけない

何でも……高校で「相対性理論」をマスターするのを目標（というカリキュラムに組み込まれている）にしている

改めて凄い高校……！

余談になるが真槌燐静は、かなりの相対性理論マニアで

「……この世で最も美しい理論……」

「……現在の科学を支える理論……発見した「エイボン様」……凄い」

といった話を何時間でもしてしまうので

彼女にその話を振らないようにしている

注）この世界では、相対性理論を構築した人を「エイボン・ボリア」としています

現実では、ドイツの理論物理学者「アルバート・アインシュタイン」ですので注意して下さい

そんなおかしなカリキュラムだが乗り越えなければ話にならない

月南は、奏達から渡された参考書を机に広げ用語や公式に目を通す

「原子と原子核……中性子……放射能……」

そういえば、今から200年前に「限界大戦」があったんですね  
……確か人類で初めて「原子爆弾」が使われた悲惨な戦争……！！  
「！！」

突如として月南の脳内に鮮明な映像が流れだす

ザッザザー

まるで昔のテレビのように所々に砂嵐の雑音と途切れがあるが時間が経つほどに解消かれていった

放射性崩壊、ウラン

特殊相対性理論

核分裂

臨界

連鎖反応

など様々な情報が頭の中に直接叩きこまれる

そして、莫大な情報の片隅から微かな人間の声が<sup>こたま</sup>飴<sup>アメ</sup>していた

これも時間が経てば経つほど鮮明にはっきりと聞こえる

……アル……を……める

……イアル……を……める

ナイアル……をとめる

アイツは、原子爆弾を作りあげやがった……！！

その最悪の兵器で人間達に恐怖と絶望を与える

それが……奴の……エネ……ギー……なる

きょう……き……を与えてさらな………得る

ザッザザザザサ………

声は、次第に雑音にかき消されるように消えていった

警告………？

未だにノイズの耳鳴りがなり止まない中、その声を聞いた私の導き出した意味である

ナイアル………って誰何でしょうか？

今まで聞いたこともない言葉………人？

原子爆弾を作った………？

勉強している頭が混乱の一途を辿る

「どうしたんじゃ………さっきから独り言をボソボソと………んっ！！」

そんな月南の様子に少し心配しながら溟邏が隣に座りだす

そして月南の広げている物理の参考書に目を移す

丁度、開いていたページは、原子核の崩壊の所であった……

溟邏の顔は、怒りに満ち溢れてきたという感じの表情となり始める

「こんな代物をこの時代の人間は、学ぶのか？  
忌々しい物じゃ！！！」

溟邏は、なにやら原子爆弾にただならぬ憎悪を抱いている様子で月南を再び鑑みる

「原子爆弾のことについて知っているのですか？」

「……知つとるも何も……わらわの大事なものを焼き尽くしたのじゃよ！！」

……人間達の手によってじゃな……」

………原子爆弾が……溟邏さんの大切なものを焼き尽くした……

だから……人間を恨んで……

でも……ナイアルという人が関わっていることも知っているのかな？

それも聞こうとしたが

「わらわは、少し散歩をしてくる……しっかりやるのじゃぞ！！」

と言って月南の家から出て行ってしまった

「あ……」

結局、ナイアルって誰何でしょうか？

それほど興味の湧く疑問でもないため月南は、勉強を開始する

編入試験まであと少し

無事合格出来るのでしょうか？

耳鳴りが治まらない中、ちよっぴり不安になる月南

## 覚醒（陸）、試験勉強（後書き）

オマケ、シェフ溟邏スペシャル

農作業スタート

燐靜「溟邏……今回分からなかった？」

作業をしている溟邏に燐靜が聞く

溟邏「月南の家に行くってことは、わかっておった……シラガミが連絡を入れておったからのう

月南が農作業の仕事をやっている人じゃからそこから野菜を貰ってくるとっておったわ」

シラ「料理するんだ……」

溟「じゃから！！言っとなるじゃろ！！わらわは、パイ生地を練ってきて貰ったと！！」

燐「ここからするなんて……夢にも思わなかった？」

溟「うん……今だっておかしいと思いながら作業しておるぞ」

黙々と作業

一時間経過

燐「休憩の時間……」

休憩

燐「作業順調……」

溟「そうじゃな!! 午後には決着がつくのう!!」

シラ「午後には、植えられるな」

5R(10:00~11:00) カァンいつまでやるの!?

畑の土をならす

マメ(傷の方の)

溟「……皮が剥けてきおったのう……痛い  
絆創膏じゃ……あるじゃろ?」

燐「ガムテ(ガムテープ)で十分……」

溟「はあッ!!!?!」

でも受け入れる  
本当にガムテ

溟「じゃあ、行ってくる」

溟邏のカッコいい背中が目につ……  
燐「そこ踏まない……」

台無し

一時間経過  
〽

燐「休憩……」

次回いよいよ植える作業



**夢(?)、等価(前書き)**

今もはまっているゲーム

「牧場物語シリーズ」

7月の上旬に新作が発売だそうです  
チェック!!

## 夢(?)、等価

夢の世界

ダンウィッチ村に滞在していたシラガミ一向

いよいよ村を離れて旅を再開することに決めた溟邏は準備を進めていた

「本当に行くのか、溟邏？」

赤髪のクトウルフがバッグに荷物を積んでいる溟邏に向けて言った

「勿論じゃ!! これ以上厄介になるわけにはいかんからのう」

「しかし、シラガミの記憶が戻るまで待った方が良いのでは？」

溟邏は、準備を進める手を休めクトウルフを見る

「…………シラガミは、一刻も早く暗黒書物を全部手に入れたいと思っ  
ておった

ここまで来たんじゃ

わらわは、この先を知りたいのじゃ

記憶が無くなったシラガミのためにも情報だけでも集める」

「そうか……」

「いや!! お主達の対応が悪いからではないぞ  
わらわはの決断じゃから

お主らには、むしろ感謝しておる!!」

慌てつけ加える

「……………だったら「インスマス」を訪れるといい……………俺の部下がいるから  
ちょっと待ってろ」

と言うとクトウルフは、メモ用紙を取り出して何やらペンを走らせる  
「これを「ダゴン」という男に見せれば協力してくれるから持っていけ」

と渡された紙の用紙を溟邏は、眺めるが……

「読めんぞ!!! 何て書いてあるのじゃ?」

「俺達旧支配者の共通語の「ルルイエ語」だ普通の者には読めない  
俺のおふくろもそうだが  
とりあえず見せればわかる」

「わかった……」

とりあえずメモ用紙をポケットに入れる溟邏

説明) ルルイエ語……………人類以前の言葉  
クトウルフ達が作り挙げた言語体系

紹介状みたいなモノか……

と思っていた所にクトゥルフの母親登場!!

「メイちゃん!! 旅に出る時に寂しくないようにかわいい人形を！」

「いらぬ!!!」

正しい判断

\*\*\*\*\*

「では、世話になった…」

シラガミとカムナギも一緒に連れていく」

「お世話になりました。

ほら、カムナギもお礼を言って…」

金髪のシラガミが自分の後ろに照れているカムナギに促す

ぺこり

カムナギは、無言のまま小さな会釈を少し照れたように笑う

「……お前達の旅の幸運を祈る……暗黒書物は、莫大なエネルギーを所持している……決して飲み込まれるなよ」

「じゃあね!! メイちゃん

何か危ないことがあったら戻ってくるのよ」

今後の旅の注意するクトゥルフ

わらわは、この暗黒書物を巡る旅の終決を見たい

溟邏達は、クトウルフの屋敷から離れ次の目的地  
クトウルフの腹心の部下がいる「インスマス」へと向かう

しかし……この旅の極限地は、三人に大いなる決断と破滅の道を歩  
んでいくとはまだ知らない

\*\*\*\*\*

クク……まさか心臓の部分が今手に入るとはな……  
ナイアルもいい働きをしてくれた

不気味に心臓だけの物体が宙に浮き  
不規則の動きを続けている

ドクン      ドクン

クク……ん!!!!

また、バカな人間が……よし……今回は、機嫌がいいから会ってや  
るか

\*\*\*\*\*

一人の魔術師の格好をした老人が一冊の書物と向き合っていた

「ついに……来た  
私が不老不死となり完全となる瞬間が……!!  
よし……」

老人の目の前には大きな魔方陣が描かれており  
時折、青白く光を揺蕩う（たゆとう）ていた

老人の魔術師は、深く深呼吸を一回だけし

呪文の詠唱に入った

大いなるアザトースよ、我は汝に呼びかけたり。

思考と形態を貶めるものよ

力の内なる我のまえに來たり

我を永遠の闇で包みたまえ

ナイアルラトホテップの屍衣を我にかけ

我が星辰のなかをも歩み

人が我が存在を知ることのないようになさせたまえ

ゼント。ヘダルブス。タサク。

突如として魔方陣から凄まじい量の闇が溢れだし老人の男を包みだした

「おお、成功した！！

フフ……やったぞ

ついに完全な存在に……」

老人を包みこんだ闇は、次元の裂け目に染み込むように老人と共に姿を消した

魔方陣は、輝きを失った

\*\*\*\*\*

老人の魔術は、真っ白な空間に放り出された

辺り一面が白

ただ目の前に人間の心臓のような物体が拍動を続けていた

「……ようこそ私の世界へ「アサフ・ギルマン教授」……」

心臓の物体から直接脳に叩き込まれる感覚がおきる

ドクン ドクンと不気味な音が空間内に響くなか

「おお！！ついに私はこの叡知にたどり着いた

アザトース！！私を不老不死に！！完全なる神の存在にしてくれ」

「……………」

老人は、興奮冷めやらずの状態で目の前の宙に浮く心臓に話かける

心臓の物体は、それを聞くなり冷たい口調で

「自惚れるな人間……「魔術を極めたから神にしろ」

「私の前に来たから不老不死にしてくれ」

滑稽だ……貴様は、そんなことで神になれると思っているのか？」

「契約違反だ……罰を与える  
ヨグ……傲慢な人間に相応しい罰を与えてやれ」

心臓の物体がそう言うのと隣から空間を切り裂いて虹色の人型の物体  
が出現した

「御意」

「まー!! 待て!!」

私は、全てを知りたいだけなのだ  
そのためには、寿命なんて物に縛られるわけには、いかないのだ」

虹色の物体が近づいてくるなか老人は、後ろに後退りながら弁解を  
述べる

「………フン、大昔の人間は、弱かった………それなのに何故………地  
球の頂点に立てたかを教えてやろう  
人間は、不老不死の体を代価として地球の頂点の生物となったのだよ  
その結果、寿命に縛られる運命を選んだ  
それなのに………」

心臓の物体は、空間を一瞬で移動し老人の目の前に再び現れた

「もう一度、不老不死をよこせだと………調子に乗るな人間」

「ま、待て!! グボッ!!」

虹色の物体が老人の口に手をつっ込みだした



「さて、またゲームが出来るな……ヨグ……やれ」

「……………」

虹色の物体の中心から老人の体に何かが注入されていく  
必死で藻掻く老人だが徐々に生気を失っていく

「正直……お前らのような馬鹿野郎がいるお陰で我々も退屈せずむすむす

外なる神は、単体で人間界に干渉が出来ないからな」

ドクン      ドクン

「あ……あっ……」

スブッ

虹色の物体が勢いよく老人の口から手を切り離す

「お前の名は何だ?……」

老人の口元からは、人間とは思えない声が溢れだしこう言った

「トウールスチャでございます」

ドクン      ドクン

「トウールスチャ……お前の体の持ち主は、インスマスにいる  
そこで、お前は人間に狂気を与えエネルギーを得ろ

……そして、もう一つ……その地に「シラガミ」という男がやって  
くるはずだ

私の前にその男を連れてこい………」

老人の皮を被ったトゥールスチャは、一礼をしその空間から消えて行った

クク……等価交換だな

## 夢(？)、等価(後書き)

オマケ シェフ 溟邏スペシャル

休憩

燐靜 「5時間やった……」

溟邏 「そらあ、疲れるのう！！5時間じゃぞ！！」

シラ 「大分、畑もよくなったな」

休憩終了！！！！

燐靜 「作業再開ですよ……寝転んでないで……」

溟邏 「え！！もう！？

マズいぞ！体力戻らなくなったぞ」

シラ 「さすがに、十分じゃもうダメだな」

燐靜 「次は、いよいよ種まきに入るから……そしたら終了」

6 R (11..00) 12..00) カアン

畑の土を鍬できれいにならす

燐靜 「溟邏……もう、疑問が無くなった？」

溟邏 「そうじゃな……」

燐靜「でも、これはあくまでも「料理を作る」のが目的……今は、準備段階で手間取っているだけ」

溟瀾「それを、聞くと腹が立ってくるのう!!」

10分経過

ついに畑が完成!!

いよいよ、野菜を植える作業に入る

溟瀾「これが、スイカじゃな」

月南「その苗に優しく土をかぶせて、押し込んでください」

どんどんと畑らしくなっていく

燐靜「これで、大体いい?……月南」

月南「最後にエンドウ豆があるので……ここに植えますか……」

植えるスペースがなくなったので畑の敷地から少し出た所に植える  
月南

溟瀾「そんな所、耕した覚えはないぞ!!」

そんなこんなで

農園完成!!!!

次回は、一気に野菜が育った1ヶ月半後

しかし、思わぬ展開が！！

## 覚醒（漆）、編入試験（前書き）

昔やったゲームシリーズ

「マリオカート（SFC）」

マイキャラは「ヨッシー」

そういえば、「ドンキーコングJr」何処にいったんだろう？  
最近見ないですね

## 覚醒（漆）、編入試験

覚醒の世界

いよいよですね……

本日は、奏と隣靜が通う高校「白邏はくら高等学校」の編入試験であった

「月南くく！！リラックスして試験に臨めば大丈夫だから！！」

「全力投球……ファイト」

「フレイフレイ、つ・き・な！頑張れがんばれ、つ・き・な」

正門の前で応援メッセージを送る三人（ちなみに、最後の応援は、清孝さんです）

編入試験は、他の生徒の学びを邪魔しないようにの配慮で学生が休みの日に実施された

月南は、正門を潜り抜け（くぐりぬけ）、威風堂々と青年を見下ろす学校を見上げる

やはり都市でトップクラスの学習機関なだけあって規模は、かなり大きい

白を基調とした校舎に屋根は、朱色をしている

「では、行ってきます……」

月南は、一回だけ深呼吸をし、前に足を踏み出した

試験を受ける者だけしか入れないので応援人は、正門でお別れである  
少しずつ小さくなる月南の後ろ姿を見て

「友達が一人で試験を受けに行くって……なんかキンチョーする……」

「ここの編入試験は……かなり難しい……入学試験よりも……」と  
さらりと憐静が言う

「えっ!! 嘘ずら（嘘でしょ）入学試験よりも難しいの？」  
「編入者は、現在の生徒の学力をある程度超えているのが前提条件  
……」

「それで……編入者が今迄来なかったわけか……」  
妙に納得の奏

「それでも月南くんは、大丈夫だよね?!?!  
奏ちゃんと憐静が家庭教師したから……」  
と清孝（憐静の父親）

「……………断定不可」

「現在の生徒の学力を超えるって……いっさら（全然）分からん……  
……って何で今言ったの?!?!? 憐」

「……………（無言）」



不安が最高値に達してしまった  
一方、その本人の月南は

「え〜とっ……確か試験会場は、一階の「3年7組」ですから……  
あ!! あった」

玄関から校舎に入って左側に進んでいくと長い廊下があり  
そこの突き当たりから2番目の教室が本日試験が行われる予定である  
ガラガラッ!!

教室の引き戸を開けて中に入ると、机と椅子が一組だけ置かれていた  
試験を受けるのは、私だけのようですね……（受けるテストが入学  
試験よりも難しいのは、知りません）  
持ってきた鞆を机の横に吊されている止め金に引っ掛け試験開始ま  
で待つ

「今日は、少し曇り気味ですね……」

何気なく窓の方に顔を向ける

曇天という程ではないが、ほとんどが雲に覆われており所々にかす  
かな日の光が漏れだしているような天気であった

（最適な状態は、リラックス状態じゃ!!

着いたら空でもボーッと見ているといいじゃろ）

試験場所に向かう前に溟邏から言われた言葉を月南は、無意識に実

行していた

（学習は、常にリラックスをしなければ身に付かんぞ  
……それとわらわは、永い時間生きておるから分かるのじゃが……  
失敗する輩と頭の悪い奴には、ある共通点があるのじゃ）

「共通点……ですか？」

（そうじゃ……そういう奴は、「空虚な思考」ばかりする……いわゆる考え過ぎじゃ）

（いいか……「思考」という動作は、学習の大敵なのじゃ考えれば考える程、泥沼に入る……動きが鈍くなる……よって、問題を解く時、何かを身に付ける時に「思考」をしてはならぬぞ）

「えっ!!? よく理解できないのですが……」

（理解か……それも立派なことじゃろうが……それも学習の妨げじゃ……優先すべきなのは「覚える」ことじゃその後でゆっくり理解をするのじゃよ……勿論、覚える動作にも「思考」をするな）

「??? えっ!?! つまり丸暗記のことでしょうか？」

当然の反駁

「ん?!!! ……丸暗記というのは、「思考」を入れた暗記のことじゃぞ……全然違う」

という会話を連日行われたのだ

正直……納得いかない

新しいのを学ぶのに人間の思考能力を捨てろ!! だなんて……今迄

聞いたことがない

その文句を溟羅にぶつけると少し笑いながら

（まだ：その真意が分からぬか……だが、世に名を残す天才と呼ばれた人間の学習方法じゃよ……）

と言われた

月南の頭の中は「???」で一杯になっていく

分からない……

でも、リラックスするのは大切だということは、分かった

試験には、リラックス!!

と意気込みを入れた所で

ガラガラッ!!と教室の引き戸が開けられ封筒を持った男性が入ってきた

「おっ!! もう来てるな!! 感心、感心何事も早めにするのは、いいことだ」

背広姿の男性は、月南の前にやってくると封筒の中身を確認しながら

「えっ…と…俺が今回君の試験監督を勤める「海塚」だ、専門は歴史学!! まあ、覚えなくていいや……君に会うのは、これ以後ないかもしれないからね♪」

ケラケラと笑う試験監督

「よ、よろしく願いします……（元気がなくなる）」

「さて：早速試験を始めちゃうか……！！科目は、5教科「数学、化学、物理、英語、国語」全力で解くように」

と言って封筒の中から「国語」と書かれた冊子を持ち月南の机に綺麗に置く

問題冊子の中に解答用紙が閉じ込まれているようだ

それを終わると何処からかパイプイスを取出し

月南の机の真っ正面に置いた

「よし……まずは、国語の試験から始めます。解答時間は、80分間だ……！！」

試験監督は、左手に付けている腕時計で時間を確認しつつパイプイスに腰掛け

「試験開始……！！」

月南は、その言葉を聞くと解答用紙を取り出して解答を始めた

白邏高等学校編入試験がいよいよスタートしたのだ

国語……………80分

英語……………80分

化学……………60分

物理……………60分

数学……………120分

の時間配分で試験は、行われる

最後の数学にまで体力を残しておかないといけなかったので大変だ

\*\*\*\*\*

「はい、そこまで！！全科目終了！！お疲れさん、問題用紙は、処分するのメンドいから持ち帰って」

最後の試験、数学が終わり精魂尽き果てたような感じで月南が机に頭をつけていた

途中からほとんど、覚えてない

出来たのか、出来ないのかも分からない

なんとか、帰る支度をするため机の横に掛けてある鞆を取り出していると

「あっ！！結果は、1週間後にそちらに送るから……ダメだとしてもガツカリするなよ！！じゃ、今から君の点数を採点の仕事があるから！！しっかり帰るように！！」

最後まで話し方が変わらない試験監督であった

疲れているため無視!!

ああ……この1週間が凄く怖い

取り敢えず帰宅するため、鞆に筆箱と大量の問題冊子を詰め教室から出ていった

いつの間にか、空から雲が消えて快晴となっていた

## 覚醒（漆）、編入試験（後書き）

オマケ シェフ溟邏スペシャル

一気に飛んで1ヶ月半後↓

シラ「はい、どうも……畑開墾から1ヶ月半が経過して料理企画としては、異例の長期ロケになりました。今日は、いよいよ収穫に入りたいと思います」

溟邏「やっと！！収穫じゃな！もう、バッチリとシェフの格好をきめてきたぞ！！」

その場でクルッと回転しシェフの姿を見せつける

隣静「……いよいよ、出発」

車に乗り込み移動開始

溟邏「まもなくじゃな！！」  
やる気満々

現場到着

隣静「作物の出来栄を確認……」

車を降りて開墾した畑に向かうメンバー

溟邏「おー！！育っておるのう♪」

健康そうに成長している作物に思わず頬が緩む

燐靜「大根も無事成長…」

溟邏「エンドウ豆もじゃ」

燐靜「……じゃあ、収穫は調理の直前で……準備」

準備

溟邏が持ってきた鞆の中から調理器具を取り出して皆に見せる

まずフライパン

シラ「いい物だな……」

しかし、この後の燐靜の一言からとんでもないことになっていく

燐靜「月南……食器は？……ないの？」

食器？

燐靜「持ってこなかったの……？」

忘れた！！

皿がない↓盛り付け出来ない↓料理できない

シラ「料理人は、皿にもこだわるからな」

何か気が付いた溟邏



溟邏（こやつら……作るつもりか…）

燐靜「どうする？」

溟邏「わらは、別にフライパンから食べても大丈夫じゃぞ！…なんなら、コンビニで買ってきても」

燐靜「コンビニの皿……ダメ……ちゃんと陶器で出来た物…」

溟邏「いやいや、だから今回使うように「クアントロー（フランベ用）に買ってきた」とパイ生地を再び練ってきてもらったのじゃ！！

燐靜「だから……それを乗せる皿がない……」

溟邏「いや、じゃから買って……」

シラガミに肩を叩かれ

シラ「気に入った皿……作りましょう」

溟邏「待てまて…」

皿を作る

次回、皿作り編

料理は、いつになるの？

## 夢(？)、インスマス(前書き)

昔やったゲームシリーズ

「星のカービィ スーパーデラックス (SFC)」

好きなコピー能力は「ミラー」

カセットを横に揺するだけでデータが全部消えるオマケ付き

## 夢(?)、インスマス

夢の世界

見捨てられた魚人の町

「インスマス」

あまり地図に載らないさびれた港町である。

かつては、漁業や金の精錬などで栄えていたが、現在では鉄道も廃止され、家々のほとんどは廃屋となっている場所であった

シラガミ達は、クトウルフの助言を聞きこの町を次の目的地としたのだ

今日の昼過ぎに到着したのだが……  
こんにち

「ンググ……強烈じゃ」

溟邏が旅館の部屋で苦しそうに鼻を両手で塞いでいる

もはや人化すら出来ずに真の姿である九尾の暗狐の姿でジタバタ!!

「臭い!!……おのれ……あのバカ髪め（クトウルフのことです）こんな所を紹介しおって!!……くうう」

溟邏がこれほど苦しがるのは、この町に入ってからであった

この町に入った所から「魚の腐ったような」生臭いが辺りに漂っているのだ

それも、人間の何十倍の嗅覚を持っている溟邏にとっては耐えられない臭い

ちなみに、町に入って直ぐに溟邏の人化が解けだしてきてしまい、金髪のシラガミとカムナギが協力して近くの旅館へと避難したのだしかし旅館の店主は、おろか人間が誰一人いなかった為勝手に部屋に避難した

昔ながらの旅館なのか隙間風（隙間臭？）が酷く臭いが立ち込めてしまっていた

狐の苦悩は続く

そんな溟邏の様子を見て、金髪のシラガミとカムナギは、なんとか溟邏を臭い地獄から救う為に役立ちそうな物を探しに旅館から出て行っるのだ

（シラガミに懐いているカムナギは、半ば強引に付いてきいるのだ  
が…）

シラガミ的には、溟邏の側にいて励ます（↑？）等をして欲しい所だった

「早く帰って来い……グゥ」

尻尾を所々欠けているフローリングに目一杯広げてグッタリとして  
いる狐が一匹

\*\*\*\*\*

一方その頃シラガミ達は…

「何処に行っても…廃屋だらけですね…」

少し霧が立ち込める町の大通りを往来しているが  
もはや何年も人間が住んでいないかのように廃屋が連なっているだ

けであつた

確かに魚の腐った臭いはするが溟邏とは違い、動きの動作を全て鼻を摘むということするほど強くは、ない

「本当に此処であつてるの？しらがみ」

金髪のシラガミの黒い服の裾をちょこんと掴みながらカムナギが言つた

それを聞かれると私も困る……

私が目覚めた時からずっと一緒にいる少女（溟邏さんの話では、私が助けたらしい）は、最初こそ話さなかったが今では、話すことが楽しみらしく「インスマス」に向かう道中に色々な話をしたのだ

そして…自分の身の上についても……（前に「両親がいない」と言つたのは、シラガミとめいらが信用に足る人物かどうか分からなかったため）

元々は、「ウルタール」で家族と一緒に住んでいたらしい  
神の存在や宗教等を研究する神学の専門家の父親と家庭の家事を一身に受ける献身的な母親

あと、4歳年の離れた弟がいるとのこと

カムナギという名前は、東の国で「神南備」と書き

神聖なモノで不浄な獣や悪霊から身を守ってくれるという願いを込めて父親から貰った第二の名前らしい

本名は、「アリサ・アーミティッジ」

父親の名前は、「ヘンリー・アーミティッジ」でこの世界最高峰の大学である「ミスカトニク大学」で神学の教鞭や校内にある図書館の館長だったという

ミスカトニク大学：別名「邪神研究の名門」

次元が変わる前の「アーカム（シラガミの同級生だという「ギザイア・メイスン」がいた場所）」に位置する総合大学である

政治経済学、英文学、心理学、考古学、人類学、歴史学などを教えているが、裏では、旧支配者に関する研究が盛んに行われていた大学

カムナギの故郷である「ウルタール」：別名「猫の街」猫の神バストの守護を受けており、知恵を持つ猫たちが多く暮らしている

平和に暮らしていたカムナギであったが父親の「ヘンリー」の神学研究がかなりヤバイ所まで進んでしまい

当時のカムナギの父親の助教授であった魔術師「ハオン・ドル」が外なる神の一角「ウボ・サスラ」の断片を見てしまい精神が壊れ行方不明となってしまった

ウボ・サスラ……謎多き種族「外なる神」の一角別名「始源にして終末」

その責任を取る形で「ヘンリー」は、教授職を退任しカムナギ以外の家族は、国外追放の処分を下され  
一家は、バラバラになってしまった

話すのに困難を抱えていたカムナギだけは、口外の余地なしと判断

され国に留まることが承認されたが家族に会うことは、言語道断で許されなかった

そのため実質、国に拘束されたカムナギは、父親のしていた研究を詳しく知る為に故郷を離れ父親の別荘がある「セイレム」へと向かった

（故郷からミスカトニック大学は、遠いため近くの町に別荘を建て住んでおり夏期休業の時に帰ってくるという生活パターン）

そこで父親の書庫を調べていた所に魔女狩りの風潮が始まり神学について調べていたカムナギが標的になったのだ

普通の逮捕された女性は、拷問や処刑を恐れて、赤の他人に罪を押し付けたり、告発などをして抵抗するのだがカムナギには、それが出来ずに酷い拷問を受けた

そこにシラガミ達が助けに来て現在に至るのだ

彼女がこの旅に同行する目的は、離ればなれになった家族を探すことである

やはりこの世界は、何かが変わり始めているのかもしれない……

そんな不吉な予感が滴る（したたる）

\*\*\*\*\*

話を戻してインスマス

さつきから風景が微塵にも変わらない

いや、屋根が抜けているのといないのがあるため正確には違うが

見渡す限り廃屋、廃屋…人っ子一人いない

町全体が静寂に包まれるなか……本気で早くこの町から離れたいと思っ  
たシラガミ達だが……

「おめー達、何しに來ただ？」と後ろから子供の声が聴こえ、静寂  
に慣れていた耳に響く

ビクッ！！！！

二人揃って後ろを向き声のした方を見ると

黒いマントに深海魚のような面をかぶった子供がそこにいた

「ここらじゃ……見ねえ顔だが…こんな寂れた町に何の用だ？」

あまりに風変わりな姿に一瞬たじろぐが

「えっと……ここの住民ですか？」

取り敢えず一番気になる質問をぶつける

「んだ！！今祈りの時間だから…地上には、  
オラ以外いないぞ」

何とか人がいることがわかった

深海魚の面をかぶった子供は、まじまじと二人を見つめる（面をか  
ぶっているから視線はわからないが…）



「おめー達人間か？珍らしいな…ここは、随分昔にさびれてから外部の人間は、訪れていないだよ」

「そうなんですか……」

何とも寂し気に顔を俯く面をかぶった子供にシラガミが相槌を打つ

「オラの名前は「ダツケイ」だ、最初の質問に戻るがおめー達何しにここに來ただ？」

「えつとですね……」

シラガミは、この町で情報収集をするために來た（さすがに、暗黒書物の名前は出さないほうが良いだろうと判断して）と話した

「そっか…見た所悪い奴じゃなさそうだな…この町の住民は、ほとんど夜行性に近いから夜、日が落ちてからが収集もしやすいと思うだ」

時刻は午後3時を回った所、あと、四時間後に行動を始まればいいかな？

さてよ…夜行性だから情報収集の前に仮眠をとっておいた方が……

シラガミが簡単な考え事をしている時

「じゃ…！オラ、町の長に客人が來ていることを伝えに行くだ…！」

と言ってダツケイは踵を返して歩き出した

「あ…！待って下さい…！もう一ついいですか？！」

臭いを抑えられる良い方法はありますか？」

と聞くとダッケイは、「やっぱり、外部の人間には、えらいか（キツいか）！！」

日は、徐々に傾いていく

\*\*\*\*\*

とある山脈の頂上に放置されている城

城は、屋根の部分が角張った造りをしており天辺から徐々に下に行く程広がっていた

その屋根に一人の女性が虚空を眺め不思議な旋律の歌を歌っていた

「♪ふんぐるい 闇から

むぐるなふ 血の海

外なるアザト 人間乗っ取る

エイボン闇よりいで来なんふんぐるい 混沌

むぐるなふ 万物……」

女性は、闇を弾く程の白い髪を有し長いツインテールであった

目的もなさそうに屋根に寝転びながら、蛸のぬいぐるみを抱きしめている

格好は、上流階級のような服装をし、ひたすら口調を変えずに歌を歌う

「♪いあ いあ 黄の印

あくふあやく 夢見る力

ふぐとらぐるん 大陸沈む一人の人間 どうなった

外なるアザト 契約交わして どうなった

ふんぐるい 闇から…」

彼女の目の前には大きな万華鏡の月が幾重にも重なって見えた

## 夢(?)、インスマス(後書き)

オマケ シェフ溟邏スペシャル

あらずじ 料理を作るといふ企画に意気揚々と車に乗り込んだ溟邏であつたが連れて行かれたのは荒れ果てた農地であつた

開墾し畑を作り、種を植えた

いよいよ収穫の時!!と思つた矢先に燐靜から「皿を作る…」といふ衝撃の言葉が

移動(皿作りの場所へ)

燐靜「揺れるぞ……」

上下左右に揺れる車内で溟邏は、グツタリとして腰を落としていた

溟邏「ハハハハ……」

燐靜「パイ生地を…また持つてくるなんて……」

妖怪の友達に頼んだ

ご自慢のパイ生地

助手席に座っている燐靜が溟邏達の方を向きながら呟く

溟邏「忙しいなか…作って貰ったんじゃ……」

軽く目をこすりながら溟邏が言う

溟邏「そういえば…その友達も言っておったのう……」「まだ、騙されてるんだから今回は、止めておいた方がいいよ」と言われた所を「何言っておるのじゃ!!そんなわけないじゃろ!!」

前は、野菜を作ったんじゃないから今回は収穫じゃよ!!」と言ったんじゃない」

力なく背もたれに倒れこむ溟羅

まるで乗り物酔いをした人のような格好をとり座る

燐靜「やっぱりフツーわかるんだよ……」

溟羅「そうか……わかるのか……初めて「アンタ騙されてるんだから!!」って言われたのう……そういえば言っておったかのう「次、皿でも焼くんじゃないですか」って」

一同失笑

グデグデと落ち付きがないように態勢変え続ける溟羅  
左手を大きく伸ばし天井にあるライト調節をいじり回す

溟羅「わらわは、今から皿を焼きに行くんじゃない……（遠い目）……  
まだ野菜は育ちきってなかったのう……トマト……まだ青かったし」  
窓の外を見つめ移りゆく景色を眺めつつ

燐靜「まだあと、1週間かかる……皿は大体2週間……」

溟羅「そうじゃろ……じゃあ、今日生地作ったら早い……腐っちゃうじゃろ」

ほとんど寝転ぶ態勢になり片膝をシートにかける

燐靜「じゃあ……言わせて貰うけど……「料理を作る」って聞いて……お前がパイ生地練ってきて貰うなんて……こっちの知ったことで

はない……」

ピクッ

溟邏は、手に持っているペットボトルで座っているシートを叩く

溟邏「なるほどのうー…良い事言ったな燐靜……おーい（片膝を立てながら）！！

随分気持ちいい言い方じゃな……」

脅迫

この先は、溟邏が燐靜に向かって言う呪いの言葉です

「燐靜……お主の肉親を…わらわはどんどん…おみまいしていくぞお……」

「どーも父さん……知ってるじゃろ……溟邏でございます！！おい、パイ食わねえか！（大きい声で）  
村人達もおいで……パイを焼くぞお……」

シラガミ「怖え！！」

「辛いかい？……わらわはもっと辛い物をお主の娘に食べさせられておるんじゃ……残さず食うんじゃぞ」

シェフの格好をした女性が薄ら笑いを浮かべ包丁を片手に皆が食べる様子を観察

という情景が浮かぶ

「父さん……今行くぞ…パイを届けに……」

パイ食わねえか！！

続く

## 覚醒（捌）、間の街道（前書き）

遅くなりました！！

今回から新展開の連続です  
次回も覚醒の世界です



## 覚醒（捌）、間の街道

真っ白な空間

からうじて見える地平線の歪み方でこの空間が球形の姿であることが認識できる

そんな空間に黄金に輝く髪を持ち深海をイメージさせる蒼眼  
長い髪の間を縫うように白く細長い耳が出ている青年が坐禅を組んでいた

青年の顔は、絶世の美女のような姿であり巫女服とおぼしき服装で鎮座していた

「……全体の二割程度……インストール完了だな……」

青年は静かに呟いた

絶世の美女のような面持ちであるが、彼の名前は「シラガミ」

覚醒の世界で生き続ける人間「真槌月南」の源身であり魔術の世界でトップに君臨している

シラガミは、ゆっくりと立ち上がり白い空間を見渡した

彼がいる空間は、通称「間の街道<sup>はなまのかど</sup>」と呼ばれる所で幾つかの世界を行き来する時に必ず通らなければならない世界である

一説によれば覚醒の世界で亡くなったモノがこの空間を経由して「あの世」に行くと言われており

真っ白な空間であるがため人によっては、美しい花畑やきれいな川

という「幻覚」を見る

俗に言う「三途の川」がここにあたる

いくつかの世界の境界となっっているためこの空間から違う世界へ旅立つことも可能であるが、常人で行うのは大変困難であり、行った世界から帰れなくなるという危険も孕んで（はらんで）いる

ほとんどのモノは、一方通行の街道を通り「あの世」と呼ばれる世界に連れていかれるのだ

絶世の美女のシラガミは、一通り見渡した後、ある一点を見つめだした

「……？ 奇妙な世界が近づいている……今まで感じたことのない程の…」

シラガミの見つめる一点に突如として空間（間の街道）と奇妙な空間がうねりながら重なった

その様子は、まるで二つのシャボン玉がくっ付いていくのを中から見ているようであった

重なった空間から冷たい水晶の階段が真っ白な空間の真下へと伸びて行った

間の街道には何度も来たことがあるシラガミだが、今まで感じたことがない程の「冷たい」空間が目の前に出現したのだ

「……？」

シラガミは、ある意味好奇心の塊である

自分の知らない世界を知りたいという知識欲が沸々とどこからともなく湧いてくるのだ。

シラガミは、自ら真っ白な空間にぽっかりと出来た階段を足元を確かめるように踏み出していった

踏み出していけばいく程、水晶の階段の奇妙さが浮き彫りになっていく

階段の両脇には壁があり、ある一定の間隔毎に燭台が仄か（ほのか）に蒼白い焰がユラユラと水晶の階段を照らしている

階段は螺旋状になっているらしくグルグルとスパイラルを描きながら階段を下っていく

15分（この空間では時間の概念がないためシラガミの体感時間）くらい歩いただろうか、水晶の螺旋階段の最深部には、円錐形の大きな門が突如としてシラガミの前に現れた。

その門もなんとも奇妙で「ブブブブ……」という音を立ててブレているのだ

「…………ゴクリ…」

生唾をシラガミは、飲み込むそっとブレている門に手をあてた

すると門の中心から全体へと緑色の光を出しながら不可解な文字列が浮かび上がっていく

「汝の意識するところを行え」

「すべての男女は星である」

「アストロノミコン」

「ナコティカ」

「アクアデインゲン」……等の文字列が現れ、思わずシラガミは門から手を慌て離した

不可解な文字列が門全体に行き渡ったと同時に門が大きく口を開きシラガミの身体を空間の一部ごと丸呑みしていった

「!!!!」

巫女姿のシラガミは、抵抗をしたが強力な鏡返しの術が仕掛けてあるらしく、打ち込んだ魔術がごとくと跳ね返されるのだ

「鏡返しか……凄まじい魔術使いが作った空間だな……」

シラガミは、狭いパイプの中を流れる水と共に流されていき、じたばたと暴れることなく自分が向かう世界を見据える

不意に光に包まれた後、大きな水溜まり中に着水した

ピチャッ……水浸しとなった巫女装束に不快感を覚えながらもシラガミは、立ち上がり現在の自分の置かれている状況を整理

「なんだ?……この世界は……」

シラガミが着水した所は、水溜まりなんかではなく  
一般的な物よりも若干小さめの湖であった

後ろを振り向くと笹で出来た「ししおどし」のようなパイプがあり、  
かなりの水量の水が流れ込んでいる

間違えなくシラガミは、この水に流されてきたのだ

シラガミは、近くの岸边へと泳いでいき陸地に上がった

陸地に上がり水浸しとなった巫女装束の袴を持ち、水を絞った

ギユウウツ!!

ポタポタと水が滴り落ち地面に染み込んでいく

「……さて…」

絞り終えたがまだ湿っぽい巫女装束を翻し、シラガミはこの世界への真髓を調べるため歩みを進めようとした時

「♪いあ いあ 人間

人間一人に闇一つ

無から混沌 混沌秩序

川に流され やってきた♪」

「!!!!」

シラガミの真後ろの湖から女性の澄んだ声が響いてきた

シラガミが慌て振りかえると湖の水上で白いツインテールの髪型をした女性がまんじりとも目の前の人物を見据え、不気味な歌詞の歌を口ずさんでいる

「♪ふんぐるい 契約

むぐるなふ 代償

外なるアザト 狂気の連鎖霧 闇 混沌の使者

取り囲む♪」

楽しげに歌うわけでもなく無表情の白面で静かに歌いあげていく

「♪闇を切り裂く 万華鏡人間の境地かな♪……………」

歌い終わったらしく暫し沈黙が二人を間に流れた

「……………まさか、僕の世界に来るなんてね「代償を逃れし<sup>ひと</sup>霊所」  
たった一人の「ハイパーボリア人」よ」

シラガミは驚嘆した

目の前の娘が自分の一族の名前を言い当てたためだ

「!!!!……………何故……………俺の正体が……………」

ハイパーボリア人……………氷河期よりも前の時代に高度な文明を築いた  
種族

その科学、魔術の技術は、現代のモノと比較しても遥かに越えている  
氷河期の到来により大陸が沈み滅亡したと後世に伝わっているが、  
未だ謎が多い

シラガミは、そんな遥か昔に滅亡した種族「ハイパーボリア人」の  
唯一の生き残りであったのだ

「ここは、最も「真理」に近い世界。お前のような「真理から遠い存在」が来るべき所ではない」

ツインテールの女性は、不気味にケラケラと笑いながら白い右手を前に突き出し

「僕の世界から出ていけ」「代償を逃れし<sup>ひと</sup>霊所」よ僕の計画の邪魔はさせない」

突き出した右手を思い切り振り下ろすとシラガミの視界にブレが生じ、聴覚がおかしくなっていた

「ザッザお…えがザッザザふ…である限り…ザッザザザー」

シラガミは、完璧に魔術を封印され視界のブレが酷くなり、そのまま暗転していった

\*\*\*\*\*

真槌月南の家

ベッドに横たわって寝ていた月南がベッドから飛び起きた

月南は、真っ暗に包まれた深夜の部屋を見渡し

「はあ、はあ……しまった…戻された!!……あの女……クソツ!!」

月南は、自分の寝ていたベッドを握り拳で叩いて悔しがった

その月南の様子に隣で寝ていた溟邏が眠そうに瞼をこすりながらのっそりと起きてしまった

「?…どうしたのじゃシラガミ?…嫌な夢でも…!!」

悔しそうに鼻の下に手を当てている月南が溟邏の存在に気付くと

「……久しぶりだな溟邏……限界大戦以来か」

そこにいたのは、「女らしい月南」ではなく「世界トップレベルの魔術使い シラガミ」が片膝を立てて座っていた

「あ……し、シラガミ!! お主、記憶が戻ったのか!!?」

「……まだインストールの途中だ……不測の事態によってここにいる……」

「インストール?」

「……お前には、説明していなかったか……俺は不死の種族だ、死ぬことはないだが、年老いていき身体の機能も衰えていく……」

シラガミの説明に溟邏が噛み付いた

「不死の種族!!? …お主は、輪廻学を修めて不死ではないのか?」

「……説明不足だった……悪い……輪廻学は、元々「肉体の時間経過」を緩やかにする学問だ……まあ、傍から見れば不死に見えるわな……」

「そうじゃったのか……それにしても……ウルウル」



溟邏は、眼から涙をポロポロと流してパジャマ姿のシラガミに抱きつき

「良かった！！！わらわは、心配で心配で……ウツウウ」

「バ、馬鹿！！まだインストールが終わってないと言っている………  
…グガアアア！！！」

「どうしたのじゃ！！？シラガミ」

突如としてシラガミの身体がガクガクと震えだして、その場に力なく倒れた

まだ身体の震えは、止まらない

「……拒絶反応だ……この身体は、俺の人格と……合致していない……グッ」

「何じゃと！！わ、わらわは何をすれば……」

あたふたと慌てる溟邏をよそにシラガミは、震える身体を引きずりながら、おもむろに立ち上がった

「グッガアア……しかた……ない……不本意だが……やるしかないようだ……」

シラガミは、震える身体で手を前に合わせ、ゆっくりと眼を閉じ集中した

すると震えるシラガミの身体がグニャリと歪んだ、そして――

「はあー……ヤバかった」

シラガミの聲がかわいらしい女性の声に変貌を遂げ

シラガミの男性らしい姿形が一回り小さく華奢になり胸と腰が柔ら  
に膨らんでいた

金色に輝くしなやかな髪は、スラリと足元まで伸び

どこから見ても美女にしか見えない姿に変身したのだ  
拒絶反応がなくなったのか身体の震えが止まりグツタリとへたりこみ

「あゝ……久しぶりに女になったな……今の状況じゃあ、しょうが  
ねーか……」

また一つ、シラガミの知らない一面が顔を覗かせた

## 覚醒（捌）、間の街道（後書き）

オマケ シェフ溟邏スペシャル

土地の開墾から始める

世界一長い料理番組

今度は、皿を焼きに行きます。

陶芸の場所に到着

所狭しと置かれている陶芸用品

そこに頭に手拭いを巻いたシラガミと月南が立っていると陶芸家の  
ような格好の溟邏がやってきた

髭（つけ髭）をつけ、道着のような服に身を包んでいる

「ウオッオン！！わらわが陶芸の名家である「溟樂斎」じゃ……な  
んかよく分からんが複雑な設定じゃな」

腰にまいてあるエプロンの紐をギュツと絞める溟樂斎

「すっかり機嫌も良くなって……」

「未だに釈然とせんのだやよ……えーと（カンペを見て）……器を  
作るということは、自分の日常の振る舞いを見直し、人としての器  
を大きくすることである……」

人の器……！！

すかさず名プロデューサーの隣静が

「そう……器の小さい人間だとパイ生地が腐る程度で怒るから……」

「随分失礼な態度をとるのお!! 陶芸家の名家に向かって!!」

ビシッと燐靜を指さす溟樂斎

「それと……白斎<sup>はくさい</sup>!!」

「俺のことか!!?」

いきなり振られた白斎<sup>シラガミ</sup>がびっくりして目を見開いた

シラガミ↓陶芸家「白斎」

今回陶芸を教えてくれる先生の紹介

「えー…今回教えてくれる先生は、陶芸家の「矢部先生」です」

シラガミが紹介すると溟樂斎の前に35歳程の若い男性がやってきた

いきなり全員に挨拶の礼をするなど溟樂斎とは大違いの先生

「よろしくじゃな……」「心づく斎」

矢部先生↓心づく斎

「別に名付けなくていいぞ」

「これ以上はないぞ」

シラガミが溟羅の隣でスタンバイしている月南を指す

「もう、出てしまったからまた時間を置いてじゃな」

月南↓保留

「土」 陶芸で使う

先生に渡された土を見て溟邏が反応した

「ほおー！！これは備前土じゃな……備前焼きは有名じゃからな」

そこで先生は

「溟樂齋先生の愛した土なので！！」

「やりおるのおー」「心気く齋」……なんか打ち合わせしたのか？

打ち合わせしてません

先生のアドリブです

先生に土を返しながら溟樂齋は

「こっちの「金南く齋」きなんくさいよりもいいの！！」

「私の名前ですか、それ！！？」

月南↓金南く齋

なんだかんだで陶芸スタート！！！！

一つ目の工程「練る」

三人の前に先ほどの備前の土を三等分にして練ります

「そうじゃな……まずは土と戯れることが大切じゃ」

シラガミと月南が良く練る中、溟樂齋先生は長々とありがたい話をしている

「子供の時に作った泥団子の延長なんじゃよ……」

そして自らも練る作業に移るが

ゴキッ！！！！（意外に土が硬く手首をひねる）

「何やってんだよ……」

「うるさいのお！！！！」

ちよつとケガをしました

月南が溟楽斎の土を練ってみるが

「凄い硬いですよ、これ！！」

それを見た矢部先生も溟楽斎の土を練ってみるが

ゴキッ！！！！（以下同文）

「……心配……」

隣静が軽く呟く

次の工程「菊練り」

菊練り……空気を抜くために行う特殊な練り方  
菊練りした後の形は、アンモナイトそっくり

「これで陶芸家としての良し悪しがわかる……」

「黙れ！！」「鈍く斎」  
どんくさい

隣静↓鈍く斎

ムカッ！！！！

「……ここでお前のパイ生地練ってやる……菊練りしてやる」

ムカッ

「なんじゃと！！！！お主の家で恐怖の料理をしてやるぞ！！！」

「この窯でパイ生地焼いてやる……」

「わらわのパイ生地をそんなにいじめるんじゃないぞ」

「この窯は、どれ程の温度（矢部先生に質問）……………よし……  
1200℃でパイ生地焼いてやる」

「一瞬で丸焦げになるだろ……」静かなシラガミの突っ込み  
不毛な溟邏と隣静の争いが下火になり次の工程へ

ろくろ

回るろくろの上で練った土を置き形を整える

まずは溟樂斎

「これはあつという間に終わるからな！！しっかり見るんじゃぞ」

溟樂斎が回る備前土に手を当て、まずは一番上で小皿のような形を作る

「こうしてから徐々に器の深みを作るのじゃ！！」

なかなか上手い溟楽斎

しかし

外側が垂れてきて（器を深くすればする程、重力の影響で）かなりマズい状況に  
なんとか外側を支えつつ器を作る

しかし手を離すとグラグラ揺れる

「ヤバイヤバイ！！！」

そうしてる間に外側の一部が捲り上がり形が「カタツムリの殻」のようになってしまう

もはや深み作ることが出来なくなり終了

作品名「ヴィーナス誕生」

（本人曰く、「貝の形にしたのじゃ」ということらしい）  
「思ったより難しい……」

続いて「白斎」

回る練った土に両手を当てまずは小皿を作る

そして白斎なりに形を整えようと右手を器の深み作りをし、左手はろくろの下側に下ろしていると

ピシャリ！！



溟楽斎に左手を叩かれた

「こっちの手がお留守じゃ！！両手を使わんかい！！…………叩いた時に睨むなよ白斎……」

思わず睨んでしまった白斎

「いや……条件反射で…悪い……」

白斎は、回転寿司の取り皿より若干大きめの作品（形は綺麗）

金南く斎が回転している「ろくろ」を止めようとするが

そこへトラブルメーカーの溟楽斎がやってきて「ろくろ」の回転スピードをアップさせる

「おい！！やめろ！！…切り離せないだろ！！！」

「カッカカカカ♪」

なんとか止めて作品を切り離しに成功した

続く

## 覚醒（玖）、金色の女性（前書き）

「世界の果てまでイッテQ」の企画の一部「超田舎に泊まろう」が地味に好きです。

もう少し尺が欲しい……

## 覚醒（玖）、金色の女性

突如としてシラガミが可憐な女の子に変化を遂げた

つまり性別が自由自在に変えられる

古来より人々達の憧れであり神の特殊な能力として崇拝されている  
フサツと足下まで伸びた金色の髪を鬱陶しそうに搔き上げ溟邏の方  
を見る

「どうだ……驚いたか？」

いたずらに笑みを浮かべて可憐な女性が質問をした

溟邏は、目の前で起きた奇跡の出来事に驚きを隠せない

「ど、どうということじゃ！！？ お主はいつたい……」

「詳しく教えることはできませんが……オレの一族は別名「原始の一族」  
と言われている……人間と妖怪の共通の祖先だな。元々その一族は  
性別が自由に変えることができる。……オレも男として生活してい  
たが場合によって変えることも容易だ」

その場で胡坐あぐらをかいて座り、右手を右頬に持っていきそれに寄りか  
かる

「こんな秘密……出来れば話したくはなかった……だが、そうも言  
ってられない事態が起きているようだ……」

あまりにいきなり過ぎて会話についていけない溟邏

しかし、シリアスな展開であることは第六感により明らか

「な、何があったんじゃ？」と少し弱々しく……

「オレがこの身体に記憶をインストールしている最中の時に……不気味で寒々しい空間があったんだ……その空間を創りだしたあの女はかなりヤバイ……」

そこまで言う一旦話しを止め、悔しそうに後を続けた

「オレの魔術を打ち消してこの身体にまで戻しやがった……こんなことができる奴なんて今まで訊いたことがない……あのナイアルでさえ不可能な芸当だ……インストールを速めるか……」

最後の方は、まるで自分に言い聞かせるような口調であった

「ちょー！ちょっと待てー！！情報があまりに多過ぎて、正直理解し難いー！！」

まず、インストールとは何じゃ？」

「……オレの一族は、不死の一族だと話したな……」

「うむ、さっき聞いたぞー！！しかし、年は取ると……」

「そうだ……オレの一族は不死であるが不老ではない……避けられぬ瞬間が必ず訪れる」

一般に死と呼ばれる因果の鎖

「その瞬間に肉体が一度リセットされ子供の状態に戻る……つまり、不死鳥のような一生だ……」

「フムフム……！！じゃからあの時、記憶も全てぶっ飛んで金髪に戻ったのじゃな……！！……ということは、その後見る夢がインストール

と呼ばれ術が…」

「正解だ……やはりお前は頭が良い……」

不意に女シラガミに褒められなんとなく嬉しくなる溟邏

単純……（うるさい）

「その途中では、絶対に己の精神と肉体を混ぜてはいけない……拒絶反応が起こるからな……」

「なぜ起こるのじゃ!!? 自分自身の身体なのに!!」

思わず椅子椅子から立ち上がり、衝撃で乾いた木の音がガタンツと言って倒れる

「落ちつけ、今説明する……一度肉体がリセットされると年齢になった精神と波長が合わなくなるんだ……その波長を合わせるには、肉体に昔の記憶を刻みこんで自分の精神の形にしないといけない……その作業の過程をインストールと言う……」

なんとなく感覚で理解……

「そうか……ん!! じゃあ、今のお主はかなりマズい状況ではないか!!」

「そうだな……あまり前例のないことだから一瞬焦ったが……インストール前のオレの身体にも独自の人格があり、その影響でも拒絶反応が起きるんだ……もしインストール前の人格が男であった場合、老齡の精神が女であれば拒絶反応がなくなる……だから変わったただだ」

女シラガミは、胡坐の座り形から片足を立てて手をフックのように

立てた膝に引っ掛ける座り形に変えた

そんな様子を黙って見ている溟邏は、シラガミの今の置かれている状況に少なからず理解し先に話しを進める

「……じゃが、これからどうするのじゃ!!……インストールは終わっておらぬのじゃろ?……どれ位で終わるんじゃ?」

少し考える素振りを見せてシラガミが答える

「今までインストールしたのは……約半分だな。

そこまで行くのに40年かかったから……単純計算で後40年……」

あまりに長過ぎるインストールタイム

口をあんどぐりと開けて「よんじゅ!!?」と叫ぶ溟邏

「オレもなるべく速めるつもりだ。……となると今打てる最善の手立ては……日中は月南で行動させ夜になったらオレがインストールをするのがいいかな……」

そして、奴の空間に隙が出来たら侵入して奴（ツインテールの女の子）の目論みを得る

「というわけだ……また、よろしくな溟邏」

女シラガミは、またしてもいたずらな笑みで……

覚醒の世界で復活したシラガミ……まだ夜も明けきらぬ時間帯だが本日は、ビッグなイベントがあることをすっかり忘れていた溟邏であった

\*\*\*\*\*

朝の7時

月南は、昨日の晩に自分の本物の人格が戻ってきたことは知らない  
いつもと変わらない朝日が窓から一直線に家の中へと伸びていた

「えっと……今日は、雑草を畑から取り除いて作物の水やりかな」

木製のテーブルの上で今日の予定を確認する月南

とそこへ……

朝の閑静な月南の家に慌ただしい報告が訪れた

バタッ!!

「つゝきゝないる?!?!!!」

来たわよ来たわよ!!」

「……合否の通知が…」

ドアを勢いよく開け奏と燐靜がやってきた

ドア係↓奏

通知持ち↓燐靜

という見事なコンビネーション

あっ……すっかり忘れてました…

大きめの茶色の封筒を持った燐靜が月南にそっと手渡しを行う

「確認は本人で……」  
ボソッと呟く

月南は燐靜に一回会釈をして封筒を見つめる

今更だけど……凄く緊張する

心臓の鼓動がみんなに聞こえるのではないかと思ってしまう程である

少々震えた手で封を切り

中の書類を取り出す

どうやら合否判定通知の他にも書類があるらしい

そして一番先頭にある四分割に折り畳まれた一枚の紙キレを持ちゆ  
っくりと広げていく

結果は……

「い、合格です」

月南がみんなに見えるように反対向きに見せる

そこには赤文字で「合格」という字がクッキリと記されていた

「やったー!!!おめでとう月南!!!!!!」

月南の両手を掴みブンブンと嬉しそうな顔で奏がはしゃぐ

まだ実感がなくどういう対応をすれば良いのかわからない……



「グッジョブ！……難解の編入試験合格おめでとう」

親指を立てて軽く微笑む燐靜

「あ、ありがとうございます……二人がいなかったらダメだったと思います」

「何言ってるのよ！！アンタが頑張ったからよ！！」

そうか……月南と同級生になるのか………そういえば編入試験ってどんな問題が出されたの？」

「……気になる……」

「えっと……その棚に入れてあるはずです

怖くて試験明けから一切見てませんけど……」

月南が年季の入った棚の上から三段目から微かに埃がついた封筒を取出して二人の前で広げた

奏と燐靜が問題に目を通すと

「えっ……何これ？」

\*\*\*\*\*

白羅高校

月南の試験監督を勤めた海塚が校長室でお茶を頂きながら何かを話している

「校長……あのテストは反則ですよ！！」

「フフッ！！なんせ初めての編入試験者じゃからな少し気合いを入

れて作ってしまったわい……まあ二割取ればいいほうじゃわい」

合格ラインは六割超え…

海塚の話をしているのは白羅高校の校長である

「カゲタ・ボリア」

何を隠そう、この世界を支配するボリア一族の血を引く存在

丹精に伸ばされた口髭を自慢気に撫でながら海塚から渡された書類に目を通す

一枚めくり、もう一枚めくる

……めくっていく内に校長の顔色が変わりだし冷や汗がダラダラと流れていった

「驚きました？満点なんですよ……全教科」

「ば、バカな……そんなことが……」

今回のテストは、編入試験や入学試験に出題する範囲を遥かに超越したテスト

相対性理論のローレンツ因子を導く計算

ローレンツ因子…時空の曲がり方を算出する数  
導くには深い物理の理解が必要

不確定原理の証明

バーゼル問題等々

高校生が解くには難解な問題が多くあり、数学者でも難しいとされる

この問題を月南は満点を取ってしまったのだ

〈チャレンジコーナー〉

月南の解いた問題を一題出します

(1)、次の無限等比級数の和を求めよ。またこのようになる自然現象の名前を記せ

$$10+30+90+270+810+\cdots$$

答え、和は「15」

現象名「カシミール効果」

注) この問題は、数学界で異端のため高校の先生には決して質問しないで下さい

(解説は要望があればします)

~~~~~

再び、海塚と校長先生の会話

「今までの学生では考えられない頭脳を有しているようですね……  
文句なしの合格」

「……儂の偉大なる先祖である「エイボン・ボリア」を彷彿させる  
のう……」

未だに冷や汗が止まらないが冷静な口調で話す

「よかろう……この少年を合格とする……どこまで伝説に食らい付けるか見物じゃな…」

通知発送の二日前の出来事であった

\*\*\*\*\*

## 月南の家

あまりの問題の難しさに仰天する奏と燐静

「……なぜ…これで合格できる……？」

「私達でさえ習ってない事だらけ……何でよ？」

「えっと……問題文を見たら解法が頭に浮かんで……というよりは、昔何処かで見た事がある物だらけでし…そんなに凄いことですか？」

相変わらずの金色の髪を掻きながら不思議そうに言う

何者……！？

と奏と燐静で顔を合わせる「さすが月南……将来の婿よ「ああゝ！もうこんな時間！！燐行くわよ！！バカなこと言ってないで！！！じゃあ月南、一緒に登校できるのを楽しみにしてるよ」

燐静の首根っこを掴み踵を返して月南の家から出て行った

またもやデジャブ……

奏、燐靜と一緒に高校生活か……楽しみです

家の出入口の方を向いていた顔を書類や問題文等でごった返しになった机に向きを修正

さて……通学手続きを済まさない……と考える

「成る程、無事合格したようじゃな……」

「!!!!!!」

そこには、さっきまで影もなかった大妖怪 九尾の暗狐「溟羅」がいた

月南の合格通知を手で摘み顔を斜めにしながら眺める  
いつの間に……

「カカカ!!! シラガミの頭脳なら当たり前じゃな!!!  
忌々しい人間の輪の中に入られるのが癪じゃが……学舎の中で存分に人間の本性を見るが良い!!!」

ヒラヒラと月南の合格通知を机に戻し、妖麗な微笑を浮かべる溟羅

「(ピシッ!!) ……人間に憎しみを持っているのか……」

!!!!!!

空気の破裂音と共に一瞬だけ月南の身体が可憐な女性に変わりボソリと呟いた

その様子は何処か哀しげに……

「あ、あれ？私今何か言いました？」

突如の違和感にたじろぐ月南の尻目に溟羅は、顔を伏せニヤツとする

（自由に出てこれるらしいのう……シラガミにも知って貰わなければ……）

人間の薄弱さを

シラガミ  
月南の学校生活まであと少し

シラガミが危惧を唱える恐るべき女性

白髪のスインテールに高貴なる貴族の服に身を包んだ年若い子

今日も何処かで不吉な旋律と歌を届けているのだろうか？

♪ふんぐるい むぐるなふ代償を逃れし靈所<sup>ひと</sup>

シラガミ 漆黒の中で埋めく混沌

気を付けろ 気を付けろ

お前の身体がなくなる

その瞬間まで

## 覚醒（玖）、金色の女性（後書き）

オマケ シェフ溟邏スペシャル

くく怒涛の皿作りくく

溟楽斎（溟邏）と白斎がなんとか、ろくろで皿の形にした

金南く斎（月南）

ろくろで皿を作る経験をしてこなかった金南く斎  
ろくろの上で回る粘土に触れ思わず

「うわっ……う」

不思議な感触に驚きながらも皿作り

「うわ！！結構、力入れないとダメですね……ひい」

バシッ！！（後ろにいる溟楽斎と白斎に叩かれた）

「はよ、作らんか！ただでさえ遅れておるんじゃから！！（パイ生地  
の件も含む）」

「すみません……」

ちなみにシラガミは、その場のノリで叩きました

ゆつくりと金南く斎は、回る粘土の頭の部分に小さな凹みを作り、  
徐々に広げていく

段々と広がりを見せ、醤油皿程度まで大きくなったが

「どうやりました？さっき」この先のことがスッポリと抜けた金南く齋

「お主は観察力がないのうわらわとシラガミがやっていたのを見てないのか……」

やはり質問して真面目に応える輩はいなかった

金南く齋の試行錯誤スタート!!

まずは、手前に広がる粘土に猫の手のような形にした指を当てる

溟楽齋の「違うな……」という発言でお蔵入り

次に「広げるなら粘土皿の中心から外側だ!!」と言わんばかりに両手をせわしなく動かす

「もう、訳が分からなくなってるな……」

続いて皿の外側を押さえようと掴んでみるが思ったよりも回転力が強く

金南く齋の両手が巻き込まれ小さく一回転

「カゝカカ!! バカか、お主が回るなら、ろくろ止めよ!!」

結局、皿は不自然に湾曲しました(陶芸家の先生に助けてもらい)

続きましてちょっとした小物作り



溟瀛が余った粘土でしきりに燐靜の顔を見ながら何かを作っていく

溟樂齋作

「燐靜（顔）」

そこには、貞子のような髪を付けた燐靜の首がゴロリと……  
激似（根暗な部分）

「……………作るなら胴体も作れ……………」

作る

溟樂齋が再び粘土で達磨に手足を生やした身体を作っていく

「……………随分短時間で……………私の身体を作るね……………」

「カカカ……………ホレ！！」

その達磨の胴体に燐靜の身体を無造作にくっ付け完成

「……………クソ……………似てる」

燐靜人形に身体はともかく顔は、そっくりであった

次に大皿を作成

大皿

心強く齋先生に手伝ってもらい

溟樂齋が無言で作業を進めていく

「こんなに静かでいいのか？」

「……………バカみたいにながら年中しゃべってる訳じゃないから……………」

シラガミと隣静とのやり取りであった

真剣に作業を進めた結果……かなりの大作に上がったが

「じゃあー、ここに大きな渦巻きの柄を入れるとするかのう♪」

とおもむろに皿の中に指を入れて渦巻き模様を皿に刻みこんでいく

「ああ……食いずらそう」

「洗いずれんだよな……」

と口々と皿に文句を言う二人

まあ、一応完成ということだ

そこでシラガミが

「この作品のタイトルは、何ですか？」

命名

「うゝむ……世紀末!!」

大革命!!

恋愛大皿(?)」

命名

世紀末大革命恋愛大皿

「へっ!!?」

あまりにも唐突なタイトル……

ちなみに最後に付けた渦巻きは「無限」を表しているそうです。

次回、皿が完成！！  
いよいよ料理に入れるのか？

**混在（1）、唸り（前書き）**

遅くなりました！！

ただいま自動車の免許を取得を目指して練習しています！！

ギアチェンジが上手く出来ない（泣）

## 混在（1）、唸り

さて……月南へのインストールを始めるとするか……

辺りが静寂に包まれる中で月南の次元に存在するシラガミは、脳内で巫女姿の女性へと変わり坐禪を組んでいた

「やっぱり……インストールの時間を早めた方がいいからIQ値を高めなければ……」

オレは、イメージで月南の脳内を包括するかのような大きな大きな手を造り出した

無論……シラガミの両手は坐禪特有の手の位置に置いている

人の身体は太陽がないと生存も存在することも出来ないであろう……しかし、全てを支配する脳は、常に闇の中で思考を余儀なくされている

誰が言った訳でも見つけた訳でもない……古の民は「脳」という存在を意識させられている

身体は、光を欲するが脳は決して闇から出てこない

そういえば……かなり昔に頭蓋骨に穴を開ければ脳の思考の渦から解放されて素晴らしい感覚を得られると言ってる研究者がいたな……

バカにも程がある……現在の人間の形を変えることは、道徳的にも簡単ではない

おっと……自分の考えに囚われてはいけけないな……やるべきことをせねば

I Q……脳の処理能力を客観的に数値化した物

これが高いからと言って歴史上に名を残す天才になるとは限らない

シラガミは、ゆっくりとヨガの呼吸法の一つである「腹式呼吸」をすることで身体全体の筋力を極限まで緩める

いわゆる「リラックス」の状態に身体を持っていく

続いて「集中状態」コンセントレーションにするため瞼を閉じ、自分の額に意識を持っていき「超並列頭脳」に思考を変える

超並列頭脳……いわゆる無意識で情報を一度に、大量に処理する頭脳  
私達が生きているのもこれのおかげである

例を挙げると……本を読むのに夢中になっているときに呼吸を忘れていることがないのと同じ

オレの後ろで先程造り出した巨大な手を果てしない闇に向かって伸ばしていく

ガシッ!!

幻影の手は、月南の脳内に深く入りこんだようだ

シラガミは、坐禅から手を前で重ねるように差出し第二段階に移行しようとする

「!?!?!」

脳内に伸ばした幻影の手に違和感が出現し、引っ込めようとするが……何者かがそれを阻止するかのようにピクリとも動かない

違和感は、シラガミの身体にも発生し慌て閉じた目を開けると……

シラガミの身体に無数のワイヤーのような糸ががんじがらめに巻き付いていた

「!!これは？」

するとシラガミの真っ正面に蛸のぬいぐるみがフワリフワリと宙を漂っている

それは、シラガミの視線に気が付くとクルリと顔をこちらに向け、ニタァ〜!!と不気味な笑みと奇声を発した

「ケツケケケ!! インストールはさせないぜ〜……代償を逃れし霊<sup>ひ</sup>所<sup>と</sup>よ♪

暫く平和を貪りな!! 身体がある内によ!!」

そのぬいぐるみは、シラガミを間の街道から追い出した張本人のツインテールの少女が抱えていた代物であった

「クッ!!! お前らは一体何者だ! 目的はなんだ!?!」

がんじがらめにされながらもそのぬいぐるみに食らいつくシラガミ蛸のぬいぐるみは、暫く黙った後にポツリポツリと言葉をつないでいった

「…………君達は僕を知らない…………けどね…僕は君のことをよく知っているんだよ」

明らかにさつき聴いた声のトーンではなく、前に会ったツインテールの少女の声であった

「ケツケケケ！！さあ、戻りナ！！自分の元の身体によろ♪」

シラガミの目の前に不可解な文字列の石版が並びだし、辺りの空間を占拠していった

シラガミの種族であるハイパーボリア人に造詣が深くなければ出来ない芸当が次々と展開されていく

インストール封じ……

まさか…………オレ以外にも生き残りが…………

深遠なる闇の雫石とシラガミは、絵の具で掻き混ぜられたかのように身体がグニヤリと曲がりだす

フフ…………面白れ…………

あの小娘にここまでやられるとはな…………

オレをなめるなよ…………必ず正体を掴んでやる…………

暗黒の闇にシラガミは、溶けるように消えていった

\*\*\*\*\*



ツインテールの少女の世界

「これでいい……僕の目的のためにもシラガミは、弱体化して貰った方が都合がいいからね……」

シラガミの本当の力は、僕を遥かに超えるからね…

まだまだ、僕がその力を手に入れるには時間が足りない

準備がいる……

星空が夜空を照らす中

川のせせらぎの縁でツインテールの少女が川に足を付け、バシヤバシヤッ！！と水飛沫をあげていた

「計画は順調ですね……ゆゆゆ様……」

バシヤバシヤッ！！と相変わらずに水飛沫をあげるツインテールの少女の後ろに細身で両目にバンダナを巻いた青年がやってきた

恐らく盲目であろうか……？

ツインテールの少女の服装は、高貴な貴族が着るような華やかな服であるが盲目の青年の服装は、Tシャツに青々としたジーンズを身に付けている

「おお！！久しぶりだな。」「IO IO（盲目青年の名前らしいがはつきりと聞き取れない）……あれは、手に入れたか？」

ツインテールの少女がそう訊くと盲目の青年は、ジーンズのポケットから銀色の鍵を取り出す

「ご注文通り、「銀の鍵」を手に入れましたよ……持っていた「妖術師 エドモンド」は、かなり強かったです……ちゃんと記入しておきましたから」

「ご苦労だった……（銀の鍵を受けとりながら）これで僕達は「あちらの世界」に侵入出来るようになったね……」

「ただ……まだ侵入はしないよ……いくらシラガミが弱体化しているとはいえ、真っ正面からぶつかるのはゴメンだからね」

「あと二つの禁断道具を集め……そしてその後……コイツに動いて貰う……」

ツインテールの少女は、手のひらから稜角反射をする結晶を出し、宙に浮かせていた

それは見方によっては万華鏡にも見える代物であった  
少女は、闇の旋律を引き始める

声もなく……ただ音だけが周囲に吸収されていった

\*\*\*\*\*

午前8時30分

白邏高校 116教室

教室内では、どこで知り得たのか分からないが編入生が入ってくる噂でいっぱいであった

「マジかよー！この高校に編入してくるなんてすげーなー！」

「なんでも……その編入生は全教科満点らしい」

という噂を始め

「編入してくる子って「ボリア一族」かもだって!! やばッ、玉の興じゃん!!」

「男の子? 女の子?」

「男の子らしいよ」

ボリア一族の特徴は、シルクのように滑らかな金色の髪を有しており、月南も金色の髪をしている

一方の月南は……

まだ着慣れていない高校の制服を身に付け、担任である海塚先生と廊下を歩いていた

「いやゝ!! 驚いたね!! まさか満点を取っちゃうなんてな!!」

「あ、ありがとうございます……」

若干緊張気味の月南

「しかし……見れば見る程あのボリア一族に似てるな……うゝん……でも校長は「そんな奴は、知らん!!」って言ってるし……」

一人で悩む担任をよそに月南は、伝統ある古ぼけた校舎の廊下をキョロキョロと見ながら移動していった

「皆さんと馴染めるでしょうか……私……」

まだ本格的な夏が到来する前の雨季であった

\*\*\*\*\*

白邏高校屋上へ

ツンツンとした黒い髪にスポーツ選手のような身体をした男性が仰向けに横になっている

危険防止用のフェンスを頭の上に置いてある状況だ

逞しい顔には、生傷が大きく刻みこまれており百戦錬磨の様子さえ感じられる

その男の側には、フェンスに寄りかかるようにして校庭を見ている女子生徒がおもむろに口を開く

「なんか、あなたのクラスに編入生が来たらしいね」  
囁んでいた風船ガムが膨らみ、ある程度大きくなった所で割れた

「……………」

男子生徒は、まるで聞こえていないかのように反応がない

クチャクチャ……「噂じゃあ編入試験で満点を取ったらいよ……それに、金色の髪をして蒼い瞳をした奴だって……まるであなたの一族みたいね……」

女子生徒の言葉でピクツと反応して目を開ける男

蒼い瞳だ……

ボリア一族の大きな特徴である深い海色の瞳をした男がゆっくりと上半身を起き上がる

「へえー……俺の一族と同じ特徴か……なら挨拶しておかねーとな」  
男の顔がみるみる変化し、狡猾そうな狐の姿に変容した……まるで獲物を狩るかのようにニタァ……と耳まで裂けた口を尖らせる

「また、狐の顔になってるよ!」

「クククッ……悪い悪い……じゃあ、新入りを見に行くとするかな……ボリア一族の真似をする権利があるかを査定しにな……」

口元の狐は、引っ込んだが九本の黒い尻尾がまがましいオーラを出しながら、うねりを続けていた

## 混在（1）、唸り（後書き）

オマケ シェフ溟邏スペシャル

皿の製造をして二週間後

今回もシラガミの司会から日程は、始まる

「それでは、紹介します……シェフ溟邏さんです」

「どうもじゃ」

自ら土地を開墾し、皿を作る料理人 「シェフ溟邏」

「おはようございます」

溟邏に軽く一礼をするシラガミ

「長過ぎじゃろ……この料理番組……これを見ろ」

スツとポケットからビニール袋に包まれたパイ生地を見せ付ける（シェフご自慢の……因みに3つめ）

「これが3つめなんじゃ……お主謝っておけよ……わらわの知り合いのパイ生地職人に………なんでこういう事態になったのかを考えておけよ……！」

隣静ディレクターの言い分

「よく話を聞かないから……」

「なんじゃと……ヤル気か……！」

取り敢えず本日の予定に……

「今日は、いいんじゃないだろうな!? 料理作っても?」

「それは、どうぞ…」

本日いよいよ料理

さらに、もう一人ゲストの紹介

「それでは、ゲストの紹介をしたいと思います…一緒に土地を開墾し、皿を作った…「月南さん」です」

土地を提供し、共に開墾し共に皿を作ったゲスト  
月南さん

「どうも、オマケだと若干影がうす「それでは、二週間前に制作した皿の具合を見てみましょう」

オマケだとそんなに喋らせて貰えない月南

珍しく喋ってもほぼカットらしいです

「くうー………」

さていよいよ、焼いた備前焼を見ることに

「おお！しっかり出来たか？それが出来てないと料理の盛り付けが出来んからのう」

作品公開

「では、陶芸家「溟楽斎」の愛弟子である「白斎（シラガミ）の呼び

名）から見てみましょう」

白斎作

目の前に用意された簡易テーブルに被せられた布を少し捲り白斎の作品を皆で見る

「おおー！！良いんじゃないか！！……てか凄いなお主！！」

そこには、プロの陶芸家が作ったかのような立派な備前焼があった  
空気が少しでも入っていればヒビが入り、最悪割れてしまうのに、  
ヒビすら入っていないという快挙

予想以上の出来栄え

溟楽斎先生が弟子の白斎の作品を取り批評をする

皿全体を暫く眺めると

「なんじゃ、こんなもん！！」と大きく振りかぶり白斎の備前焼を  
コンクリートに叩きつけようとするが……

バキッ！！溟楽斎先生が跳ねとばされる

そして落ちる寸前の備前焼を白斎がキャッチ

「おま！！お主、本気で蹴ったじゃろ！！みぞおち鳩尾に！！」

「お前がオレのナタリー（皿の名前らしい）をコンクリートに叩き  
つけようとするからだろ！！まったく……」



気を取り直して

金南く齋作

また少し、テーブルにかかっている布を取っていき金南く齋の作品を白日の元に

やはり、少し不器用な月南の備前焼に溟楽齋先生からの厳しい評価

「うゝむ……白齋の方を例えば、弥生時代とすると明らかに、こつち（月南の作品）は縄文時代じゃな……」

「つまり、原始的な……」

溟瀧は、月南の作品を手にとり

「これは、「こんなもん!!」って割っても良いんじゃないか？」

「止めて下さいよ!! 頑張って作ったんですから……私は、早く家に持って帰って飾りたいですから……」

続いて溟楽齋先生作

「どうじゃー!!」

「なかなか良いじゃねーか……」

溟楽齋の作品の裏には、「溟楽齋」という文字が刻まれている

「おお…溟楽齋と……」

その傍らに小さい物体が

「これは、少し遊んでみたのじゃが……なかなかのデキじゃろ!？」

燐靜の備前焼

焼いても激似じゃ！！

顔は、燐靜に激似であるが制作時間6秒の身体は、ずんぐりむっくり

上手に焼きましたー！！

（全体的に）

いよいよ、農園に野菜を収穫しに行きます

続く

## 混在（2）、風景（前書き）

遅くなりました……

報告

仮免許合格しました

ただいま、路上でビクビクしながら運転してます

明後日、卒検です（目指せ一発合格！！）

## 混在（2）、風景

「ちっ！！上手くないかないもんだな…」

巫女姿のシラガミは、月南の中で呟く

その身体は、関節やら骨格がおかしい程変化しており左手が右の脇腹から生えているような状態だ

これで死んでいたらただの肉塊とみなされてもしょうがないといった感じである

先程の謎の蛸のぬいぐるみの能力により身体がドロリと溶けてしまったため普通の人間の身体に戻るのが大変そうである

ゴキッ バキバキバキッ

シラガミは、身体を不気味なうねりと共に四方八方に伸び縮みをする

肩の骨は、肩に

あばら骨は、あばらに

自分の身体の中で行方不明となった骨を探しあて、正規の場所に戻す作業をしていく

「かぁー！！メンドイ！！」

ようやく上半身が復活した所で不機嫌そうにシラガミが言い放つ

足の方は意志を持っているかのように収縮したり膨張を続けている

「それにしても…あの女…何処かであった記憶があるんだよね…」

忌々しい記憶が…」

シラガミの目が一層険しくなり同時に脳裏に恐ろしかった狂気の笑い声が飴をする

（ギャハハハハハ♪全員死んじまえ!!）

四肢が切断されそうな程の激痛が襲う……無論、今のシラガミは痛  
点など存在していないので幻痛である

「つう!!!」

記憶を呼び戻しただけでこれ程の衝撃があるとは…

（大丈夫だ……アイツは俺が確実に殺した…問題は無い）

シラガミは、自分に言い聞かせるように言う

記憶に無用ながらも居座り続ける信号を払拭するように……

アイツはいない……

俺が確実に殺した……

そうこうしてる間に自身の身体は、完全復活しその場で腕を組む

いつにも増して真剣な表情だ

（……ダメだな…女の姿じゃあ、本来の能力が出せん……さて、  
どうしたらいいか？」

月南へのインストールもできないし……

間の街道に行く道も断たれているし……

完全なる八方塞がりであった

そこで、シラガミが出した結論は……

「寝るか……」

無論、シラガミは不死の一族、インストールの状態でも眠ることは、  
まずない

それに、我々のよく知る「睡眠」とシラガミの元の種族であるハイ  
パーボリア人の「睡眠」とは、若干意味合いが変わってくる

前者は、身体の機能の回復と新たな記憶の整理をする動作であるが  
後者ののは、不死であるためその必要はなく、単に自分の見聞を広げ  
るために精神だけで旅に出るということだ

前回の間の街道は、精神の旅の時の中間地点と同等の扱い

しかし、シラガミは「睡眠」を前者の意味で使った……これは、ツ  
インテールの謎の少女が扉を封じたため「精神の旅」が出来なくな  
っているためである

（たまには、自己と見つめるのも芳しいか……）

昔は、自分の精神の訓練のために何度か睡眠を取ったが、最近は忙  
しさに駆られてやっていなかった

シラガミは、両手を頭の後ろに回しその場で大きく寝転ぶ

（こうなってくると……師匠に逢いたくなるな……今何してんだろ……？）

大きな欠伸<sup>あくび</sup>をしてうつすらその衝動によって出てきた涙がスーッと頬を伝う

ゆうに600年ぶりの睡眠であった

\*\*\*\*\*

白邏高校 1年6組（月南の入る教室）

「宜しく願います!!」

月南がクラス全員に向け自己紹介をしている

顔が真っ赤なのは、緊張によるもの

「えーとッ!! 今日からこのクラスの仲間になる「真槌月南」だ!!  
仲良くするんだぞ」  
担任からの熱い激励

「「オォー!! こちらこそ」」

「かわいい!! 顔真っ赤っ赤!!」

金髪でどちらかと言えば女の子に近い編入生

さらに、天下のボリア一族かもしれない子と満点合格という才色兼備ぶりを発揮されれば興奮しない生徒はいないだろう

~~~~~

朝の紹介も終わり

一人席について授業の支度をする月南の元に一人の女性が近く

「編入生の月南はんか？」

うちは、このクラスの委員長をやつとる「入浜<sup>いりはまさつき</sup>皐月」と申す者どす。  
取り敢えずよろしゅう♪」

穏やかな笑みと変わった口調の子であった

後で聞いた話だが、皐月は代々商人をしている家系だそうだ

「月南はんは、まだこの学校についてよう知らんのだろ？……そこ  
でうちが案内したるで！！」

任せてと言わんばかりにポオンと胸元を叩き得意気だ  
そんなことを言われれば人の良い月南は、断ることはできるはずも  
なく

「は、はい！！宜しく願います……」

「ハハッ！！真面目やな〜！！まあ、楽にいこうか♪」

着物が似合いそうな長い髪を持ち、笑顔が似合う女性だ

教室でそのような会話をしている時に廊下では、月南に鋭い目つき  
で睨む髪の黒い青年がいることに二人は、まだ気付かない

\*\*\*\*\*

異質な空間



我々のいる地球を基点として火星、木星、土星等が流星のように自分の後ろに消えていく景色が目の前に表れている

「!?!、これは?」

巫女姿のシラガミが自分の背中側に消えていく星々を見回しながら言う

そして、視界は太陽系から銀河系へと変わり、大きな渦巻きが全体に広がっている

神々しいまでのバルジ（銀河の中心）が段々と小さくなっていき、暗黒の空間に包まれていった

「懐かしいな♪天文学か…兄貴と一緒に調べてたっけ…」

幼い時に両親が発狂してしまい独りになった

その時に自立して街で魔術師として成功していた実の兄であるエイボンがオレを引き取り育てくれた記憶が蘇る

楽しかった思い出……

その頃だけだったな……良かったのは……

当時のハイパーボリア人には、不死と引き換えに恐ろしい制約が架けられていたからだ

女シラガミは、華奢な身体を震わせて怯えたポーズをとる

自分が自分じゃ…無くなる

その感覚は、自身も体験済みであった…圧倒的な闇に飲み込まれて

いく感覚

目の前の光景と同じように…

すると、シラガミの眼前に凄まじい輝きを放つ星が出現した

かなりの高温らしく青白い光を漆黒の闇を写しだしている

その青白い光がしだいに真っ直ぐ進めなくなり次第にジグザグとした軌跡を取りだした

そして、四方八方に散らばって輝いていた星がシラガミ目がけて一斉に移動を開始する

ジグザグの光がシラガミの目の前で一点に結ばれ空間自体が収縮するようにグニヤリと動き始めた

その光景は、神秘的であった……そしていつしか青白い光は真っ赤になり空間が焰と一体化していく

三次元がたった一点……つまり一次元へと情報を押し込まれていくような感じである

そう……宇宙の始まるであるビッグバンを逆再生で見ていると思われるモノが起きている

シラガミは、唐突にある数字が頭を掠めた

10の一49乗……

現在のトップレベルの科学力とシラガミの頭脳を持っても解明出来ない時間である

宇宙のことを突き詰めていくと必ずぶつかる最難関の問題であり宇宙物理学者が日夜研究をしているが未だに解明の片鱗すら見せないあまりに短い時間：

あまりに高すぎる壁……

この研究をした学者は、口を揃えてこういった

「神がこの世界を創りあげた……真理が介入した……」  
人間の理解を超えた存在を提唱したのだ……

有名なノーベル賞を受賞した「湯川秀樹博士」も神と呼ばれる存在を認める言動をしたことでも話題になった程だ

一秒にも満たない瞬間に宇宙という無限に近い物質を創り出した存在……

シラガミは、これ以上の興奮がないかのように逆再生を見続ける

真理が見えるかもしれない……

\*\*\*\*\*

「ほんでな、ここが体育館や！！秋のスポーツ祭りではかなり盛り上がる所やで」

放課後に月南は、皐月との約束通りに校内を案内して貰っていた

やはり中々広い

「うーん……これで全部やな……まあ、後は生活していけばわかることやから」

「ありがとうございます!! 私のために時間を取らせてしまってますいません」

「ええて、一緒に学園生活する仲間やないか、水臭いこというな!!……さてと」

ガサゴソと鞆から何かを取りだし月南の前にグイッと差し出す

???

出されたのは、緑色をしたオキナワ県の守り神「シーサー」  
頭をポンツと叩くとバネが飛ぶ仕組み

「……………(汗)」

「これなあ、うちの店で今月から売り出す品なんやけど!!  
一体どうや? 安くしておくで」

「あ、あの私は…」

「そやな……見積りは…」

舌をチョロっと出して何やら算盤で計算を始める臯月  
体育館の前で「緑シーサー」の取引をしているため部活の生徒やら  
帰宅するために歩みを進める生徒達が次々と視線が交わる

するとそこへ、陸上の練習用具を取りに来た奏と剣道着を着た燐靜  
が取引を見てため息を吐く

「また、皐月の病気が始まったわね…あたしの時なんか「マッチョ  
兎人形」<sup>うさぎ</sup>を勧められたわ」

「私は「眼球スーパーボール（充血バージョン）」……」

「随分グロテスクな物を!!」

「よく跳ねる…暇潰しに最適…」

「買ったんかい!!」

「期間限定だったから…（眠っている父親の枕元に置いたら翌朝大  
パニックになったらしい）」

親指を立てて何故か誇らしげな顔をする燐燐

別に偉くないねーよ!!

一方の月南は……

「あの…私は」

「見積りは…700円でどうや!!……期間限定やで」

弾き出された数字を指し示す算盤をゆっくりと前に出すが何か思い  
ついたように自分の方に向けてパチパチと珠を弾く

「そやな…月南は初回やし会員になって貰うやから……よし!!これやな」

勝手に話を進めて会員にさせるつもりらしい

\*\*\*\*\*

下校途中

なんだかんだで買わされてしまった……

緑色のシーサーの頭を押し首をビヨンビヨンさせて現物を眺める

なんで緑なんだろう？

怪訝そうに怪しさ満点の置物に早くも嫌気が差し、倉庫入りが確定したと考えて鞆にしまう

そして、「明日は部活を紹介したるで」という口実の押し売りが待っているのだ

都会ってこんな感じなのかな……でも悪い人じゃないと思う……

ドカツ!!

曲がり角を曲がった所で何者かに押し倒された

!!?

月南は、一瞬何が起こったのかわからなかった

不意に地面に叩きつけられ慌て顔を倒れた方向とは、反対向きに向

ける

「髪の色：眼の色：間違いないようです！！ボリア一族の模倣をしているガキですね「コクシキ・ボリア様」」

つばの付いた帽子を深くかぶった青年が月南の髪を掴んで顔を持ち上げる

「な、何をするのですか！！は、放して下さい」

月南の身体は、屈強な男二人にがちり拘束されており身動きがとれない

すると二、三十人の群集の中から髪が黒い青年とガムを噛んでいる女性が月南へと近づいてきた

「俺は、高貴なる一族の1人だ！！てめーのようなクソガキが簡単に真似していい者じゃないんだよ」

鋭い獣のような目付きで月南を睨みつけると左手を挙げて後ろの群集に合図した

皆、手に持っているのは「金属バット、レンガ、角材等」の鈍器

「待ってください！！私はボリア一族の真似なんか…」  
バキッ！！

無防備な月南の顔面にコクシキの拳が飛んだ

「軽々しく俺の一族の名前を言うな偽物め！！  
…良いことを教えてやるぜ……ボリア一族のもう一つの大きな特徴

をなあ!! やれ」

一斉に後ろでスタンバイしていた群集が拘束されている月南目がけて殴りかかった

金属バットが月南の頭に何度もぶつかり、堅い物と堅い物がぶつかる嫌な音が響く

「ガハッ!! わた……バキッ」

「もう一つの特徴は……常人ではありえない身体の強靱さだ!! 本物だと認めて欲しいなら一晩耐えてみな」

休みなく続く暴力に次第に月南の意識が消えそうになっていく

綺麗な顔だちが血に染まり金色の髪もドス黒い血が面積を広げていく

どうなっちゃうんだろ？

私……

月南の意識が途切れ、ピクリとも動かなくなった

しかし…コクシキ達はやってはいけないことをしてしまった

月南が意識を失い

その後に出てくる存在を知らなかったからだ

出てくるのは……世界最強の存在

「案外簡単に潰れましたね」

「偽物は、にせも……!!!!?」



ゴキツバキツ!!

月南の男の腕が華奢になり胸が膨らみ、全体的に丸みが増していった

金色の短い髪は、長くしなやかになり、その場に立ち始める

先程まで負傷していたはずの傷は消え、不機嫌そうにする可憐な美少女がそこで腰元に手を置く

「ちっ!! やっぱ上手いかねーな……あと少しで真理が見えたかもしれないのに……」

大きなため息を吐く

「よくも月南<sup>オレ</sup>を痛めつけたな……これで死んだら「インストール」が水の泡になっちまう所だろうが!!……オレが相手をしてやる!! かってこい」

## 混在(2)、風景(後書き)

オマケ シェフ溟邏……

溟「ちよつと待った!! 何でこんなに更新が大幅に遅れたのじゃ!」

シラ「作者の都合らしい…マニュアル車の運転免許取得のために毎日通っているらしいから執筆が遅れたと言ってる……」

隣「そんなことより…オマケ始まつてる……本編とは設定がごちゃごちゃになってるから……直す」

シラ「そうだな……月南とオレが同じ身体だから……待て!! 本編だとオレ「女」になってるぞ!! ……どうすんだ?」

溟「別に困ることではないじゃろ!! ……よし、今からお主は、女じゃ (半ば強引に)」

シラ「……まあ、いっか…」

では、オマケ シェフ溟邏スペシャル

### 怒涛の料理人

お詫び

本編よりも先にオマケに登場してしまう新キャラが出てしまうことをお詫びします

因みに、新キャラ「飯嶋柑」いいじまかん

性別 女料理に命を懸ける情熱家

今回、溟邏の料理場所の提供とサポートをします

\*\*\*\*\*

世界一長い料理番組

総日数 69日

いよいよ、料理を調理

農園へ

丹精こめて作った野菜を収穫へ

シラガミ(女)とシェフの格好をした溟邏  
プロデューサーの燐静が畑に侵入する

「いよいよ収穫じゃな!! もう、ないじゃろ「今度は、箸を作る」  
とか?」

「もうない……箸作りは地味だろ……」

まずは、トマト

「赤いのがない……」

「ゲッ!! 本当だ……」

立派に青く成長したトマトを軽く手に取りながら溟邏が言う(ついでにシラガミも)

「大丈夫……」

「大丈夫じゃないじゃろ!! 絶対酸っぱいぞ!!」

カボチャ

「カボチャは、大丈夫そうだな……ホレ」

「おお♪結構な大きさじゃ!!それに数もある」

カボチャ豊作

「あ!!茄子が三本!!」

「なんじゃと!!（籠に入れたカボチャを下ろすのを中断して）」

茄子も豊作

「期待してなかったが…農園は、結構いけるぞ!!ほらピーマンも」

シラガミがピーマンの葉っぱを退けて立派に大きくなったピーマンを溟邐に見せる

「おお!!テンション上がってきたぞ!!」

さらに

「激辛唐辛子もいけてるぞ!!」

激辛唐辛子豊作

ブロッコリー

?

「これは、なんじゃ？」

「おそらく……ブロッコリーの部類に入るモノだろうな」

小指サイズのブロッコリーを手に取りながら疑問の声をあげる

「……ちっさ…」

ブロッコリー……不作

ニンジン

「いよいよ、キャロットの収穫じゃー！どうかな？」

溟灘が地面に刺さったニンジンを一っこめ

出てきたのは……根元に申し訳程度に赤みがかかったニンジン  
食卓には、絶対に並ばない

「フッ……フフ（苦笑）」

小っちえー

「これは……どんな料理を作れば良いのじゃ」

ジャガイモ

続いてジャガイモの収穫  
力を込めて一気に地上へと掘り出す

「あっ！！」

「おっ!!」

「結構……大量」

ジャガイモ豊作

「良いんじゃねーか!! 溟羅」

「これは、良いジャガイモじゃ!!」

自慢気にジャガイモを手に取り語るシェフ

きゅうり

足元に転がる大きめのきゅうりを手に取るシェフ

「お!! でっかいでっかい!! シラガミ凄いぞ」

「でっかいにも程があるぞ」

「確かに……象牙と言われれば象牙に見えなくもないな」

白く塗ればの話

大豊作!!!

籠に入れた野菜を広げて豊作の報告をする溟羅とシラガミ

予想以上の出来に驚くがこの後の溟羅の疑問で一氣に大搜索が始まる

「あれ?……ブロッコリーどこに行ったのじゃ?」

先程、収穫した小指ブロッコリーが見当たらない

「収穫したはずだぞ……何処だ？」

二人で一斉に野菜の山で遭難したブロッコリーを搜索開始

豊作だったカボチャをひっくり返したりピーマンとトマトの間の隙間に手を入れる

「あった！！ジャガイモの岸壁地帯で保護！！」

搜索時間      5分

「さていよいよ、わらわの料理の腕を振るう時がやってきたようじやな」

「よし……柑の家の調理室へ移動を開始する……」

今回、使わせて頂く特設ステージは、親がレストランの調理師で働いている「飯嶋柑（本編で月南の同級生）」さんのキッチンをお借りします

### 混在（3）、華麗なる女祖父（前書き）

最近地味に後悔していること

勢いで付けた主人公の名前「シラガミ」

「ワンピース」の「白ひげ」とイントネーションが似ていて言いま  
つがいをしてしまうこと

少し前の「ワンピース」を見てガチで「シラガミカッコいい（白ひ  
げのことです）」と言ってしまった……

地震の能力は、使えないけど「シラガミ」の能力も世界を滅ぼす位  
の能力を持っていますので（本編では、まだ未発表）



### 混在(3)、華麗なる女祖父

なんだ……これは？

目の前で弱気になっていた金髪の男が女性の姿に変わり俺達を睨み付けている

男から女へ

普通の常識では考えられない現象が忽然と行われていた

しかも……ボリア一族の俺じゃないと解らない程に実力を隠してやがる

まさか……本物か？

いや、あり得ない

一族の系図は、ある程度把握しているが「こんな女」はいなかったはずだ

否、一人だけ顔を知らないボリア一族がいる

ボリア一族創設者であり俺の曾祖父に値する伝説の人物

史上最凶の犯罪者からこの世界を守った男

エイボン・ボリアだ

しかし、目の前の人物は女性だ

それに、年齢は十代後半の容姿であり、とてもではないが…あてはまらない

「なんだてめー!!!ぶっ殺すぞ!!!」

俺の部下が無用心にその女に近づき持っていた木刀で殴りかかる

「ま、まて!」

コクシキは、注意を呼び掛けたが間に合わなかった

一斉に金髪の女性に殴り掛かったコンマ数秒

女は、左手の軽く横に振るとパンッ!!という破裂音と共に部下が吹っ飛ぶ

一人は、道の真ん中に

また、ある者は塀に激突したが気絶はせずにうめき声が聴こえている

コクシキは考えた

部下がいとも容易に飛ばされたことではない

一瞬だけであつたが:

左手を振る瞬間に殺気を感じることができた

畏れ……真っ先に形容すべき言葉がそれであつた

黒い髑髏のような形のオーラがケラケラッと笑っており額には、幾何学的にあり得ない形の眼がコクシキを見据えている

そんなイメージである

敵は、桁違いの戦闘力を持っている

どうする…

「さて…見た所、お前が頭みたいだな…何が目的だ？オレの身体をこんなに痛めつけて」

凜とした声が辺りの沈黙を加速させていく

氷のように冷たい声だった

まさか…こんなことになるなんて…

コクシキは、九本の黒い尾を辺りに広げまがましい妖気を放ちながら黒い狐へと姿を変える

「！！コク、それはダメ！！」

コクシキの側にいたガムを噛む女性が止めようとするが狐の鋭い牙がシラガミの喉元に食らい付く

しかし、その牙はシラガミに届かなかった…間一髪片手で受け止めたのだ

狐の下顎が固定されている状況なのでコクシキは、これ以上踏み込めないでいた

ググッ！！とシラガミが片手に力を入れて強靱な牙を遠ざけ

「九尾の暗狐か……溟羅以外にいないと思ったが……正当防衛だ。少し手荒にいくぜ」

するとシラガミは、コンクリートで出来た道路にコクシキを叩き付けた

「グアアッ!!」

「コク!!」

「ダメです!!天海さん!!近づくといけないです……それに、ボリア一族が力で負けるなんて……大丈夫ですか!!?コクシキさん」  
コンクリートの道路に抑え付けられているコクシキが九本の尾をうねらせてシラガミ(女)にぶつけようとする

「!!」

一瞬の虚無を突かれてコクシキから手を離してしまったシラガミ

コクシキは、再び立ち上がり動物特有の威嚇で牙を見せる

(九尾の暗狐か…真っ正面からぶつかるとはな…早めに決着を付けないと…「髑」<sup>どく</sup>を使うか)

シラガミは、深呼吸をして全身に力を込める…するとシラガミの身体から黒い冷気が溢れだし

シラガミの得意とする必殺技が――

出なかった……

??

首を傾げるシラガミ

拍子抜けのコクシキ達

「あれ？何で出ねーんだ……あっ！！！！……オレ、今女じゃん！！  
出せるわけねー……！！！！」

シラガミに生じた隙をコクシキは、見逃さずに飛び掛かり大口を開  
けてエネルギーを溜める

バキッ！！

シラガミが半身を翻ってコクシキの脇腹に強烈なキックを打ち付ける  
骨が折れるような嫌な音が響き

シラガミが「しまった！！」と言わんばかり舌を出す

「おま、急に仕掛けて来るなよ！！完璧に本気の力でやっちゃった  
じゃねーか！！」

「グアアアアアア！！」

コクシキがその場でのた打ち回り、狐の口から赤い血液を吐き出した

「嘘だろ！！コクシキさんが……」

「やられちゃった……」

シラガミは、大袈裟に大きなため息を吐いて「肋骨が肺に刺さって  
るな」と言った

シラガミは、コクシキの狐の胴体に近づき回復の魔術を使ってダメ  
ージを癒す

ある程度治療が済んだ所でコクシキが治療を続けている女に向けて  
「アンタは…何者だ？こんなことが出来るのは、ボリア一族だけだ」

「……そのボリア一族というのがオレには、よくわからんが……魔術の専門家だからな…」

すると、シラガミの肩に一羽の雀がとまり、チュンと鳴いた

傍から見れば羽を休めにきたのだろうと思うが雀の鳴き声をシラガミは、解読できるらしく

「……ゲッ！！本当かよ！？」

シラガミが雀の方を見るとバサバサツと飛び去ってしまった

コクシキの部下達も事の成り行きを見守っており暫しの沈黙

(……いや、ばかな…でも「ジズ」の情報なら信憑性はあるが……)

雀が持ってきた情報は、とんでもない内容であった

「目の前の男は、貴女様の曾孫ですよ（鳥語翻訳）」

マジかよ！！……もし、本当だったら…道ばたで初対面したひいじいさんが曾孫をぶっ飛ばしたみたいになるじゃん

しかも……今「女」だし

まてまて！！

まずは、これを確かめてから……

シラガミは、疑問の顔をしているコクシキにこんな質問をした

「おい……お前の祖父の名前はなんだ？」

「??:…俺の祖父は、ボリア一族の長で総大将の「ヴルム・ボリア」だが…」

顔が真っ青になるのを感じた……やっちゃったよ!!

コクシキを背にして激しく落ち込むシラガミ

(……オレの息子だ…そうか…ハイパーボリアから取って「ボリア一族」としたのか…)

\*\*\*\*\*

ボリア一族邸

「今回は、エイボン様の実の息子でボリア一族の長であり内閣総理大臣の「ヴルム様」に話を伺ってみたいと思います」

ニュースキャスターのような格好をした女性が髭を立派に生やした若々しい老人にインタビュースするようだ

「こんにちは、ヴルム様!!」

「うむ、あまり緊張せんじやろう!!」

「いえ、伝説の英雄の御子息であるヴルム様にお会い出来ることは、最も光栄なことであると考えておりますので」

「父上は、実に聡明な方であつた……儂らが道を踏み外しそうになった時は、いつも助けて頂きましたから。残念ながら写真が一枚も残っておらず国民の皆さんには、大変申し訳ない」

「いえいえ、そんなことは……でも想像するとヴルム様と同じように容姿は、素晴らしいと思います」

「フフッ……ありがとう……他に訊きたいことは、あるかな？」

「えっと……」

女性は、ポケットからメモ用紙を取り出して確認をすると再び質問をする

「最近、反ボリア勢力の犯行と思われるテロ行為が世界各地で起きておりますがヴルム様は、どうお考えでしょうか？」

「彼らについても根気強く話し合いをすれば分かりあえると考えておる……同じ人間ですから……」

「そうですか……彼らと分かり合える日がくることを願っています……以上、ボリア邸から暗崎がお送りしました」

~~~~~

インタビューを終えた老人のヴルムは、自室にこもり今度使う中央会議についての資料に目を通していた

……凶報……！アスリカのセンタービルに自爆テロ……！

犯行は、世界最凶の犯罪者「シラガミ」の残党か？

原爆開発の当時者「シラガミ」は、ニホンに原爆を落とすことを計



画していたか？

闇の帝王「シラガミ」…謎多き過去  
未だに見つからない死体

シラガミ生存説…完全復活が世界の終わりか？

「フウ…最近になって活発になってきたな…なんとかせねば…」

悔しそうに唇を噛みしめ資料を目の前のテーブルに置く

少し物思いに耽っていると正面の大きな扉から2、3回ノックが聞こえた

「連絡か…入れ」

「失礼します…ヴルム様

外線から一本の電話が入っています…」

外線からだ…大方イタズラであろう

「外線からの電話は、儂に回すなど言っただろ！！儂は今忙しいのだ」

「いえ…女性の声でパスコードを言ったもので…かなり昔のコードですけど、「4285965の白から紫へ」という…」

ヴルムは、そのコードを聴くと今まで冷静であった顔が驚愕の表情に変わる

それもそのはず、そのコードは自分の父親が使っていたのだからだ

ヴルムは、使用人に悟られないように冷静な素振りをして

「回せ…」と言った

ほどなくして自身の机の黒電話が大きくなった  
どうやら、外線的人物と繋がったらしい

心臓が早鐘を打つなか、ヴルムは受話器に耳を傾ける  
最初に聴こえてきたのは、凜とした女性の声  
それも、遠い昔に聞いた声であった

「……親父か？」

暫しの沈黙の後に

「久しぶりだなヴルム…元気そうだなによりだ」

「今まで何処に行っていたのですか！？おふくろとも連絡がとれないですし…」

「すまなかった…しかし、オレも驚いたぜ！！まさか、ボリアという字あだなを使うとはな、さすがに気付くのが遅れた…何があった？」

「親父…アンタは…いやこの場では、芳しくない…直に会って話の方がいい……」

「??、どういうことだ…ん！！何か良くないことが起きたな…」

「流石、親父は察しがいいです…場所はこちらが決めるから今週末にもう一回今度は、一般回線でかけてきて欲しい」

見事な落ち着きに的確な指示「賢くなったなヴルム」

「わかった…その日になったら一般回線で指示を仰ごう…」

その後に一言を加えるようにつぶやく

「まあ、その時になったら少し親父にも演技をしてもらってから…演技内容は…」

その内容を聴いた後のシラガミが電話を乱暴に切ってしまい、ヴルムは耳鳴りが響く中受話器を元に戻す

「……やってくれないと話が出来ないですよ…親父……プツ!!  
想像するだけで笑える!! フフツ」

今にも腹がよじれんばかりに笑うヴルム

ガチャ!!

「父さん!! この書類……何ニヤニヤしてんの?」

ヴルムの息子（シラガミの孫）がスーツ姿で入ってきた

書類をたくさん持ってきているということは、仕事の話だろうが…  
…ヴルム室に入ると普段寡黙な父親が大爆笑していれば驚かない人はいないだろ

「フハッ!! ……いや、なんでも…クフフ、ダメだ想像したらフハハハ」

高笑いする父親に若干引き気味の息子であった

\*\*\*\*\*

何処かのアパート

一人の若い痩せ形の青年がパソコンのキーボードを叩きながらブツブツと何かを呟く

「この世界は腐っている！！シラガミこの神だ！僕は、シラガミが成し遂げようとした考えに賛同して世界を救ってやる！！！」

開いているページは、爆弾の材料を注文する闇サイト

「クククッ！！シラガミ様！！見て下さいよ！！僕が世界を救い、貴方様を迎える城を建造しますから！！」

そして、マウスポインタは購入の二文字をクリックした

空には、闇夜に不気味に光る万華鏡の月がポツカリと浮かんでいた  
その万華鏡の下に燃えるような赤い髪をした女性が石段に腰かけて  
天を仰ぐ

女性に化けたナイアルがついに動き始めた

「ゲームをしましょう…世界最凶の犯罪者♪」

### 混在（3）、華麗なる女祖父（後書き）

オマケ シェフ溟邏スペシャル

いよいよ料理スタート

「今回は、レストラン「かぐや」の最高のキッチンを使って料理していただきたいと思います」

開口一番のシラガミの挨拶から始まり、溟邏もシェフの格好でやる気十分だ

「さらに、シェフ溟邏の料理のアシスタントをして下さるのは、この店の娘で現在料理の勉強をしている「飯嶋柑さん」です」

シラガミと燐靜が軽く会釈をすると快活そうな声が二人に帰ってきた

「どうも！！料理を作るも食べるも大好きの柑でーす♪」

「柑…今日は、よろしくね…」

「オッケー！！燐ちゃんの頼みなら断れないよ！！さあ、頑張ってレッツクッキング♪」

そこで、再び司会のシラガミにバトンタッチをする

「それでは、ご紹介いたします…炎の料理人「シェフ溟邏」さんです」

全員の拍手によりキッチンに入ってきたのは、店長クラスの長いコック帽に真っ白の料理人の服を着た溟邏  
髪が黒く長いので服との対比が激しい

2ヶ月かかってようやく料理 炎の料理人「シェフ溟邏」

というテロップが入る予定

「いらっしやいませ！！今回は、わらわが丹精込めて作った野菜を使って料理を進めるのじゃ！よろしく♪」

料理スタート！！

「今回は、ピーマンの肉詰めを考えておる（豊作だったピーマンを片手に取り）もうなんじゃ……鹿賀丈史さん（料理の鉄人という番組に出た俳優）がかぶり付きそうじゃな」

と言って荒々しくピーマンをかじる溟邏  
まさに鉄人！！

「旨いぞ！！」

「そう…早く作れ」

続いてナス

「さて……ナスは、どう調理しようかのお…焼くか！！焼きナスに決定じゃ！！」

無計画に料理を進めるな…  
焼きナス

「じゃあ、網が必要だね!! あたしが持ってくるわ!! キッチンには置いてないから」

「そうじゃな…網で焼くことにしよう!!」

網を取りにいく飯嶋柑

そのまま調理室から出ていく

ちなみにカメラの映ってない所でシラガミは、ピーマンの肉詰め  
肉を練っています

そこでシラガミからの一言「ナスも肉詰めにする旨いぞ……」

「ん!!…じゃあ詰めるか…」

「えっ!!…柑が網を取りに行ったけど…詰めるでいいの?」

「無論、そうじゃが…」

溟邏は、柑が網を取りに行くために出て行った扉を一瞥して

「何を取りに行ったんじゃ? あやつは…」

数分後 戻ってきた柑

扉を開けて左手にいくつかの網を持ってきた柑に対して溟邏は……

「コレ!! 何処に行っておったのじゃ!!…なんじゃ、その手に持  
っているのは!!」

「網…ですけど…」

「いらないわ!! そんな物!!」

カチッ（柑が怒った）

「何よ！！使うって言うから持ってきたのに！！焼きナスでしょ！？」

「……いや、すまぬ…シラガミがナスにも肉詰めろという命令のせいだな…」

「オレのせいだよ…」

料理開始から

1時間経過

未だにテーブルの上には手付かずの野菜が転がっている

「大体、このような下拵え（したごしらえ）は、何分位あれば終わりますか？」

シラガミが唐突に柑に質問した

「うーん…大体10分あれば軽く終わるわよ」

「うっ！！（溟邏にその言葉が深く突き刺さる）」

既に1時間

「そうだろ…溟邏…普通はそうなんだよ…」

「黙つとれ隣静！！柑もそうじゃ！！あまりそういうことを言っちゃいかん

少しでも傷口があると直ぐに塩を塗りたいくる女じゃから！！」



構わずに柑からの注意

「あとは…テーブルの上に野菜が散乱しているのが問題ね…夏だと早く傷むから」

「やはり、衛生面で問題があると…」

椅子に座ってわざとらしくため息を吐くシラガミ

「大丈夫じゃ!!今回は、試食の強い方が来ておるから!!言い換えれば「試食のプロ」…それに若干一名は不死の能力を持つ奴がいるからのお」

「いくら不死でも不味い物は、食わんぞ」

料理開始から1時間半経過

ホタテをニンニクで炒める

「旨そうじゃな♪…よし生モノじゃから臭みを消す意味を込めて…ちよつとフランベをする!!」

フランベ……調理の最後にブランデーやラム酒などアルコール度の高い酒を振りかけ、火をつけてアルコール分を燃やす調理法  
慣れない人がやると火事になるので真似をしないように（作者の父親が挑戦し換気扇に焦げがついてしまいました）

料理の真骨頂（溟邏の思い込み）      フランベ

溟邏は、自分の鞆からフランベ用に持参した「クアントロー」を手  
に持ちよくふる

隣静からの心配の声

「大丈夫？……柑の家は？」

「大丈夫だと…思うよ「キャンプファイア」にならなければ…」

いよいよシェフの見せ場!!

続く

## 混在（4）、未知なる（前書き）

姉がピクミン2に最近はまだ夏休み中ずっとナビゲートをしていました（私はオールクリア済み）

ラストステージに上がった所で大学の夏休みが終了し逃げてきました。

果たして姉は一人でクリア出来るのでしょうか？

ヘラクレスオオヨロビグモ（ピクミン2ラスボス）は、かなり強いです…

## 混在（４）、未知なる

コクシキとの騒動から２日が経ったある日：

ボリア一族の不良グループを一人で倒してしまったという噂が広まり月南は、周りと上手く馴染めずに孤立していた。

学校でも彼の横暴は知る所にあり、<sup>コクシキ</sup>気に入らない生徒がいれば度々問題を起こすのであった。

さらに、最大権力を誇る「ボリア一族」ということを頭に入れば逆らえる者等いない……

彼と同じ血族である、白邏高校の校長「カゲタ・ボリア」でさえ注意が出来ないのだ。

これは、ボリア一族は基本的に年功序列を軸として権力分布が行われていることに他ならない。

カゲタは、創設者である「エイボン」の次男に当たり兄「ヴルム」の孫である「コクシキ」とでは、雲泥の差があるのだ。

流石にカゲタもこの件については、頭を悩ませており「何時、ボリア一族の頂点（兄）から叱責の電話」があるかを怯えて過ごしている。兄の一言で職を失うことも容易であるからだ：

しかし、待てど暮らせど兄から電話が掛かったこず、逆にその静寂さが恐ろしい……

カゲタは、残り少ないであろうと考える校長の椅子に深く腰掛け、ひじ掛けをそつと撫でる。

「まさか、あの転校生が問題を起こすとは……」

うなだれるようにして一言ボソリと吐き出す。

さらば、校長ライフ…グッバイ！！

つと自分で自分の重たい気持ちをやかしてみるのが気休めにもならない。

すると、待ちわびていた（？）机の上の電話機が規則正しい電子音を鳴らす

カゲタは、少し身を乗り出して電話の相手を確認すると、案の定「ヴルム」からであった。

カゲタは、一回深呼吸をして落ちついてから受話器を握り、耳を傾けた。

幼少期より兄に叱られてばかりいたので自然と身体が硬直と緊張している

「あ…兄貴…あの件は、全面的に此方が責任をとりま…え！？…父さんが生きてた？」

しかし、カゲタが予想した対応とは違い、自分の父親の生存を伝える電話であった。

\*\*\*

「え…皆さんも知ってると思うが、この世界は4つの大きな国から形作られている…」

現在、月南は担任の先生である海塚の歴史の授業を受けている。

若く爽やかな海塚は、軽快に黒板に世界地図を簡略して書いた。

「…エイボン・ボリアが統治する北の大国「ニホン」…ソロモンが統治する西の大国「レムリア」…オーデインが統治する東の大国「アスリカ」…ナイアルが支配する南の大国「ナナシ」だな。この四大国の力の均衡によって今の世界は、保たれている」  
一回声の調子を整えるために咳払いをした。

上記に上がった四名は、シラガミと共に学業を学んだ人物達であり、生き物を縛る因果の寿命の経過を緩やかにする「輪廻学」を修め、同じ師を仰いだ仲でもある。

四大国のことを話した所で本日の授業の終わりを告げる青銅の鐘の音が学校中に響く

しかし、授業が終わっても不穏な噂の絶えない月南に近づく物好きな輩はおらず教室に一人だけとなってしまった。

少しうつむいて前に進んでいる生徒には、決して追いつかないスピードで廊下を歩く

「なんでこんなことに…」

記憶喪失の影響によって自分が何者かも分からないで彷徨っていた頃

不安だらけだった：帰る場所も自分の名称も不明

0から始まりだった

もう戻りたくない！！また自分を見失うのは、やだ！！このまま平穩無事に暮らすにはどうしたら良い？

月南の思考回路は、かつて無い程混乱していた。

身体が精神を保つための防御反応であろうか：頭の中から悪魔の言葉が囁く

（自分を認めてくれない世間なんて壊してしまえ！！目撃者を消せ！！そうすればお前は、もう心配する必要がない）

力強い女の人の声だった

月南の精神が泥のような闇に引きずり混まれていく

全身が浸かった所で目の前にどす黒い煙のような姿の髪の毛の長い女性がせせら笑っていた。

狡猾そうに耳元まで裂けた口元からやんわりとした声で「狂気に堕ちろ：堕ちろ堕ちろ堕ちろ堕ちろ堕ちろ堕ちろ堕ちろ堕ちろ堕ちろ」

途中から耳を覆いたくなる程の不気味な声で機械的に自分に言い放っている

すると、黒い女性の背後から無数の人間の手が月南に向けて一斉に伸びてくる

泥の中にいるため大した抵抗が出来ないまま無数の手に絡めとられ身動きが出来なくなってしまった。

顔だけ表に出され身体は、無数の手に掴まれているといったところだ黒い女性は、そのことを確認すると月南の元にフワッと浮いて近づき月南の出ている顎を掴んだ

狡猾そうに笑みを浮かべてそのまま月南の唇に吸い寄せられるようにキスをする。

その女性は、不可思議なことに「シラガミ」と瓜二つであった

直後、まばゆい光と共に蒼白い巨大な骸骨が闇の扉をぶち破り侵入を果たす

巨大な骸骨は、骨だけの腕で闇の泥に拳を叩きこみ中にいた月南とシラガミにそっくりな女性を引き剥がす「まだ生きていたか!! 狂<sup>うひめ</sup>姫め!!」

巨大な骸骨からシラガミの厳しい怒号が飛ぶ

「：見つかったか：シラガミ!! 俺様はまだ負けてはいない!!」  
シラガミそっくりな女性は「狂姫」という名前らしい

狂姫は、シラガミの追撃を躲すため間合いを取り、手足を操り人形のようにダランと力無く下へと伸ばす

そして、両目を狂ったように左右別々に動かして上目遣いへと変える。

この世界の真の姿を決して瞳には映さずに自身の自己<sup>エゴ</sup>を貫き通すためだけの二つの眼球からシラガミを睨み付ける。

「初めて聖書に目を通した時から疑問が生じるだろ「神が存在して、全知全能なら、そして人が神に似せられた創造物であるなら、どうして世界に悪が満ち溢れているのか?」こんな疑問に答えられる教えなんかありやしねーんだよ」

「それもそうだ!! 所詮聖書なんぞ不完全な人間が作った失敗作だからよ!! : そんな不完全な人間が何時までも地球のトップで君臨していること事態がおかしいんだ!! : 身体ばかりが巨大で脳が遥かに小さい恐竜が隕石で滅んで哺乳類の時代が始まったように、技術と利益ばかりを追求して自然を破壊した人間達も滅ばなければならぬ!! 世代交代の刻が来た!!」

狂姫は、相変わらずね体勢でシラガミを見上げ続けているが刹那、巨大な骸骨の持っていた刀で狂姫の腸<sup>はらわた</sup>を貫く

「ガアッ!!!!」

「言いたいことは、それで全部か? : 貴様の思想は危険過ぎる!! 実行はさせん!!」

恐ろしく冷淡な声であった狂姫は溢れでる血液に右手を滑らせて嬉

しそうに舐める。

「ギャハハハハハハ！俺様には分かるぞ！！もはや、人類は避けることが出来ない所まで来ている！！たった一人の不死のお前がどうやって人間を守る！！？」

ロボットのように機械的な動きで首を傾け薄ら笑いをした。

先程、狂姫に捕まっていた月南は黙って二人のやり取りを傍観するしか術はない「あれが…シラガミ？…」

唐突に自分の意志とは関係なしに溟邏の言葉が連なる（お主は、シラガミじゃ…）目の前にいる巨大な骸骨がシラガミ？…わ、私は一体？震えが止まらない

怖い…

だけど、確かめないといけない。

あの巨大な骸骨から自分を助けてくれた女性の気配がするからだ……  
髪黒い青年達から自分を庇ってくれた女性の気配だ。月南は、自分の正体を欲していた

どんな結果であろうと受け入れる覚悟がある

狂姫の歪んだ信念でなく真っ直ぐな信念を…

そして、ブルツと身震いをしながら恐る恐る骸骨シラガミに問いかける

「あ…あなたがシラガミさんですか？」

我ながら細かい声であったが他に音源が無かったので容易に狂姫とシラガミに届く。

「こいつは驚いた…ここで自我が保たれているとは…」

骸骨のシラガミは、刀芯が突き刺さる狂姫に顔を向けて

「残念だったな…月南はお前と違って狂気に堕ちる輩ではない！！」

さあ、消えて貰うぞ狂姫」

シラガミは、刀を持っている腕とは反対側の腕を振り上げで変形させていく。

人間の腕の骨を形作っていた造形は徐々に巨大な大砲となり狙いを定める。

「體解放…モデル「カノン」…エネルギー充填…32、45、60



……100%」

緑色のまばゆい閃光が自身の刀で仕留められている狂気の女を包みこむ。

「真理は滅びだ！！俺様の滅びは新たな始まり！！人間がいる限り狂気（滅びの感情）が消えることはない！！ギャハハハハハハ」

女性は最期まで自分の歪んだ意志を変えることなく散っていった。

その瞬間の光景は決して忘れることが出来ない……というより忘れてはいけない

ここから、不死の存在「シラガミ」と外なる神、宇宙全体の存亡を賭けた大いなる決戦が幕をあけるからだった：

「其は永遠に横たわる死者にあらねど、計りしれざる永劫のもとに死を越ゆるもの」

暗黒書物・ネクロノミコンの一節より抜粋

\*\*\*\*\*

一仕事終えたかのように刀を鞘にしまい片腕の砲台を變形させるシラガミの側で月南は解答を待っていた。あの時にした質問の答えを貰っていないからだ。

……ひょっとして騒動で忘れてしまったのかと思い三度話しを切り出す。

「あ、あの……」

「分かっている……少し待ってくれ……」と月南の方とは反対側の方に視線を合わせゴキッゴキと骨格を変えていく

あれほど悠然とあった骸骨が収縮して月南と同サイズになり徐々に肉付けされていった。

身体つきは華奢で女性特有の胸が出てきて全体的に丸みを帯びる

服装は巫女服で上は純白の白、下は赤色の袴に身を包み鬱陶しそうに前髪を横にずらしていた。

間違いなくあの時助けてくれた女性だ。

金色の髪を持って顔付きもどことなく自分に似ているが眼だけは、瞳がなく深海の蒼色だけが絵の具を垂らしたかのように広がっているだけだった……

「お前の言う通り……オレの名前はシラガミだ……」

シラガミは身体の昨日を確認するように身をよじったり腕を曲げたりしながら質問に答えてくれた。

「それじゃあ……あなたが私の正体ですか？本来在るべき姿なのですか！？」

月南は、自身の不安感の元凶の質問を連ねる

「私が記憶を思い出したらあなたになるのですか？私は、消えてしまうのですか」うつむきながらも……消えてしまう恐怖に耐えながら月南が言葉を絞りだす。

シラガミは、その様子を見ても変わらずに落ち着いた表情で月南を眺めている。「……ここは特別な空間でな常人なら自我を保てない所だ……人間の见ている夢に似ている。ここで自我が保てるのは普通を越えた能力を持つ者だけだ……」

「で、でも私に能力なんて……」

月南は両腕（？）を前に出す動作を反射的に行ってしまった。心理的にイレギュラーな存在であるシラガミの前に壁を作る

シラガミは月南の方へ苦笑いをしながら月南の両腕を軽く指さす

「……え……！！！！？」

恐る恐る月南がシラガミの指さした手元を確認するとそこには、火葬でもしたかのように綺麗さっぱりと肉が落ちた「骨」が並んでいた。

「えー！！？どういうこと？」

てっきり幻覚を見ているのだと咄嗟に考えブンブン振り回してみるのが「骨」は、意志通りの場所に移動するだけであった。

「骨か……オレと似たような能力だな……精神レベルがオレに近い……証拠だな……」

うろたえる月南をよそにシラガミは淡々と話しを始める

「な、ななな！！！一体私の身体に……はわわっ」

と月南が言った後に闇の空間がまるで地震が起きたかのように崩れ出した。

「……思ったよりも早くに崩れだしたな……もう少しお前と話しが出来ると思ってが……」

主（狂姫）がシラガミに消滅されたことによって形作られていた空間が崩れた端から塵のように消えていく

「……取り敢えずお前を元に戻す……また時間があったら話しをしたい」  
シラガミが指を鳴らすと二人は黒い光に覆われてその場から瞬間移動を成し遂げた。

刹那、狂姫の空間は紅蓮の焰に包まれて月南の精神の片隅から消え失せる

「やっぱり……この程度の力ではシラガミは倒せないか……」

空間が消えた暗闇に白く長い髪をしたツインテールの女性がカエルのぬいぐるみに乗って浮遊していた。

「シラガミの不死の特性を無くさないと倒せないな……シラガミ……君は僕が殺すから……」

カエルのぬいぐるみから聴くに堪えない不協和音が鳴り響かせて薔薇のような服に真っ白にスラリと伸びた足を組みながらツインテールの女性が静かに笑う

\*\*\*\*\*

月南が気が付いた場所は白邏高校の保健室であった

周りはカーテンで仕切られており外の様子は分からないといった所であろう。

月南は混乱する頭を擦りながら上体を起こす。

シラガミと名乗った巫女姿の女性が自分？

自分が消滅することへの疑念が払拭出来ない中、保健室のカーテンが静かに開いた。

「おー!! 気が付いたみてーだな!!」

黒い髪を生やした青年「コクシキ」であった

「あ、あなたは…」

そこまで言った所で月南は口を閉ざした。2日前に自分を襲撃した不良グループのリーダーが「コクシキ」だったのであるから……しかし、月南は目の前にいる人物がニホン国で絶大な権力を誇るボリア一族であることは知らない。

ただの怖い人というイメージしかないのだ。

コクシキは、キンキンに冷えたポカリスエットのペットボトルを月南の首元に当てる

「うひゃあっ!!!?」

あまりの冷たさにすっとんきょうな声を上げてしまった月南

「な、何するんですか!?!」

「悪い…そんな驚くと思わなかった。ポカリは嫌いかな?」

「いえ、好きですけど…」

イマイチ状況が掴めないが一応差し出されたポカリのペットボトルを手取る

コクシキは、月南が取るのを確認すると近くに折り畳まれていたパイプ椅子を組み立てて座った。

「その…なんつうか…悪かった!! 試すような真似をして……あの後ジジイ(ヴルム)にこっぴどく叱られたし…」

コクシキは、持っていたポカリを味見するように一口飲む

「なんで…私を試したのですか?」

月南は落ち着いていた…そして自分が今、一番に聞きたいことがすんなりと頭に浮かんでいく(シラガミに会った影響であろうか?)  
コクシキは、答えに困った顔をしながら、「…似ていたから」とボソリと言った。

「お前がボリア一族の特徴に酷似した容姿を持っていたからだ……この国の支配の格好をした偽者をのさばらせているわけにはいかなーと考えたからだ。親父やジジイに言ったって相手にされないから

俺がやった」驚く程素直に白状したコクシキに怒りの念は覚えずに月南は自身の疑問の核心を突く質問をコクシキにぶつける。

「シラガミって言う人を知っていますか？」

コクシキはパイプ椅子から転げ落ちる位驚いた。

「!!!!!!? お前、シラガミのことを知らないのか!??

歴史上最凶の犯罪者「シラガミ」のことを:」

「えっ:!!?」

世界を一つの国へと統一する「パンゲア計画」を完遂させるため民衆を混乱に叩き落とした張本人

強大な魔力と桁外れの身体能力を駆使して邪魔する輩を次々と抹殺してきた人間。容姿、年齢、性別等の個人情報は一切なく「シラガミ」という個人名を指しているのか、計画に携わる人々による組織名とも噂されている。200年前の戦争の時に大魔術師エイボンとの激闘の末、倒されるが今でも生存説の噂が後を絶たない。

別名、闇の帝王

コクシキは、教科書を見ているかのようにスラスラとシラガミの情報を諳じ、得意気な表情をするが月南の考えは、それ所ではない

(え:私の中にいる人は:犯罪者!?)  
シラガミ

狂姫から自分を助けてくれたあの女性が……

ということとは、私は犯罪者?

顔から血の気が失せるのを感じる:しかし逆に頭は冷静に稼働し必要な情報への足掛かりの質問をする

「あの:エイボンさんは、どんな人ですか? 知りたいことがあります」

「エイボンは俺のジジイだ!! といってもジジイ(ヴルム)の親父だがな……会いたいのか?」

「はい!!」

暫くの沈黙の後にため息混じりで言葉を繋ぐ

「そりゃ無理だ:エイボンは、もう亡くなっているからな……:そう

だな、俺の親父がまだ物心着く前に死んだと聞いているが」

「そうですね……」

ベッドで体育座りをしてガクツと落ち込む月南にコクシキは、ある提案を持ちかけた。

「そうだ！！……今週末に俺ん家に来ないか！！そうすればエイボンの息子のヴルムがいるからよ……（でも用事があるって言ってたような）」

ウッ……

現職の総理大臣の名前に思わず萎縮する月南

「大丈夫なんですか、私行っても？」

「構わん構わん！！友達としてなら大丈夫だから」  
手を横に振りノー・プロブレムという動作をする

「じゃあ！！宜しくお願いします。私は、「真槌月南」と申します  
！！」

「あ、自己紹介がまだだったな…俺は「コクシキ・ボリア」、由緒あるボリア一族の端くれだ、よろしく！！」

黒い髪が夕焼けの光で輝いているように見えた

そして、全体的な雰囲気は月南の知っている人とそっくりであった  
が思い出せない。

校門前でコクシキと別れた月南は嬉しそうに買ったばかりの携帯電話に目をやる「奏」のアドレスの下に新規登録したばかりの「コクシキ」のアドレスがあったからだ。

ハプニングはあったが学校生活で必須の「友達」が出来たことについて嬉しかった。

そして、私の真の正体についても調べていかないと慌て頭を切り替

えて交差点を横切る

「ミツケタ……」

白邏高校の屋上に骸骨の面をし全身に黒い衣服を身に纏った者が確かめるように言う

骸骨の眼球部分には、眼のような紫色の光が月南を追いかけるように動いていき見えなくなると光が無くなり身体の正面に顔をずらす。その者は、骸骨の首がぶら下げてある大きめの杖を振りかざすと黒い衣服ごと灰のように散り散りとなり風と共に姿を消してしまった

## 混在（４）、未知なる（後書き）

オマケ      シェフ溟羅スペシャル

料理人の見せ場「フランベ」フライパンで軽く炒めたホタテに溟羅が実家から持ってきた「クアントロー」を注ぎ込む！！

すると、ガスの焰がフライパンに宿ったかのように全体を赤色の炎が包み込む！！包み込む！！包み込む！！

（カメラの３アングル「アップ」、「横打ち」、「ロング」で溟羅の勇士を見せる）

まるで「メラ〇ーマ」：

ホタテにほんのり焦げ目がついた所で弱火<sup>メラ</sup>を息で吹いて消す。

火のついていないガス台にそのフライパンを置き、続いての作業に移る

溟羅は、シェフの首元に巻いてあるバンダナをいじりながら「そうじゃなく次はミキサーを出してくれるかのう」と言った。

再び柑が（本編でまだ出番がない）登場しミキサーを戸棚からひつつりだしてくる。

しっかりとミキサーの用意をすると、さっき茹でた（茹でてた！！）ジャガイモを入れてミキサーにかける……と思いきやさらに：

「今回はじゃな：これに「よく焼けたホタテ」を入れる！！まさに、オレ流じゃな」

「はっ！？」

シラガミが耐え切れずに感嘆符の付いた言葉を言ってしまったが無理もない



ジャガイモ（フワフワ）＋よく焼けたホタテ（カリカリ）　|| ……  
駄目だ：答えが導けない

隣静と柑もさすがに静かに粗行あらぎょうを見ているわけにもいかず

「なんで!!」（珍しくビクリマーク）

「どうして!!」の当然とも言える疑問にすら、オレ流を発動した  
溟邏には届かない

さらに溟邏の暴走は収まらずにジャガイモとホタテが満載になった  
ミキサーを黙って見下ろし恐怖の一言を……

「これに牛乳なんかを入れてみるかのう…」

「「ぎゅうにゅう!!!」」

ジャガイモ＋ホタテ＋牛乳（カルシウム満点）　|| 混沌

構わずに溟邏は冷蔵庫に冷やしてあった「健やか牛乳」を開けて、  
ぶち込む

半分くらい入れた所でミキサーの蓋を閉じてスイッチを入れた。

ギイイイイイイイ

「ひいひいひい!!!」

シラガミが苦笑いをしながら溟邏を見守っているが正直嫌な映像で  
ある

興味がある方は自宅で作って見てください（味は保証しません）

しかし、ホタテが思いの外上手く混ざらずに上の方に積み上がって  
いる：さすがに生涯、海で生活する猛者は水（牛乳）の流れがわか  
るらしい

溟邏は混ざらないホタテに業を煮やしてミキサーを思い切りガクガクと揺らし混ぜようとするが  
バキッ!!……

ミキサーの回る部分がなんか変な感じになり奇怪な音が鳴って一時  
停止

もう一度組み立てて再試行<sup>リトライ</sup>

その間の柑の視線が恐かった（ひたすらにミキサーを見つめている）

「柑が一点を見つめている……微動だにしていない」  
燐靜の声以外に一切の会話がな  
い戦慄の瞬間であった  
料理開始から2時間30分経過

「出来たぞ♪」  
溟邏の歓喜の声によりまるで死刑を待つ囚人のように別室に移動する  
シラガミと燐靜、柑

取り敢えず二品が完成したので試食を一旦取るという形になったら  
しい

次回!! 死刑執行

## 混在（5）、ウルタールの陰と骸骨面（前書き）

秘かな特技

「右の肩を自由自在に外せること」

はめるとボキンッ！！という清々しい（？）音を奏でます。

昔は、痛かったが今ではそうでもない……人間の身体は不思議ですね。

## 混在（5）、ウルタールの陰と骸骨面

「どうするん？」

白邏高校の校内の片隅にひっそりと生える大きなプラタナスの木の側で隠れるようにしている皐月が後ろにいる奏と燐靜に向け口火を切った。

「どうするって…月南がそんなことをするはずないでしょ！！」

「そう…いずれ私の旦那になる月南はそんなことしない……」

二日前に起きた喧嘩騒動からなんとなく月南に話しかけずらくなってしまった三人

経験上、月南は喧嘩するほどの野郎ではなくどちらかと言えば平和主義を憚ることなく言っていく若者（？）のはずである。

「きつと罠にはめられたずら（んだわ）…なんとか無実を証明しない……」

「でも…相手はボリア一族のコクシキ……」

「そこよね〜…」と頭を抱える奏

ボリア一族でなければ私がぶっ飛ばして真実を炙り出すのに…と右手ブンブン振り回す。

しかし、二人の意見とは違う見方で皐月が言う

「ちゃうわ！！そっちゃやない！！どないすんねん、月南に売り付けようとしていた商品を（全部売り切れたら月末にオカンと焼肉屋に行く予定やったのに…）、まだ一品しか売れてへんのに！！」鞆の中には、素晴らしいB級の品々達が……

「月南のアホんだら！！喧嘩するなら来月にしいや（えっ！？）」

皐月が月南に売り付ける予定の品物が入った鞆を地面に叩きつけた。チャックが空いているので歴史の教科書やらも散乱してしまう。

「くうー！！この世に神も仏も無くなっちまったんやろか……酷い話し……」

皐月が奏と燐靜がいるであろう方向を見て賛同を求めるが…向いた

先に二人はいなかった。

慌てキョロキョロと辺りを見渡すと校門から学校の外に移動している姿が……

「ま、待てや！！人の話の途中でいなくなるなんて失礼やぞ……！！！」

皐月は、慌て二人に追い付こうと地面に落ちたB級の品物と教科書を鞆に入れようと手をかけるが……違和感があり終始固まる。

薄青色のローブを身に纏い骸骨の面を付けた何者かが熱心に散らばった品物を興味深く見つめていたからだ。

「わあー！！これなんか凄い……凄いよ」

骸骨面を付けた人（？）は手にしたカエルの玩具（ネジを巻くと跳ねる仕組み）をキラキラとした眼で見つめて遊んでいる。

「……そりゃどうもや、欲しかったらやるで」

皐月がカエルの玩具以外を鞆に詰め込むと謎の人にさらっと言った。

「本当！！？本当に？……ありがとうございます！！！やったああああ！！！！……はっ、こんなことしている場合は！！！！」

カエルの玩具にしては大袈裟であるがあげると言ったらローブを大きく広げてかなり喜んでフワフワと学校方面に飛んで行った。

「けったいな人やな……あんなフワフワ飛んでいかんでも……あれ！？あの人おかしくない？……フワフワ？」

もう一度、瞼を擦って見て見るが足が生えておらず一本の尻尾のようなモノがあるだけであった。

そう、日本で怖い話の中心として語られる「幽霊」である。

「ま、ままままともに見てもうた！！！！ホンマにおるんや？」  
膝がガクガクと震えだして止まらない皐月

急いで地面に置いてある鞆を肩に掛けて脱兎の如く逃げ帰る。

（人間さんありがとう♪）

骸骨面をした者が大事そうにカエルの玩具をローブの袖に入れた白

邏高校の校舎をスッと入っていった。

\*\*\*\*\*

「まあったく！！シラガミが学校に行ってから全然暇になってしまったわ！！」

艶とした長い黒髪を足元まで伸ばした溟邏（久々の登場）が不機嫌そうに溟神都市を往来していた。

白と赤のボーダーが入ったTシャツと青色のジーンパン、サングラスとジーンパンよりも淡い色の帽子を深々と身に付けた格好であった。

「……それにしても……この都市も変わったもんじゃな……200年前はあれほど壊滅的だったのに……」

（シラガミが身を呈して原爆から民衆を救ったのに……人間ときたら……）

あの時の冷たくなっていくシラガミの身体（四肢は引き千切れていた）が今でも夢に見る程の悪夢であった。仲間の妖怪もナイアルが開発した原爆でその姿を影だけ遺してほとんど逝ってしまっておった。「何処かに生き残りが居ればよいのじゃが……」と呟きながら人通りの少ない小道に足を傾ける。

「ミャアー……」

一匹の小さな身体をした子猫が溟邏の足元に擦り寄ってきた。

人に慣れているらしく物欲しそうにチョココンと前脚を溟邏の履いている草履に体重をかけ見上げている。

「なんじゃ……なんか欲しいのか？……じゃが、残念じゃがお主を見ると馬が合わん奴を思い出してしまふのじゃ……」

子猫は溟邏では反対方向を向いて「ミャア、ミャア……」と鳴いた。まるで誰かを呼ぶみたか細い声で天高く飴している。

「な、なんじゃ……どうしたというのじゃ！？」

溟邏が疑問に思ったのも無理はなかった。

外の天気は晴れであり雲一つもない「快晴」であるにも関わらず霧が出てきて雨がパラ付いているからだ。

一般的に「狐の嫁入り」と呼ばれる現象である。

雨が降ってきたので子猫は、何処かに避難をしているが溟邏はそんなことよりも目の前から凄まじい靈気を放つ輩が来ていることに對してのみ警戒を強めている。

「誰じゃ!! わらわは九尾の暗狐であるぞ!!! 名を名乗れ!!!」

毅然とした態度で問かけるが応答はなく普通の妖の類いではあり得ない量の靈気を撒き散らしながら、それは出現していく。

一層深い霧の中から姿を現したのは、顔の部分に不気味な骸骨の面を付け、翼の生えた「猫」であった。

「暫く封印されて頭が溶けたか? ……溟邏姉さん」

骸骨の面を付けている頭が重たそうに首を垂れ透き通った声が響く。

「お主は蛟!!! ……生きておったのか……」

蛟……かつてのシラガミ達の旅の途中で出会った猫族、シラガミが保護したカムナギの出身地の「ウルタール」生まれ。

能力は、水を自在に操ることが出来る。

蛟は、自分の付けていた骸骨の面を取り溟邏へと乱暴に投げつけた。

「な!! なんじゃ? 急に……」

「姉さんが封印から解放されているとなるとシラガミ様も復活しているのだろうか? ……シラガミ様にそれ（骸骨の面）を返して、伝言を伝えて欲しい」

面の下から現れた素顔は、右眼が青、左眼が緑のオッドアイであった。

蛟は、そこまで言うで一呼吸置いて話しを進める。

「……恩は返した……あとは勝手にやらせてもらう……」

「……何をするつもりじゃ? 仲間を抜けるのならそれなりの理由を申さんか!!!」

「別に仲間になったつもりはないが……強いて言えば仇を討つといった表現になる……オイラのご主人様達を虫けらのように踏み潰した奴らを「四凶」を倒すために……」

眼光が鋭く光り、先程まで霧雨だったのが豪雨に姿を変え二人の身体に叩きつけていく……それほど怒りを四凶に秘めているようだ。

「じゃが……四凶は……」

「わかっているシラガミ様が封印していることは……だから、勝手にやらせてもらおうと言っている」

四凶……かつて大罪を犯した四人の神獣

戦乱を好み暴虐の限りを尽くした凶悪な怪物として人々から恐れられた。

蛟の出身地も襲われ一夜にして滅びてしまった。

しかし、そんな怪物もシラガミの圧倒的な力（能力発動状態）の前には為す術なく闇深く封印されてしまう。

今回の話は、蛟がご主人の仇を取るためにシラガミが組んだ封印式を破り四凶を殺すといったことである。

「元々、そのためにシラガミの下で修行をした……精神が壊れる覚悟で不老不死をシラガミから手に入れたのも全ては、この目的のため……」

蛟は言い終えると背中から生えた大きい翼を拡げて電柱の登頂部にフワッと飛びのった。

溟邏は、落ちている骸骨の面を拾い上げ蛟に視線を移す。

無言であったが溟邏には、わかっていた……一度言い出したら最後まで頑なに自分の意見を変えようとはしない頑固者であったから

（シラガミがじきじきに言わない限り意見を変えることはないだろう）

「そうだ……もう一つ言っておくか……大気の循環はほぼ「水」が



中心となって動いている、オイラは水を操る能力だからわかるが……人間とも、動物とも、神ともとれない……異質な存在がニホンを中心に大気の流れをおかしくしている様だ……まあ、シラガミは知っていることだと思うが……」そこまでのことを伝えると白い毛皮を太陽光で反射させながら蛟は、晴天の中に消えて行った。

蛟がいなくなったことにより雨は上がり人々は、外へと出て買い物等をするために動き出していく。

溟邏は、蛟から渡された骸骨の面を頭に飾りつけ踵を返して都市の中心へと歩み出す。

「……蛟の話から揣摩臆測しまおくそくするとじゃな……シラガミの宿敵のナイアルが関係しておる……わらわも動かねばならなかったか……のうシラガミ……」

溟邏は、難しい問題に直面した時のわくわく感を抑えきれないような感じで笑みをこぼす。

面白くなってたぞ……

長い黒髪の中から真ん丸の赤色の獣眼を覗かせていた。溟邏はそれ眼を隠すように面を付け天を仰いだ。

\*\*\*\*\*

コクシキの家に遊びに生きがてら自身の前進とも言える「シラガミ」についての情報を知るために朝から準備に追われている月南

今は、週末の日曜日

学校が休みであり自由に動くことが出来る貴重な1日だ。

そして……シラガミの息子であるヴルム達に会う約束をした日でもある。

(……参ったな……月南も今日出掛けるのかよ……どうすっかな……) 月南の中にいる巫女姿のシラガミが腕を組んで盛大に悩んでいる。シラガミは月南と初顔合わせをしてからまだ一回も話を交わしたこ

とがないのだ。それゆえに、月南に対して軽く質問が出来ずに困っている（普段は、お互い干渉できないようにシラガミがプロテクトをかけている）

そんなことは知るよしもない月南は、一応天下のボリア一族の家にに行くのだから失礼のない服装で行かねばと思い、服を選定していた。

「うむむ…どうでしょうか？コクシキさんの所に行くのだから失礼でない格好をしないと……」

（！！！！！……そうか…コクシキに会いに行くのか…だったら丁度いい…）

巫女姿のシラガミは、ホッと胸をなでるように安堵の表情を浮かべる。

（……コクシキと友達になったのか…良いことだ…ネイピアとは、違った人格になりそうだな）

シラガミは、昔の仲間を思い出していた。奴の頭脳は、ズバ抜けていたが（シラガミよりも遥かに）、常に孤独が付きまっていたあの男……

\*\*\*\*\*

何処かの暗闇

「ツマリ…シラガミトイウヤツヲコロセバヨイノダナ……」

「ええ、貴方にも損は為さらないように策は考えておりますので…」

赤色のワンピースを身に付けた女性の姿のナイアルが誰かと取引をしていた。

ギラギラとした銀の三日月形のアクセサリーを首から乱暴にぶら下げ、ミイラのような手が魔導着のから垣間見えている。

「ワカッタ…イツマデニヤレバイイ？」

「そうですね…こちらもある程度、準備をしたいので……2ヶ月後にでも…私も同行しますよ」

ワンピース姿のナイアルと話している骸骨面の男は「リッチ」と呼ばれる類の存在であった。

自分の体を「アンデット」にして禁断な不死を手に入れた闇賢者である。

リッチを普通に殺すことは出来ず、例え物理的に肉体を破壊しても、魔術の力で再生されてしまう。

不死のシラガミに対抗する手段としてナイアルが仲間に引き入れようとしているのだが……リッチは用心深く、狡猾な思考回路を有しているので上手くいくのだろうか？

## 混在(5)、ウルタールの陰と骸骨面(後書き)

キャラが多くなってきましたが構わずにオマケを決行します。

オマケ シェフ溟邏スペシャル

前回に引き続き死刑を待つ囚人「シラガミ」と「燐静」

高級レストランのように綺麗に片付けられた四角いテーブルの上にナイフとフォークがきちんと並んでいる。

執行人(溟邏) 登場

奥のキッチンから颯爽と現れた溟邏の両手には暴走した料理の皿が握られている。

一品目

ピーマンの肉詰め 夏野菜添え

パツと見、ピーマンの姿しか確認出来ない……

因みに、器は「ヴィーナス誕生(絶対覚えてる人がいないと思われる)」

溟邏は二人の前に均等に分けた一品目の料理を並べていく。

若干……シラガミが苦笑いを浮かべているが関係なし!!

試食!!

シラガミが静かにフォークをピーマンに刺して口へと運び、味わう

「……これは…見たことのない…野菜か?」

シラガミが頬張りながら皿に乗っている奇妙な薄緑色の物体を指差しながら訊くと

「これはじゃな……青トマトじゃ!! (先程切っていました……)」

更に、食べていると隣にいる燐静が「かたい……」

「それは否めんな……」

と静かに会話をしていると奥で作業していた溟邏がやってきた……

さあ、シラガミ達の苦情が始まりますよ!!

「どうしたのじゃ？」

「……いや、熟す前段階だから…酸っぱいぞ（トマトのことです）」

「いや、この酸味が料理の味を引き立てるのじゃよ!!身振りを混ぜて解説する溟邏だが、シラガミの更なる発言が問題となっていく。

「……総合的な観点からだ…このトマトが一番美味しい…」

「引き立て役が一番…」

「ぬあにイイイイイ!!」

## 確認

青いトマトが一番美味しい

実際に溟邏も食べてみる

「（パクツ、モグモグ）……あ!!本当じゃ……トマト美味しい」

まさかのトマトに惨敗

## 続いて二品目

鯛と夏野菜のシンフォニー（じゃがいもとホタテのソース添え）

取れたじゃがいもをムース状にしました。

## 試食

シラガミがフォークで料理を口に運んでいく

「クククツ……なんつうか…中途半端にうめえ…」複雑な表情でシ

ラガミが膝を叩きながら言った。

「…ソースが美味しい…」

「…いや、作る過程を見るからなんとも言えないが……」

「じゃろ!!わらわのアイディアは凄いじゃろ!!」

まさかのミラクル!!

ソースが意外に美味しい

会話から判断すると「あのミキサーで作ったものらしい」。

「このあと、二品程出す予定じゃ!!」

「おっ!! いよいよパイ生地が出てくるのか!？」

二回腐らせたご自慢のパイ生地が登場します。

このあとのメニューは

「パイ生地を使ったメイン料理」

「夏野菜のパスタ」

「つまり……また一時間、二時間かけて料理をする……」

「そうじゃな……ボチボチとな」

次回、料理後半戦  
パスタとメイン

**混在（6）、混沌の王と追跡調査「エイボンの謎」（前書き）**

遅くなりました。

講義のレポートを提出するために必死で奔走しましたので……すいません！！

## 混沌（6）、混沌の王と追跡調査「エイボンの謎」

混沌の闇

万物の王 外なる神の長として君臨する「アザトース」とあらゆる次元と時空を超越した存在「ヨグ・ソトース」が円い球体を目の前にして会話をしていた。

アザトースの姿は人型をあしらった粘土のような姿で人の身体と思われる部分には、心臓をはじめ臓器の殆どが不気味に波打っている。

「……ナイアルと連絡が取れないだと……」

「いえ……ナイアルから一方通行の伝達は、ミⅡゴ（甲殻類に近い羽根を持った生物）から確認出来ていますが……我からは干渉出来ない状況でございます……」

七色に光るシャボン玉のような身体が無気味に乱反射を繰り返すアザトースの右腕。

「あと一人の所まで来たんだ……！……確実に奴を殺さねばならぬ……未来の一端を見た「代償を逃れし者 シラガミ」をな……」

「ナイアルが起こした。限界大戦で代償（死）を与えられるかと思いましたが……代償を逃れし者のもう一人「アリサ・アーミティツジ」通称「カムナギ」は、始末することに成功しましたが……エイボンの最期の魔術がシラガミを死から守っているかと……」

ヨグの映像記憶にカムナギの最期の姿が映し出される。

剣道の道着を身に付け、左手に居合い用の大きな刀をヨグに向け構えている。

既に、限界大戦で失ったのかヨグの力によって吹き飛んだのか……右腕は肩から先が無くなり、たすきで止血を施していた。

（ヨグ……私ではお前に勝てない……はあ、はあ……代償を受け入れます……だけど、私は師匠を信じています。お前達が仕掛ける「審判の日」という運命を断ち切って下さることを……なぜなら……シラガ



ミ様は、狂気に打ち勝った数少ない人間ですから……お前達とは違います)

口から血を吐き弱々しく吐き捨てるカムナギ  
彼女も成長を重ねて美しくなったが虚ろな表情を隠すかのように道着の中から取り出した骸骨の面をかぶり天を仰いだ……

その顔は、どこか誇らしげだ。

しかし刹那、副王ヨグの残酷な拳が彼女を通り過ぎたあと、カムナギの身体は細胞一つ遺らず消えてしまった。

初めてから「カムナギ」という人物がいなかったかのように……

ヨグの回想が終わったのを確認してアザトースが口を開く

「……やはり、エイボンが邪魔をしているか……大した奴だったな……消されるのを承知の上で我々と取引を持ちかけるとは……だが、それが奴の放った最期の魔術「シラガミ」だった……フン、よく考えたモノだな」

アザトースの不気味な臓器がうねりだし、身の毛もよだつような声を発している。

「引き続き、シラガミの行方を突き止めろ!!そして奴の血族も全て消し去らねばならぬ……絶対に逃がすな……」

「御意……」

ヨグは、次元の扉を開けて何処かに瞬間移動したようだ。

残ったアザトースは、球体の物体を眺めつつ確認するようにつぶやく。

「シラガミには呪いがかけてある……もし、復活していたとしても、じきに身体は動かなくなるだろう……」

アザトースの足元から混沌の闇が包みこんでいく。

これが見た者を破滅に導く盲目の神の能力のほんのヒトカケラである。

\*\*\*\*\*

ボリア邸」

流石、ニホン国の最高権力者の一族と呼ぶに相応しいほどの豪邸。

ゴシック様式の建築

中庭があり高級感溢れる骨董品（家主の趣味であろうか？）が数多く廊下に並べられており、美術館のような振舞いすら感じてしまうほどである。

「いらっしやいませ！！月南様！！」

この屋敷の侍女らしき人達が一様に月南に一礼を交わす。大きな屋敷ともなればお手伝いの一人や二人はいると予想していたが現実には規模を超えて「軍隊」のような定義の方が当てはまる。「荷物をお持ち致しますよ月南様」

「あ、いえ……自分でお持ちします（感化された）」

「そうはなりませんよ。ボリア様がいるから我々人間は、この世で平和に暮らしていけるのでございます。ましてや、ボリア様のお客様ともなれば我々は、誠心誠意おもてなしをしなければなりませんので……」

黒髪のしつかりした女性に諭されるように話をされ、半ば強引に荷物（中身はお弁当）を取られてしまった。

「さあ、コクシキ様はお部屋でお待ちになっております。御案内しますのでこちらへどうぞ」

黒髪の女性は、エントランスにある螺旋階段を上りコクシキの元に月南を案内するべく振り返った。

「は、はい！！お願い致します」

今まで体験したことのない待遇にかなり戸惑いは隠せない。

女性は、月南のそんな様子を見て「クスッ」と笑った。

螺旋階段を上り終え、中央に赤絨毯がしかれている廊下を通り過ぎた辺りだったろうか……

一際大きな絵画に不意に目が止まる。

その絵画は、「黒い尾と三角の耳を有している黒髪の女性が幼い三

人の子供を抱いて穏やかな表情を浮かべている」という様子の絵であつた。

（あれ……絵に描かれている女の人って何処かで見たことあるような……）

月南が足を止めて見入っていると……

「そちらの絵は、現ボリア家当主のヴルム様とヴルム様の御兄弟……そしてヴルム様の母君でございます。聡明なお方であつたと伺つております」

月南は、何回か頷いたような素振りを見せて疑問の箇所について侍女に質問した。

「名前ってわかりますか？もしかしたら私の知っている人物かもしれないので……」

「申し訳ございません。名前は非公表となつておりまして……我々も知らないのです。それに、200年前に起きた限界大戦でお亡くなりになりましたので貴方様の知り合いの方ではないと思います」

黒髪の侍女は、月南に向かって軽くお辞儀をして説明し、終わるとそつと顔を上げた。

黒髪の間から見えるサファイア色の眼で自慢気に絵画を鑑みる。

「……すいません、長々とお話してしまつて御案内の途中で……！！」

黒髪の侍女は、再び月南の方を見て声が途切れてしまった……

先ほどの金髪の好青年の姿ではなく、金髪の髪の高い女性が無言で絵画を見つめていたからだ。

その表情は、悲しみでもあり、懐かしそうであり、諦めたような感情が読み取れてしまうほどのモノだった。

「……した、しました……どうかしました……！！？」

ハッと気がついて目の前に意識を集中させると月南が心配そうに黒髪の侍女の肩を揺らしている。

（さっきのは……一体？）

先ほどの金髪の女性が気になったがそれよりも客人に心配をかけてしまったことに罪悪感を覚えてしまう。「びっくりしましたよ!!」急に遠くを見つめて固まるのですから……何かあったのですか?」「ご心配をお掛けして申し訳ありませんでした……なんでもありませんので……」首を傾げる「?」の疑問符を浮かべる月南をよそに黒髪の侍女は、あることを咄嗟に思い出す。

回想

屋敷のテラスから都市を見守る一人の老人。

厳しい表情なのは、我が身に及ぶ重い責任が彼を動かしているからであろう。

その老人に近づく侍女服姿の歳若い女性が深々と一礼し、「本日からボリア家の侍女となりました」「神崎<sup>かんざき</sup>朱夜<sup>しよや</sup>と申します……誠心誠意ボリア様の役に立てるよう努力したいと思います」

ボリア一族の現当主であるヴルムに挨拶するのは当たり前前の行動であるが彼女は、ある人物の詳細について知りたいという気持ちに正直に従った面もある。

そして……

「あの……」

「エイボン・ボリアについてのことじゃろ……」

「!!!」

朱夜が知リたかった人物は、この国の頂点に立ち国民を未曾有の危機から守りきった伝説の人物「エイボン」であった。

自分達の命を間接的に救って下さった人に関心のいらない人間はいないだろう……しかし、公式の記録を見てもその程度の情報しかない。どのような人格の持ち主であったのかも分からない。「……はい……」

「やはりな……そう畏まるな……ここの国民なら誰もが疑問に思うことじゃ……儂の父「エイボン」のことはな……」

そこまで言うとはヴルムは、話を止めて天を仰いだ。

偉大な父であったエイボンの後ろ姿ばかりを見つめていた自分……

父の思い出は幼少の時しかなかった。

「儂にもよく分からない父であった……子供の頃は、よく遊んでくれたがそれ位の思い出しかない……親父の力は、常軌を遥かに外れていた。知識も身体能力も……儂なんぞ足元にも及ばんくらいにじやな」

「……尊敬してらっしゃるのですね……顔に出てますよ」

誇らしげに父親のことを語るヴルムは、小学生が学校の友人に自慢するように話しをする。

他人にはない事象を父親が持っていて、自分は「息子」という事実が何よりも嬉しかった。

「今日は、興味深い話しをありがとうございました。……益々、どんな御方であったのか……お会いしてみたかったです」

朱夜の頭の中には、ヴルムのように筋肉が隆々とありかなりの強面（ヤクザの親分みたいな感じで）を想像したが……

「会ったら驚くじやろうな……お前とそう変わらん年端にしか見えんし……あの顔は、男よりも女の顔に近い……」

「はい……？」

回想終わり

黒髪の侍女である「神崎朱夜」は、月南の容姿とエイボンの容姿を重ねて見る。ボリア一族の特徴である黄金の髪に細長い耳、深海のように黒の混じった蒼い眼……「まさかね……」といたずらに笑った。

今の自分の想像力（妄想）に感心しながらも勤めを果たすため案内を再開する。

\*\*\*\*\*

コンコン……乾いた木を叩いたかのような音が響き渡る。

「はいよ!! 開いてるぜ」

「失礼します……コクシキ様、月南様がおみえになりました」

「おっ!! 来たか!! 入れ」

コクシキの部屋は、わりとしっかり片付けてあった。きっちりと並べられた歴史小説、妖術等の呪術書（自分が半妖の部類に入るためか……）が本棚に隙間なく入れられてある。

「では、月南様……コクシキ様の失礼にならないよう配慮して下さいね……」

侍女の刺すような視線に身震いを感じた月南。

「さて!! 月南も来たことだし……うーむ、とりあえず「シラガミ」については、一般に出回っている情報とまるっきり同じだった。親父に訊いても要領を得ない答えしかなかったし……解ったのは国家機密に指定されていることぐらいだ」

闇の帝王「シラガミ」

別名「悪魔の頭脳を有する者」

原爆の開発者であり世界を我が物にするため「パンゲア計画」を進めるがボリア一族の創設者「エイボン・ボリア」によって倒される。これが世間に出回っている常識として定着しているがシラガミがどのような人物であったかエイボンがどのようにして倒したのかは公表されていない。

真相は、年月と共に風化し教科書の中で常識（つまり疑問を持つな）として刷り込まれているに至る。

「巷じゃあ……シラガミの生存を警鐘する語り手や実は、二人共存在していない説等が乱雑いわゆるしていてどれが正しいか分からない……まあ、所謂「都市伝説」だな……月南はなんでこの人物について知りたいんだ？」

「えっ!! いや……その……好奇心ですよ!!」

まさか、その噂の人物が自分の中にいる（可能性がある）とは言えるはずもなく茶を濁して逃れようとした。

「好奇心ねえ…時として身を破滅するかもしれないねーから気を付けろよ」

コクシキがシラガミについて調べたメモを机の上に置いてみると……

「……様がお着きになった！！」という声が窓の外から聴こえコクシキは、窓を開けて確認。

「まったく……なんのさわ……げっ！！なんで来てるんだよ！！今日、マジで重要なことでもあるのか！！」

ボリア家の広い敷地内に黒い高級車が二台止まっており、屋敷中の侍女や使用人達が大慌てで車の周りに集まり対応しているのがわかるが……その車に乗っている人物がコクシキの表情が凍り付かせる。

ボリア一族の現当主「ヴルム」の実際の姉弟であったからだ。

すなわち、それぞれの車から降りてくる二人の人物はエイボンの子供であり、この国の政権の中心がこの屋敷に集中したことを言い表わしている。

この三兄妹が定例会議とは別の緊急会議（主に、国際的な大事件等が起きた場合）が開かれるのだ。

その時、月南の中で瞬間を伺っていたシラガミがぴくりとし、鋭い目付きで空を見た。

五月晴れの気持ちよい青空

## 混在(6)、混沌の王と追跡調査「エイボンの謎」(後書き)

オマケ、シェフ溟邏スペシャル

### 料理後半戦

パスタとメイン

料理を作りながら溟邏が料理についての格言を言う

「まあ、料理と言うものは、スポーツに近いモノじゃ……料理を作る方も食べるも」

「お互い我慢の勝負……」

「ムッ!!」

メイン食材を切り分けながら軽く舌打ちをする。

「ところで……いよいよメインと言うことは、今までの「前菜」ということでいいのか？」

「そうじゃぞ!!!これから本番じゃ!!!」

「前菜で2時間半……かなりの長期戦……」

料理開始から3時間経過「もう少しで終わるからの」前々から準備していたパイ生地を伸ばして鯛を包む作業。

「この小説も連載開始から約半年が経過か……はやいもんじやなあ……」

「オレは、この場所に監禁されて3時間が経過したぞ」

「私ですよ……」

「何が言いたいんじゃない!!」

鯛の中に夏野菜を詰める作業

「続いては、ざっくばらんに夏野菜を詰めたいと思う。まずはトマ



トじゃ」

さらに！！

「それとじゃ…シラガミ、魚沼産のお米を少々……」米！？

「それも何…米のまま？」

米のまま……

米のまま……

「これは、オーブンで焼き上げる予定じゃぞ」

「米をか！！？」

「ということ……米達は水分を一切与えられずに焼かれるのか……」  
燐静がこれから取り行われる惨事に警鐘を鳴らす。

「いやそれは……鯛が持っている水分からとって貰うぞ」

「いやいや……」

鯛に米を詰める作業

←

パイ生地の塩分が行き渡るようにオーブンで焼く

（塩釜焼きの要領で）

200℃で30分設定

その間に三品目ね夏野菜のパスタを調理開始

激辛唐辛子（溟邏さんお墨付きの辛さ）

ブロッコリー（あのちっこい）

ブロッコリーを茹でる

大きめの鍋に水を注ぎ沸騰するまで加熱

沸騰したら小指サイズのブロッコリーを入れる。

あっという間に泡の中に消えて沸騰の波に揉まれていく小指サイズのブロッコリー

茹で時間2分

溏羅が菜箸でサッと取り俎板の上に置く

「ブロッコリーがユデアガりました……」

何度みてもブロッコリーには見えないその姿。

先程の沸騰水の中にパスタ投入！！

さらに、フライパンで炒めていた野菜に激辛唐辛子を投入！！

さらに、勢いに乗って三品目、四品目完成！！

次回

試食会&最終回

そして新企画の始動

## 混在（7）、葛藤と子供（前書き）

右肩が亜脱臼のため医者から肩を外してはめることを禁止されました。

ボキボキ禁止令が出されましたが負けずに更新します。

ちなみに一生右肩は自然治癒では治らないそうです。皆さんも関節を外して遊ぶのは止めましょう

## 混在（7）、葛藤と子供

車から出て来た二人は、どうやら男女のようだった。

人材教育最高顧問「カゲタ・ボリア」は、読者の周知の通り、コクシキや月南の通っている白邏高校の校長を勤めている。

そしてもう一人の女性は、左目にグルグルと包帯が巻いてあって屋敷を舐めるように見つめ猫背で前に進んでいる。

理論物理学者及びニホン科学学会会長「ティオン・ボリア」

エイボンの娘で三人兄妹の末っ子として育つ。

かなりの頭脳の持ち主で歴史上頭脳と称される「ネイピア」の再来と言われる程。

金色の足下まで伸ばした髪が日の光で美しく光っていた。

「カゲタお兄様…本当にお父様が生きてらっしゃったのですか？」

「ワシも半信半疑だが…兄貴は嘘をつくような人ではないからな…：お前のその左目で分らないのか？」

カゲタがそう促すとティオンは、左目にかかっている包帯をそっと持ち上げ、呪われた眼を開いた。

真っ赤な月のように真紅の瞳がカメラのレンズが焦点を合わすかのような動きで屋敷を隅から隅まで見回す。

そして、ある二階の一室に焦点を合わせると包帯で左目を隠す。

「見つけましたわ…：この気配は、お父様以外にいませんもの…：いつ見ても自己完結の美しい気配ですわ」

「やはりか…：ますます父さんのことが分からなくなった…：母さんは妖怪で理解できるのだが…父さんの正体が一向に掴めん」

「掴まなくていいのですよお兄様…わたくし達は、まだ無意識下で真価を発揮する「無意識人間」ですから…理解出来ないことは、無理に理解しなくていい…：」

ティオンは、少し長めのスカートを履いて足が露出していたが右足だけ左目の包帯のようにグルグル巻きにされており左足と比べるとかなり細くなっていた。まるで骨に直に巻かれているかの如く。

\*\*\*\*\*

コクシキの部屋へ

「こりゃ……挨拶にいかね……」

コクシキが窓から顔を離れたところで……

「コクううう！！早く来なさい！！」

廊下からかん高い声が響きコクシキを呼びつけた。

「ゲッ！！姉貴もいたんだっけ……悪い！！月南、挨拶に行ってくる」

コクシキは、脱兎の如く服の乱れを直して部屋から飛び出していった。

余程、怖い姉なのだろうか？

あまりの出来事にその場でフリーズする月南だが机に置かれたシラガミに関する資料に目を向ける。

「わ、私の正体は一体……」 自分の立ち回りが分からない程辛いものはない。

誰でも人間という枠にはまって生活をしている……数日前まで自分もその一人だと考えて疑うことはなかった。

だが、精神の中での狂姫とシラガミとの対決を目撃した。狂気という感情に負けそうになった。

人格は、今まで培ってきた経験と知識、その他の事柄の演算の結果が今の人格を造りだしていると私は、考えている。恐ろしい……もしかしたら私の記憶は取り戻……

アレっ……視界がぼやけていく……

月南は、直感した。

ああ、シラガミが出てくるんだ……そうだ、賭けてみよう……もし、シラガミが本当の悪だったら私は、もう目を覚ますことはないのだ……か……ら……

このまま消えた方が楽になれる気がする……ごめんなさい。

その刹那月南の身体は、変貌を遂げ、胸は膨らみ、髪は足下までスラリと伸びていき、全体的に丸みを帯びる形となった。

女シラガミがゆっくりと瞳を開ける。

「オレが悪か……もしかしたらそうかもな……この世を作った神に命を狙われているからな……本当に月南は昔のオレにそっくりだ」  
自分自身も消えたいと再三願っているが実兄エイボンの魔術がそれを許してはくれないのだ。

「兄貴……本当にオレが生き残るべきだったのか？ 兄貴が生きて方がもっと良い世界が出来たと思うが……」

シラガミもまだ十代の頃に一度だけ狂気に吞まれた経験がある。

故郷だった「ハイパーボリア大陸」が外なる神の手によって滅ぼされた後、自分を育ててくれた師匠がいる街を狂気に暴走したシラガミが破壊しようとしてしまった。

その時に生まれた危険な人格が「狂姫」である。

なんとか師匠の手を借りて狂姫を抑えこみ、完全なインストールで人格を消滅させることに成功する。

シラガミは、自身の心の弱さに落胆した。破壊された街で泣き叫ぶ子供達、オレを化け物と呼び恐怖する人々の記憶が今でも苦しみ続ける。

程なくして師匠が止めるのを聞かずに街を飛び出して暫くの放浪の

旅をした。

何百年も渴いた大地を踏みしめて……自分は愚かである……自分は弱い……と考え　そして二度と狂気に負けないと心に誓う……ガキの頃に夢みていたことを犠牲にして……………

こんな弱い心で兄貴の期待に応えることが出来るだろうか？

オレは脳裏にその疑問がよぎる度に足の運びが重くなる。

ガキの時に砂場で遊んだ友達、近所に住んでいた顔見知り程度の人、戦争でオレが殺した戦没者、果ては父と母が地獄の世界へ誘うかのように……

\*\*\*\*\*

「さて、ヴルムの部屋に行かないとな」

シラガミは、部屋を飛び出して息子であるヴルムの元へ行こうと歩みを進めていた。

「さすがに……何百年も出ていたら模様替えするよな……何処だ？」  
ヴルムの部屋が分からずに廊下を歩いたり怪しいと思った部屋を開けてみても違っている事態にため息の一つも出る。

シラガミは、自身で把握出来ないことがあるとストレスを感じて拒絶心（人格保護のための反射的作用。別名、クリティカルエイジ）が働いたため軽くイライラする。焦りがあればなおさらだ。

歩みが自然と早くなって行った。

クソー！まだ月南に対してインストールが完全じゃねーからな……  
月南が反抗の意を固めれば簡単にオレの身体を乗っ取られてしまう  
……多重人格は、危険すぎる）

多重人格は、自分の精神を守る防御作用であるが加減を間違えば身体を乗っ取られる結果にも変わってしまう。

かつて23人の人格を有した「ビリー・ミリガン」も別人格に身体と他の人格の支配権（アーサーとレイゲンが場面によって当意即妙で担当した）を持ってかれて苦しんだ。その様子からも用意に危険性が類推出来るであろう。

まだ肉体の支配権は月南が握っている（精神ではシラガミが辛うじて上回っているためなんとか今の状況を保っている状態）

もし、このまま月南がオレの記憶のインストールを完了せずに人格が固定されてしまったら……

オレは、背筋がヒヤリとする感覚を覚えた。

そうして生まれた人格が「狂姫」であるからだ。

それだけは、避けねばならない……ヴルム達やオレから月南に対して外部からでも記憶の干渉をしないといけないな。

女シラガミが廊下の突き当たりを右に曲がった時

ガァン！！

「きゃあっ！！！」

「うわっ！！！」

シラガミとこの屋敷の侍女らしき茶色ショートカットの髪型をした少女が頭を痛そうに撫でている。

シラガミ自身にはあまりダメージはなく

「大丈夫か……悪いちょっとよそ見をしてた」

「いえ……こちらこそ……ヒエエエエエー！！！！ボ、ボリア様！！！！すいません、すいません！！！」

深々とその場で土下座をするショートカットの侍女。およそ部屋の



シーツ替えを行った後であろうか、二人がぶつかった辺りにシーツがしっちゃんかめっちゃかになってしまっていた。

（ボリア様……？…ああ、そうだヴルム達はそう名乗っていたわけ……）

シラガミは、長い黄金の髪をうざそうに掻き上げつつ「オレは大丈夫だ……仕事大変そうだな」

「いえ！！かなりやり甲斐があります」

「そうか……良かった。ところでヴルムの部屋は何処にあるかわかるか？」

「えっと……ヴルム様のお部屋は……ちょっと待って下さい」

侍女服のポケットから屋敷の見取り図のような物を取り出して真剣な表情で読み解いていく。

新人か？

「ヴルムさまのお部屋は……あ、ありました！！この先の部屋ですね！！！」

「そうか……ありがとうございます」

シラガミは、先に見える廊下を一望し軽く会釈をしてその場を後にした。

「かなりかわいらしい人でしたけど……ボリア家でも見ない人でしたね……はっ！！シーツを片付けないと……！！アレッ！！しっかり片付けてある……？」

ショートカットの侍女の目の前には盛大に散らかっていたシーツがきっちりと角も揃って積み重ねてあった。

「？」

すっかり姿が見えなくなった謎の少女の方を向いて首を傾げる。

すると、ショートカットの侍女の目的の方向に同じ侍女姿の女性がお茶のポットを運びながら

「コラ！！新人さぼってる場合じゃないわよ！！カゲタ様とティオン様がおみえになってるんだから！！！」

「ああ！！すいません先輩！！」小動物かのような動きでシーツを手にとって本来の仕事に移っていった。

\*\*\*\*\*

ヴルム部屋へ

コンコン

部屋の正面に用意されている大きめの扉にノックの音が響く。

「誰じゃ！！？」この部屋は三人で会議をする重要な所だ関係者以外立ち入りを禁じている」

書類に目を通しながら扉の前にいる者を追っ払おうとする立派な髭を生やしたヴルム。

しかし、凜とした若い娘の声で

「父親に見せられない物でも部屋に隠しているのか？」「！！！！！！」

ま、まさか……親父、来る前に連絡してくれて頼んだのに……いや、今はそんな事はどうでもいい……本当に扉の前の人物が自分の父親であるか否かが問題だ。

「疑っているなヴルム……なら、オレの能力を使って扉でもぶち破ろうか！？」「髑」

「だああああ！！わかったわかった！！親父やめろ！！」

「髑<sup>ドク</sup>」という単語に聞き覚えのあるヴルムは、全身の血の気が引く思いをして慌て扉を開けた。

髑……シラガミの能力の二大兵器の一角。

幼少期のヴルムは、父親であるシラガミがこの兵器を携えて単体で要塞大国を一夜で潰してきたのを目撃してしまい軽くトラウマになっ

てしまっている。

ガチャッ！！

扉を開けた先にいたのは、自分の曾孫とそう変わらない姿で可憐な女の子になってしまっている父親であった。息子のヴルムの方が身長が高くシラガミを見上げる形となっている。

「本当に女になってる……親父……話題がつきねえな」

「久方ぶりの父だぞ……うーん……随分でかくなったな。いっちょまえに髭なんぞ生やしやがって」

輪廻学（肉体の時間経過を緩やかにする学問。詳細は未だ未解明）を修めているため髭があまり生えないシラガミは、少し悔しげにヴルムを見る。

「さて……ヴルム……あの時の話に戻るが……あの作戦はどういうことだ？」

あの作戦とは？

シラガミがヴルムと連絡を取った際に「屋敷に来る前に連絡をシラガミと気づかれないために取ろうと考えていた作戦。

その名も「掛けてきたのは愛人だぜ！！作戦」

シラガミが女になっているので都合が良いがシラガミの演技力も要求される。

成功例の会話

ヴルム「やあ、エリザベスどうしたんだい！！そんなにワシに会いたいのかい？」

シラガミ「やあーん……ヴルヴル（↑？）渋ーい♪また、二人つきりで会いたいな」

ヴルム「ハハ、午後なら仕事も一段落するから来てもよいよ。それと、君が欲しがっていたバッグをプレゼントしようじゃないか」

シラガミ「やったー♪ヴルヴル愛してる（ハート）。また、あとでね」

例終了（シラガミのキャラが定まっていなかったが…）

「キサマ！！父親に電話であんなセリフを言わせるつもりだったのか！！」

「待て……親父！！ハートは打ち合わせになか……」

「黙れ…オレが性根を叩き直してやるわ！！ったく、暫く見ない内に生意気になりやがって」

軽々とシラガミの細い片腕がヴルムの胸元をガシッと掴み持ち上げる。

しかし、シラガミの最後の一言がヴルムの思いを奮い立たせた。

「なんだ！！限界大戦の時に勝手にいなくなったのは、親父じゃないか！！ワシ…いや、俺達兄妹がどれ程苦労したと思ってんだよ！！」

シラガミの握りしめていた腕の手首の部分をヴルムは掴んで一気にシラガミを押し倒し、馬乗りになるような体勢となった。

ヴルムの意見も一理あると言わんばかりに無抵抗のシラガミが黙ってヴルムを見る。

「はあ、はあ…わかったかよ！！親父」

言っている内容は、自立した子供のようであったが内心は、かなりビクビクしている。

（スゲー怖い……親父に反抗したの初めてだ）

相手は、この国をつくり上げ、一人で世界を破壊する能力ちからを有する人間である。

ヴルムの声が若干震える。

「………それに関してはずまないと思っている………だが、お前がオレに勝てると本気で思っているのか？」シラガミは、華奢な身体からは想像もできない程の力で馬乗りになっているヴルムを徐々に押し返そうとしている。

「しまった………この先のことは全然考えてなかった………まだ、俺は親父に勝てないのか（汗）……」

シラガミは、立派になった息子へいたずらに笑みを浮かべて遙か昔のことを思い出した。

(……おとうしゃん、行っちゃやだ!！)

幼いヴルムが戦争に向かうシラガミの足下にしがみついて引き止めている映像が流れる。

(……心配しねーように夜中に出発しようとしたのに起きてきてオレを引き留めていたアイツが……オレに反抗するようになったか)あゝの頃は、荒れていた

シラガミが小さな弱小国であった「ニホン」を立ち上げた頃である。貧富の差が拡大し貴族が富を独占して貧しい民は、今日を生き残るのに必死だったのに貴族の都合で戦争に駆り出される……民は貴族の奴隷であった。

シラガミは、そんな常識を壊すために貴族にたった一人で戦い世界を変えた。

重ねていたのだろうか？

自分の故郷が万物の王である「外なる神」達の手によって消滅してしまった所と攻め込まれれば明日にも地図から名称が消えてしまう人口僅か50人の小さな国とを……

そんな弱小国を現在引っ張っているのが息子であることが誇りになった。

親の欲目でも構わない。

人として著しく逸脱した存在であり、ここにいてはいけない命であることも認める。

ただ……親になって子供が将来の夢を語る所を見たかった……時には反抗し喧嘩して……子供のことで悩んで

そんな子供が一人で歩き出していき人生の伴侶を見つけて孫を授か

る。

その頃には、オレもジジイとなって一線から身を引く。若い世代は、ようわからんと言っても顔は誇らしげで家族を見守り……そして静かに世界から消えていく。

（オレの将来の夢は、おじいちゃんになることだ!!）オレがガキの頃に親に言った将来の夢だった……

だが…オレには夢を持つことが許されなかった。

審判の日に人類を守るために最強の神に戦いを挑まなければならぬ  
いからだ……

だから……今だけは「親」として「祖父」として胸を張らせて欲しい……

「……どうしたんだ親父？さっきから黙ってて」

未だに馬乗りの体勢のままにあるヴルムが訊く。

「……あっ…悪い少し考え事をしていた…じゃあ、そろそろ降りてくれ」

と言ったその時

ガチャッ!!

ヴルムの部屋の扉が開いてシラガミの子供であるカゲタとティオンが部屋の中を覗いた。

「」「あっ!……」」

## 混在（7）、葛藤と子供（後書き）

オマケ シェフ溟邏スペシャル 最終回

### 最後の晚餐

料理開始から4時間経過し溟邏の作った料理を燐靜とシラガミで試食する。

### 三品目

夏野菜と鯛のパスタ

「で…でかい…」

器に並々と注がれたパスタを前に燐靜が臆する。

「では、どうぞじゃー!!」

### 試食

パスタなのでフォークでクルクル巻き取る。

シラガミが巻き取ったパスタを口に運ぶと

「か、辛い!! なんだこれ!？」唐辛子が多かったらしい

「麺の固さはどうじゃ？」

「丁度いい…けど辛い」

燐靜が舌を出して外気で冷やす。

### 結果

パスタは激辛でした。

「お前ちよっと食ってみろ!!」

「なんじゃ……わらわが作ったモノが不味いわけは……辛!! なん

じゃこれ!!」

「わかったか…」

本人も認める辛さでした。

溟邏が四品目を取りに行くため台所へと姿を消した。

「スパゲッティが出てくるまで4時間……」

「酷い仕打ちだ……作者はこの企画はある程度、本編でキャラが出てくるまでの時間稼ぎらしいが…キツイ!!」

軽く監禁に近い状況では愚痴も出る

#### 四品目

夏野菜の料理　びっくりカルツォーネ風

(青トマトと米を詰めた鯛のパイ包み)

あの鯛から水分とれバカモノと言わんばかりに詰められた米が入っているが……

米は、見た感じでは大丈夫そうであった。

まずは鯛から試食

シラガミが切った鯛を口に入れると拍子抜けの顔をして溟邏に向けてうなづく。

旨かったらしい…

「やったああああー!!!!どうじゃ!!」

鯛は美味しい。

続いて青トマトと米を試食シラガミが料理を口に運ぶ

「ああ……」と言って溟邏の口まで料理を運んで食べさせる

「おおおう……」

謎の同調効果…

「これは、不味い!!」

「……鯛で終わっておけば……残念」

野菜と米は不味い!!



「というわけで……2ヶ月かかった世界一長い料理番組が終わりました……」

「なんとも微妙な戦績じゃな……」

「結局、あまり手を加えてない鯛や野菜の方が旨いという結果だったな」

シェフ 溟邏 スペシャル

完

次回は、幻神月花のちょっとしたオマケや解説等を載っけていきたいと考えてます。

## 混在（8）、不確かな存在（前書き）

最近の失敗

食品の買い出しをするためスーパーマーケットに行った所、「出口専用」から堂々と入場してしまったこと。  
地味に恥ずかしい

## 混在（8）、不確かな存在

ボリア邸から少し離れた株式会社の屋上へ

ナイアルの側で常に不気味な七色を乱反射させている万華鏡の月が光々と輝いている。

そこに絶対条件のようにいる変幻自在の外なる神の一角と判明した赤いワンピースを来た若い女性姿のナイアルが真っ直ぐシラガミがいるボリア邸を見つめていた。

「ふっ……倅<sup>せがれ</sup>に会いましたかシラガミ……まあ、私の目的に支障はないでしょう……！！おっと……」

ナイアルは目を見開いて後ろの方を向き、すぐ様その場から瞬間移動で別の場所に跳ぶ。

ついた所は、何処かの山奥らしい……ナイアルはトンッ！！と地面着地して空間に突如として出現した穴を見つめる。

空間の穴から出てきたのは「隠れ棲むもの」という異名を持つ羽根を生やした大きな蟲のような生命体であった。

「定時連絡だ……ナイアルラトホテップ……シラガミは見つかったか？」

機械音のような奇怪な声でナイアルに問いかける。

「ミィゴですか……ヨグ・ソトースの伝令役が御苦勞様です」

ミィゴは、宇宙空間を自由自在に飛び回る羽根を持ち手にもっている缶詰の形をした物体に人間の脳を入れ宇宙旅行をさせることが出来る性質がある。

今は、ミィゴが信仰しているアザトースの右腕であるヨグ・ソトースの思考が詰まっているようだ。

審判の日についての情報を見てしまったエイボンの家族であるシラガミを処刑するべくシラガミの行方を捜している外なる神。

勿論、その神に所属しているナイアルも先程、見つけたシラガミの

状況を話すかと思ったが……

「いえ……まだ見付かっておりません……もう、死んだのではないでしょうか……」

何故かシラガミの場所を言わないナイアル。

不気味に耳まで裂けた口で静かに笑う。

それに対してヨグの思考は「真面目に捜しているのか!! あれが死ぬはずがないだろ!! あのエイボンの魔術がシラガミを不死にしているだから……いいか、審判の日は近い……それまでにシラガミを始末しなければならぬ!! 円滑に進めなければならぬ!!」

「それはもう、百も承知でございますよ……ヨグ様……その日までには確実に特定します……」

「肝に銘じておけよ!!……」

ヨグの思考を持っているミⅡゴが再び空間の穴に入ろうとした時、ふと気付いたようにヨグが話しかける。

「時々、通信が取れない時があるが何かしているのか?」

「いえ……そうでしたかな? まあ、私にもプライベートの時間が欲しいですし……様々な物体になるためにも観察が必要になってきますから」

道化師のような格好になりその場で玉乗りをするナイアル。

「そうか……」

ミⅡゴは、コウモリのような羽根で空間の穴へ吸い込まれるように消えていき、雫が垂れたように空間が揺らいで穴が消失する。

それを見送ったナイアルは道化師の格好から再び赤いワンピース姿の若い女性に容姿を変形させた。

「アザトース如きに私の邪魔はさせませんよ……それにまだヨグを記入出来ないなんて……少しショックです……」

ナイアルの眼がカメラのレンズのように収縮しながら自分の右手を見てつぶやく。

「これでは……エイボンの書が手に入らない……私の目的のために必要

な代物であるが……それにエイボンの書を管理しているのはシラガミよりも厄介な奴……悪魔の頭脳「ネイピア」なんとかして引きずり出さないといけないですね……」

まさか……時間稼ぎのために山賊の首領に変化してシラガミの心臓を貫いたのが間違いだったとは……

だが……こっちには黒い賢者の「リッチ」がいますからねやり方はいくらかもある……

ワンピース姿の女性は、大きな木に足を掛けて身を翻し青空に躍り出た。

逆さまに飛び上がったので上が地面、下には球形の空が眼下に広がっている。

「さあ、世界の観察でもして記入しておきましょういかね!!! ぎゃっははは」

ナイアルは、蒼と漆黒の入り交じった雫のような姿に変形して身体より上にある地面に溶け込むように消えてしまった。

ナイアルという存在が消えた瞬間に万華鏡の月が透き通っていき消失した。

今の所……シラガミやこの世界に外なる神からの干渉がないのは、ナイアルのおかげであるが……実際の目的は遠い霧の中にあるようだ。

「フンッ!!……このままで済むと思うでないぞナイアルめ。シラガミの恐ろしさをそのふざけた身体に刻みこんでやるわ」

消えて行ったナイアルと万華鏡の月を林檎をかじりながら溟邏が木の枝に座って呟いた。

そして芯だけになった林檎を投げ捨てると枝から枝へ四足歩行のよきな格好で高速に移動していき、都市へと帰って行く。

そして溟邏の驚異的な嗅覚は、自身の敬愛するシラガミの匂いをはつきりと捉えていた。

「ん……何故にシラガミが出てきておるのじゃ？…いや、少々面白くなっているかもしれんな」

溟邏の華奢な足が地面を力強く蹴って忍者のように山奥から姿を消した。

ピョコッ！と出ている三角形の耳に引っ掛けてあった骸骨の面を自分の顔に付けて……

そしてナイアルと溟邏がいなくなり静寂を取り戻した山奥に……それは静かに姿を現した。

「……残念、なかなか用心深い奴だ……俺の不確かな気配を察知して歪み世界に入るとは……」

全身を黒のマントで固め、肩には厚手の装甲があり容易には身体に傷つけるのが困難なことがうかがえる。頭はフードでスッポリ覆っていて顔の部分には溟邏の持っている骸骨面が付けられていた。

「目的達成のための実力が足りないと判断したら無駄な行動を取らない。大した分析能力だ……」そして、フードをかぶった不確かな存在は、意味深な疑問を投げ掛ける

「お前は誰だ？……」

黒いマントを翻してナイアルの後を追うように砂塵をちりばめながら自身の身体を粉々に砕いて砂塵と混じり合うようにしてその場から脱却する。

ナイアルと溟邏の後に出てきた不確かな存在……圧倒的かつ純粹たる闇の波動が辺り一帯を貫いて植物が枯れて粉々に砕かれた。



はない。

真槌家は、ニホン国創設者であるエイボンの一番弟子である「神南テイジン」の末裔である為に大いに喜んだが、当の本人は、自身の才能が鬱陶しくてしょうがなかった。

一族の代表としてボリア一族の側近と成ることを幼少の頃から言い訊かされて巫女としての修行と広い見聞のために膨大な本を読まされてきた。

自由はなく、普通の子と同じように遊ぶことも許されていない生活。

いつしか感情がなくなったかのように無表情が当たり前になり話す回数も次第に減っていった。

膨大な本を読破したため大抵の問題には、見ただけで頭に反射的に浮かんでくるようになってしまい、自分はこの世の全てを理解したのだとい錯覚を起こしてしまった。

知識欲が無くなった人間は進化が止まってしまう。

そして、自分の世界に没入した人間は「狂人」となり順応性が無くなる。

自分の世界が正しい世界であるという偏った思考が新しい情報を遮断して、反対する者には殺してでも自分が正しいことを証明する。

その果てに待っているのは破滅しか残されていないことは明白であろう。

憐静は、苦しくもその道を歩み出していた。

先祖から貰った魔力で自分が納得出来るまで暴れ回りたいと考えていたからだ。

「……この世界はつまらない……」

狭い世界で生きてはきてみたが、この世界の未来に自分の想像を超えるようなイベントは起きないと考えている。



所詮、機知なる世界

戦争があるから平和を創ろうではない  
平和があるから戦争が起きるのだ。

平和ボケした人間が傲慢になり自分の欲しい領土を奪い合うといっ  
たことが戦争へと発展するのだ。

自分の命が完全に安全な環境に置かれていれば、人間は命を守ろう  
という輩もいない……大抵、力の誇示と自慢だ。

みろよ…俺のケーキの方が大きいぜ!!

アイツってエツタらしいよ

エツタ……日本における身分制度の一つ  
最も下の身分だとされていて「えた・非人」と歴史の教科書に出て  
くる言葉で有名であるが…現在でも差別されている。

私はブランド品が買える位の上流階級なのよ!!

自分はエリートだ!!

……憐静はうんざりしていた。「せっかくエイボン様が人々に平和  
を与えるために長年苦勞してここまでもってきたのに…」と考えて  
いたからだ。

人々はそんなことよりも、どうやって人よりも優位に立つことばか  
りに策を労する。

それならいっそのこと私が平和を壊してやろうか!!  
何が一番大切かを教えてやる……

自分の力を試すいい機会になりそうだし……

燐靜は、そんな考えに陶醉し狂気に身を委ねようとしていた。

しかし……それは、圧倒的な存在感と共に燐靜の脳裏に言葉を発した。

（子供にしては……深く考えているな……だが、甘い）  
「！！！！？」

燐靜は頭を押さえて辺りを伺うが、ただ鬱蒼と木が生い茂っている風景しかなかった。

（うーん……ちよつとマズい思考回路になってるからオレの世界に来て貰うぞ……）

「え……！！？」

燐靜の半分しか開いていなかった眼が情報を多く捉えようと大きく開くが気が付くと靄の立ち込める空間に飛ばされていた。

\*\*\*\*\*

謎の空間へ

燐靜は、警戒心を剥き出しにしながら辺りをキョロキョロとしていると……

「すまないな……少々立て込んでいて、ごちゃごちゃしているが……君と話しをするのに支障はない」

靄の中から歩いて現れたのは、金色の髪に深海を思わせる蒼き眼。

細長い耳

そして、服装は自分と同じ巫女服を着た美女である。

「君の服のデータを使わせて貰った……精神世界での服装として使わせて貰うぞ……」

目の前に現れた美女が巫女姿をゆっくりと確認して妖麗な笑みを浮かべて燐靜を見る。

「誰だ…？」

「オレは、この世界を長い期間見てきた者…：造り上げた者…：そして、君が先程言っていた「エイボン」という名も持っている者だ…：」

「……………」

あまりに突然の出来事に固まる燐靜だが巫女姿の美女はさらに話しを続けた。

「…：君の考えは、極論ではあるが正しい…：だが、この世界を形成しているのは人間の集団だ…：君一人の意見では動かすことは出来ない…：それでは一介の変人で終わってしまうな」

神から貰った才能な特質的な能力を自分の利己的な精神の実現のために行使してしまえば、「変わり者」として処理されて歴史から忘却してしまう。

まるで全てを見透かすかのような落ち付いた言動だがその陰には、自身の壮絶な体験からしか生まれない特有の説得力があった。

「…：お前には関係ない…：私が正しいのだから…：何が悪い…：私の能力は誰にも束縛されない…：」

「うーん…：いきなり見知らぬ人からこんな話をされてもダメか…：ならこんな原則でどうかな？」

巫女姿の美女が目付きをガラリと鋭く尖らせて燐靜に殺気を込めて威嚇をする。

靄が美女の殺気で凍り付いたかのように消えてなくなり、突風のような殺気が燐靜を貫いた。

「…：はあ、はあ…：」ガタガタ…：

寒気が生じたのか両腕を擦って体温を確保しようと無意識に行動する。

「強者の理だ……簡単に言えば強い奴が正しいという原理……元来より戦いに正義だの悪だのの定義は存在しない……勝った奴が正義……敗者が悪という位置付けになる」

未だに美女の鋭い殺気が続いており、燐靜は動くことすらままならない。

「今は、オレが世界を統べているようなもんだ……どうしても自分が正しいと自負するならばオレを倒してみろ……！……その状況では無理そうだな……オレの軽めの殺気で呼吸がままなくなるようなら……」

殺気の入った瞳を閉じて通常の状態へと移行していき燐靜は、呼吸を噛み締めるようにゆっくりとし始める。

「はあ……はあ……あなたは何者……？……私の先祖の能力を遥かに超えている……」

天才と謳われた燐靜の先祖「神南備」の魔力を目の前の美女は軽々と超えてしまっていたのだ。

「……オレの名は、シラガミ……お前の先祖の師匠をしていたからな……」

\*\*\*\*\*

霊山

気が付くと目の前の光景が雨の降りしきる山道へと変わっていた。

（……あの女の人は……？）

広い見聞を有し気高き誠の力を持った人。

そして、先祖を弟子として天才まで育て上げた実績……全てにおいて自分が弱い存在であること自覚したと同時に自分もあの高みに登りたいという憧れに似た感情を持ってしまった。

その時、自分がいる場所から少し離れた所に金髪の少年が倒れているのを発見した。

長い間、山中を彷徨っていたのか泥だらけになり綺麗な金色の髪は、すっかりくすんでしまっている。

「大丈夫…?」

金髪の少年は、ゆっくりと顔を上げて燐靜の顔を信じられないといった感じで見た。

自分は、何者か分からない中で山を彷徨い体力の限界の所を発見されたのだ。

「あ…あ…」

燐靜は、少年の顔を見て驚いた……

謎の空間で凄まじい魔力を持ち、人間としての生き方について諭してくれた美女「シラガミ」にそっくりだったからだ。

発見した夜は満月が綺麗な真円を描いて神南備にかかるような神秘的な光景が広がっていた。

少年の名前は、美女の神秘的な力を象徴して「月南」と名付けられて記憶を失っていても真っ直ぐ生きている。

## 混在（8）、不確かな存在（後書き）

教えてシラガミ先生！！

このコーナーでは、わかりにくい世界観である「クトゥルフ神話」について解説したいと思います。

実は、作者の友人もこの小説を読んで下さっているのですが「クトゥルフ神話って何？」という質問が出てきたのでこのコーナーを開設しました。

それでは、シラガミ先生お願いします。

シラガミ「唐突だな……まあ、いつか……クトゥルフ神話とは、人間が無知の領域に対しての恐怖をまとめた物語となる」

クトゥルフ神話……人間の踏み入ることの出来ない場所で気の遠くなる程の歳月を過ごしたモノが何かの拍子に人類と接触し、その運命を狂わせていく。

それは、邪悪な神々が世界を支配すると暗示している。これが大まかな概要である。

神々は全部で三種の神格に分けられている。

幻神月花の世界にも登場するので準える（なぞらえる）と……

「外なる神」……神話でも最強に近い知能を有している存在。小説の中では、シラガミの命を執拗に狙っている神の集団。

「旧支配者」……神話では海底深く等に封印されていて復活を目論む存在。

小説では、シラガミに対して友好的であり味方でも取れる行動を示している。

「旧き神」……神話では旧支配者と敵対する善なる神という見方がある。

小説では、まだ出てきていない存在……敵としてか味方として出てくるかは今後の展開で明らかになる。

シラガミ「つと言った感じかな……神話の触り部分だから深く知りたい者は、書店で資料があるので読んでもらいたい……ただしある程度、精神力が試されるから気を付けてくれよな」

## 混在（9）、闇なる記憶（前書き）

何かとやけどをします。

熱つつ熱のフライパンを右手で触れてしまい人差し指をやけど。

実家の薪ストーブに薪を入れていた時にうっかり鉄の部分を掴んで左手の薬指と小指をやけど……高校時代にアルコール消毒したビーカーをアルコールが乾いていないのに手に持ちバーナーであぶって左手炎上……呪われていませんよね（ただの不注意）



## 混在（9）、闇なる記憶

燐靜達は、先程の時計店を後にして屋上スペースに移動し赤色のベンチに腰かけていた。

「ほんまかいな！？さっきの話ちゅうもんは！？」

「本当……嘘偽りなし……だから私は月南が興味深い……」

「にしても……シラガミなんて……歴史の教科書で散々出てきたからよう覚えとるわ……大犯罪者やし」

皐月が自動販売機から買ってきたコーラを開けて一口飲む。

一般的な教科書や史実を読んでみてもシラガミの名前が数多く出てきており小学生でも習うものであったが……

「あの……ちよつといい？さっきから会話に出てきてる「しらがみ」って誰ずら？」

奏が申し訳なさそうに手を上げて二人に聞いた。

「！！！！……なんやて！！シラガミを知らんのかいな！？この間の授業でも出てきたやろ！！」

「奏は歴史が苦手……いつも授業は寝てる……だから赤点ギリギリ……」

「ううう……だって……」

もはや歴史に対しての知識が鎖国状態の奏。

歴史学の先生である海塚の苦勞が滲み出ている。

一段と落ち込む奏に皐月が頭に手を当てて小さな溜め息を吐いた。

「ええか！！シラガミっちゅうのはな……この世界をひっくり返そうとした革命家や！！そんでこの国の建国者であるエイボンと死闘を繰り広げて死んだ奴や……アレッ！？燐靜、さっき話しに出てきたシラガミって女だったんか？」

燐靜は、コクンとうなずいた。

「待てや……伝説や本には男のような描写で書かれておったし……それに気になるのは謎の編入生である月南のことや……」

「月南とシラガミは瓜二つ……」

次第に浮上する謎と月南の真実……日常を営む一般人が決して疑問に思っ  
てはいけない事柄について論を固める二人。

さすがシラガミの次男であるカゲタが校長を務める学校に通っている  
ことだけはある。

「そっかああ!! わかったぞらよ!! しらがみという人は月南の実  
の親なんだよ!! だから似てるぞら」

いきなり目を輝かせて二人に向かって指を差す。

あまりの出来事に驚く二人だが、すぐさま憐静が反駁を言う。  
はんぱく

「シラガミは200年前に亡くなったから時間軸が合わない……」

「ちっち……違うぞらよ! しらがみは元々は地球に進行してきた宇宙  
人なのよ」

奏の想像のエイボンとシラガミの死闘

「くうう!! 地球人め!! 何処までも俺の邪魔をしやがって」

「オメーみてえな強え奴初めてだ! オラ、ワクワクすっぞ!!」

何故か某有名な戦闘漫画のような髪型のエイボンが緑色の宇宙人を  
追い詰めている。

「行くぞ!! オラの最後の攻撃だ!!」「か〇はめ波」!!」

ツンツンヘアーのエイボンが右腕から蒼白い光線を緑色の宇宙人目  
にかけて発射した。

「な、なにいい!! まさか!!」

そのまま光線はシラガミの胴体を突き破り、空に消えていった。

上空に投げ出されたシラガミは最後の力を振り絞って口から大きな  
卵を吐き出して地上に産み落とす。

「はあ、はあ……父(母?)の仇をとってくれよ息子よ」そして緑  
色の宇宙人が細胞の軋みのように小規模な爆発をして消滅してしま  
った。

想像終了」

「というわけで月南は、なんと卵から産まれた宇宙人なのでした」  
自身満々に語るが二人の反応は冷たい

「……………」

「……………なんやそれ？完全にピ○コロ大魔王やないか…」

「そう！！まさかあの戦闘漫画がそのまま未来を暗示していたなんて信じられない！！」

奏が拳を握りしめてその場でシャドーボクシングを開始した。

「月南……緑色じゃないし気味の悪い触角もない……」

最もな理論である。

第一そんな仮説が通ってしまったら世界がまるっきり変わってしまう。

エイボンもあの戦闘民族になってるし……

「あくまで仮説すら……こうなったらとことん正体を突き止めたいね！！しらがみと月南の関係についても！！」 「そやな……とりあえずピ○コロは置いて、ボリア一族の出現の秘密も掴めるかもしれない……金儲けにも繋がりそうやな！！！！」

限界大戦が終戦した後で突如としてニホンのリーダーとなったのが「ボリア一族」であった。

限界大戦開戦前は、全くと言っていいほど歴史の中に名前が登場せず。戦争が終わった後に出てきたのだ。

まるでニホン政府が矛盾を隠すために「造った」ような印象を受ける。

しかし、その一族が平和をもたらしているとなれば気にかかる国民も口を閉ざして日常生活を営むことは、決して不自然なことではない。

真っ向からそのことを言う者は、都市伝説やUFOレベルの話とし

て片付けられてしまう。

皐月も気になってはいたがまるで本能的に疑問に思っただけのことだし、気になってもいけないと解釈していた。

「それにな!! 月南って記憶喪失らしいやん!! シラガミのことは関係しているみたいやから、調べていけば月南の記憶も戻るかもしれないし……」

「うん……私もシラガミについて知りたい……私の先祖の師匠らしいし……」

「じゃあ決定!! これから「しらがみ調査隊」として情報を集めてみよう!!」

こうしてニホン政府が握っている秘密に対して調査をしてみようと言う子供のような発想で始まった「シラガミ調査」

この活動が今後とんでもない真相につながることは、まだ知らない。

\*\*\*\*\*

シラガミ調査隊が結成されたと知らないシラガミは、美しい少女のような姿で実の息子であるヴルムと取っ組み合いをしていた。

シラガミが下敷きとなっているが筋肉質であるヴルムの重さを感じていないみたいに涼しい顔をしている。

そんな状況の中でヴルムの弟カゲタと妹のティオンが部屋に入ってきたから大変な誤解を生んでしまう。

「「「あっ!!」」」

シラガミを除く三名がすっとんきょうな声を上げて沈黙してしまった。

それもそうであろう……白昼ではあるが男が女の上に乗っていれば必然的に……

「失礼しました……兄さん……女遊びもほどほどに……」

「ねえ！！呼び出したのって女を紹介したいがための方便だったの？」

（しっ……とりあえず部屋を出よう……）

ヒソヒソと話しをしながら半開きになった扉を閉めて立ち去ろうとする兄妹。

そこへ転げ回るかのようにヴルムがシラガミから離れていき二人に弁解の声をかけた。

「ば！！バカ！！違う……待てよ！！」

「いいよ兄さん……見なかったことにしておくから……ハハハッ……」

カゲタが不自然な笑みを浮かべてヴルムに向けて軽く手を振る。

しかし、同じ兄妹とは思えない程若々しくボリア一族でも洞察力が優れている末っ子の妹ティオンは、左目に巻かれている包帯をグイッと持ち上げた。

カッと開いた瞳は、普通の眼ではなく、紅く焦点が定まっていないかのように微妙な振動をしていた。

「やっぱり……お久しぶりです。お父様……」

ティオンが目の前に突如として現れた人物に向けて優雅に会釈をした。

その言葉に反応したのは残りの兄弟。

ヴルムは、もう一度部屋の中を確認するが裳抜けの殻だったため眼を開いて驚いてしまう。

い……いつのまに……

三兄弟がいる廊下の窓側に腰掛けるようにシラガミが肘をついてイタズラな笑みを浮かべた。

髪は、日の光と間違える程の明るい金で深海を思わせる蒼き双眸そうぼうと病的にまでの白皙はくせきを有した可憐な女性に思わずハッと息を呑んでし

まった。

「久しぶりだな…カゲタ…ティオン…元気そうで何よりだ…」

透き通った結晶のような声であったが幼少期より聴いてきた父親の口調であった。

三度<sup>みたび</sup>ヴルムの部屋に戻り詳しく話を訊くことにした。

ヴルムとカゲタは真剣に聴くためであろうかシラガミをグルリと囲むように立っていて、ティオンは先程シートが回収されたベッドの上でクタク！と伸びをして寝転がっている。

伸びをしているが骨格が少しおかしいらしく所々皮膚にボコツと骨が隆起しているのがわかる。

シラガミは、ヴルムの机に腕を組んで寄りかかっていた。

「まさか！…父さんが生きているなんて…」

「ハハッ…流石に200年も経てば息子も老けるか…だが、ティオンは昔のままだな…暗黒書物の呪いによって…すまなかった」

シラガミと家族が一緒に暮らしていた時にまだ幼さなかったティオンが父親の書斎から暗黒書物を偶然見つけてしまい見てしまった。そのため見た左目は、呪われてしまい奇妙な運動をする瞳になってしまった。

また、包帯をグルグルに巻いている足には、肉がなく直に骨が露出しているため包帯で人目に触れるのを避け、さらに身体全体の骨格も変形してしまったのだ。

「気にしてませんよ…私の自己責任ですから…この眼のおかげで研究もはかどっていますよ…」

うつ伏せになったまま右腕を身体に対して垂直に立ててその場でクルクルとネジのように廻した。（通常の人間の骨格では不可能な動き）

「それにしても親父の身体は、どうなってるんだよ…原爆を直接食らっているのに…」

改めて父親の不可思議な身体に興味を示すヴルム。

限界大戦の最中にナイアルの放った最凶兵器のウラン爆弾をその身を犠牲にしてニホン国を守ったシラガミ……だが、若かりし頃のヴルム達が見た現実とは、核分裂の膨大なエネルギーと波長が鋭利な刃物と化したガンマ線によってズタズタに引き裂かれたシラガミが血の海に横たわる光景だった。

既に呼吸も止まり、心臓すら原型を留めていない状況にかなりのショックを受けた記憶がある。

何時如何なる場合において我々半人前の人類を導いてきたシラガミ（父親）……ナイアルが唆した（そそのかした）人間の手によって倒れたのだ。

シラガミを慕っていた溟邏は激昂して本来の大妖怪の姿に戻り力の限り暴れ回るが……神南備がギリギリの精神状態で自分が正しいと思える行動、つまり人間を守るために溟邏と戦った。「キサマ!! 邪魔をするな!! この恩知らずのバカモノ共に血の制裁を加えてやりわ!!」

「ダメです!! 溟邏さん!! そんなことをしても何も変わりません……シラガミ様……師匠が喜ぶはずがありません!!」

その後、神南備の決死の封印により溟邏の復讐が凶行されることがなくなり、封印を施した神南備は外なる神のNo. 2である「ヨグ・ソトース」によって亡くなったのは記述した通りである。

そんなことがあったにも関わらず当の本人は、女の姿ではあるが何処にも異常がなくピンピンしているのだから驚きだ。

「俺も父さんの身体が気になります」

「私も……唯一この呪眼で内部に秘められているお父様の身体能力について知ることが出来ていないから……」

ティオンの呪われた眼は、ありとあらゆる事柄や事象についての情報を見透かすが、自分の父親についてエネルギーが足らないのか分析が出来ていなかった。

子供ならば誰もが抱く素朴な疑問であるがシラガミは、険しい表情となり「知らなくていい……あんな記憶なんざ消えてしまった方がマシだ」と言って拗ねた（すねた）子供のように肘について外を鑑みる。

シラガミは、自信の武術の師匠以外には絶対に自分の生い立ちや幼少期のことは話していなかった。

それだけシラガミにとって恐ろしく冷たい出来事だったことなのだろうか……

事実、シラガミの幼少期を知ったシラガミの師匠は、吐き気が1週間止まらず、その間の練習が出来なかったという伝説がある程である。

強靱な肉体と精神力を誇った師匠でさえも耐えるのがやっとだったのに子供達がそれに耐えるのは至難なことであり、最悪発狂してしまう……

そんなことでシラガミは、封じ込めている。

前に話した、シラガミの発狂も直接的には、この負の経験が元となり「狂姫」が誕生したのだ」

暫く外を眺めてやっと絞りだした答えは

「不死だから……オレには死ぬ権利が剥奪されてんだよ……」

シラガミの重たい発言に思わず絶句する三人。

普段ならジョークとして笑い飛ばすことが出来るのだろうか限界大戦の父親の絶望的な状態を見ていた子供達は、本物だと悟る他なかった。

世界を得るならば

世界に相当する闇を

体感しなければならぬ

自分が自分でなくなる最大の恐怖、未知なる恐怖、逃げられない恐怖。



その全ての闇がシラガミに襲い掛かっているが家族をつくり、不器用なりにニホン国のリーダーとしての役目を果たした。

それは大いなる絶望とプレッシャーに対抗できる程の光を彼は見る  
ことができたからなのだろう。

全ての人間に負の部分があるし、それが無い人間なんていないであろう。

だけど、生きる目的や自分が暮らしていく世界について真剣に考え  
て一歩ずつ前に進んでいく「てんてきせんせき点滴穿石」の精神で取り組みれば自ずと  
道は開けるのだろう。

そんなシラガミの精神の中で月南とは別の人格が目覚まし始めて  
いた。

夢の章で神南備を山賊の首領に扮したナイアルの手から守るために  
受けた死（人格破壊）によって誕生した悪魔の頭脳と呼ばれる天才

「ネイピア」

現在、シラガミが所有している暗黒書物は全てネイピアが管理して  
いるのだから能力の強さがうかがえる。

「……クッククク……面白い展開になりそうだぜ兄貴♪……そして  
…月南という弟も出来たしな」

黒く塗り潰された外見から口がニタァーッ！といった感じに耳ま  
で裂け、左腕から注射針のような長い舌を持った四足獣の奇妙な生  
命体が涎をたらだと落としネイピアの顔を見ていた。

## 混在（9）、闇なる記憶（後書き）

教えて！！シラガミ先生

本編の話が凄いことになっているけどオマケをやっちゃいます。

今回のテーマ 「外なる神」では、シラガミ先生よろしく願います。

シラガミ「前書きのやけどが気になるが……」  
ほっとして下さい：

シラガミ「まあいい……えっと外なる神というのは、この宇宙の起源より前に存在していたものたちのことを総称して呼んでいる」

外なる神……我々の暮らす宇宙の外から支配を及ぼすことからその名前がついた。肉体を持っておらず人類の理解の範疇を遥かに超えており行動が読めない。

頂点には「アザトース」が君臨している。

小説では、シラガミの命を執拗に狙っているがナイアルラトホテツプの謎の行動によりシラガミを発見出来ずにいる。

審判の日という人類終焉の鍵を握る重要な役割を担っている。

時々、アザトースよりも上の存在がいるような素振りを見せる等、今後の動向に注目。

シラガミ「……審判の日にオレが立ち向かわなければならぬ最強のものたちとなるな……既に、この物語のラスボスを発表したけど大丈夫か？」

大丈夫だと思います……有名だし読者の想像通りです……がこの物語には、もう一人重要な動きをしているツインテールの女がいるか

らどうでしょうね……

シラガミ「アイツか……一体何を考えているか分からん奴だったな……インストールの邪魔をしゃがって……」

次回は「旧支配者」についてシラガミ解説をします。

## 混在(10)、ドッペルゲンガー(前書き)

新年明けましておめでとうございます!!

本年もよろしく願います。

追伸

前作の作品の執筆文字を軽く超えました。

祝「10万文字突破!!」

なんか嬉しいです。

## 混在（10）、ドッペルゲンガー

シラガミが久しぶりの子供達との会話に花を咲かせていた頃……シラガミの新人格の月南の様子が激変していた。

シラガミの精神内部へ

最もシラガミの中でも闇の記憶を貯蔵している部屋であり、かつて狂気に堕ちた「狂姫」の支配があった場所でもある。

天井から溶けた蠟がダラリと滴り落ちて一種の鍾乳石のように幾重にも重なっている。

そんな空間すら自分にはそぐわないと判断してなのか月南の身体の周りには、黒い心のバリアのようなモノが張られており、中心にヒトガタの月南が力なく座り込んでいた。

「寒い……冷たい……」

途方もない寒さが彼を襲っていた。

急に自身の夢で見っていた謎の存在である「シラガミ」が現れ、自分の中に黒く塗り潰されたがドツと身体中に流れこむ感覚と酷似して不快だった。

「あゝあ……ヤバいな……完全に堕ちかけてら……」

月南が伏せていた頭を上げてみるとバリア越しに巫女姿の女性が立っていた。

髪は、金髪でシラガミという存在と似ていたがズル賢い印象を受ける表情を浮かべている。

「誰だ……シラガミじゃないな……」

「おっと……！言動にも変化がきたか……こりゃ予想以上に進行が早いな……」

巫女姿の女性は、口下に手を当てて少し考え事をした後にとりあえずと言った感じで自己紹介をした。

「俺の名前は、ネイピア：お前と同じシラガミの人格の一人だ……狂気に堕ちかけているお前に話した所で無駄だと思うがな：狂姫の事例もあるし、このままにしておくのも芳しくないな……」

そういつてネイピアは、右腕から何かが飛び出し月南のバリアに噛み付いた。

しかし、バリアは破れず「何か」は、再びネイピアの右腕に巻き付いた。

「……やっぱダメか……ティンダロスの猟犬って言ってな結構強いんだが……」

ネイピアの右腕に絡み付いている痩せた口が長細い化け物がけたたましい怒号を上げるが音は、反射することなく黒い蠟に吸収された。ティンダロスの猟犬……別名、角度から現れるもの。明確な分類はされておらず善悪を超越している存在とされ、角張った時間に存在している。

角度がある空間を行き来できるため狙われたら逃げることは困難とされている。どのような因果があるのか不明だが現在、ネイピアに寄生しており能力を発動している。

ネイピアは、一層闇が深まった月南を見てからぽっかりと空いた天を仰ぎ、「シラガミ……」とボソツと呟いた。

狂気は人を変える……月南の華奢な身体に黒い渦模様の刺青が入り、金色の髪は逆立ち、蒼色の瞳は紅色と変容して不気味な光を放ち始めていた。

あの時の狂姫と同じように……

しかし、あの時とは違い侵食のスピードが桁違いにあがっていた。まるで何者かの操作みたい……

\*\*\*\*\*

月南の異変に感付いたシラガミは、侵食のスピードに驚いていた。

「！……バカな…早すぎる…」

シラガミの現在の身体は、月南に所有権があるため変調は顕著に身体に現れていた。

全身からドス黒い魔力が溢れだしボリア家の屋敷が悲鳴を上げるかのように軋み出す。

「何かしてきやがったな！！あの女……！！」

シラガミの脳裏には、インストールの邪魔をしてシラガミを月南の身体に戻した張本人のツインテールの女が浮かんでいた。

シラガミが表情が険しくなり全身に力を込めて狂化を抑えつける。

「親父……！どうしたんだ？」

「父さん……」 「お父様……！」

今まで見たことのない父の姿の驚き、心配の声を上げていた。

シラガミが魔力を解放して霧のような黒い粒子が身体の周りを回るように高速で回転して、徐々に巨大な骸骨の姿に変容してシラガミの身体を覆った。

「オレをなめるなよ……そう簡単に狂気に負けてたま………そうか、フ………こんな粗い術式なら………」

シラガミは、髑髏の粒子を解除して狂気に身体を委ねるように腕を枕にして寝転んだ。

未だに身体中に狂気の証である刺青をほったらかして……

「ジジイ……！なんだ今のバカでかい魔力は？」

「爺ちゃん大丈夫……？」

「……無事でございますか……！！ヴルム様」

異変を察知したコクシキとコクシキの姉のノゾミ、屋敷の使用人らがヴルムの部屋になだれ込んできた。

全員が今まで生きてきた中で感じたことのない魔力がボリア家の家長の部屋から発生すれば気にならない人はいないだろう。

しかし、事態を収集出来ていないヴルム達も軽くパニック状態なの

で……

「儂らもどうなっているのか!!?」

寝転んだ父親と説明を求む家族との間をキョロキョロと視線移動をするヴルム達。

簡単に言うと言明がかなりややこしいのだ。

今の状況説明く

ニホン最大の権力を誇るボリア家のお三方がいる部屋から莫大な魔力が探知された。

駆け付けると驚きと戸惑いの表情を浮かべるヴルム達と床に全身に刺青の入った金髪の美女が床で寝転がっている。

新手の新術研究?

そんなことを考えて思わず訝しげな表情を浮かべる部屋突入組。

実際、こんなことが世間に知られれば大スキャンダルであるが……

「ヴルムのガキか……ジジイって呼ばれているから孫か……」

シラガミは刺青が迸って（ほとぼしって）いる上半身を一回反らし、飛び上がった。

金髪の髪は逆立っているが猫のようにクリツとした眼が印象的な雰囲気醸しだしていた。

シラガミは、せっかく起き上がったのだからといった感じでティオンがいるベッドに移動し楽に座りだす。そんな女性に面識があったのは、月南に喧嘩を吹っつけたコクシキと部屋を訊かれた茶色のシヨートカットをした侍女であった。

「あっ!!あの時の女!」

「な……何をしているのですか!!?」

少しばかりの群集の間を縫って二人がシラガミを指差した。

「……お前達か……オレから説明している時間はない……ヴルム!!……こいつらに説明しておけ……オレは今から瞑想に入る」



ベッドの上で両足を固く組み両腕を膝の上に立て、全身の力を極限まで脱力させる。

シラガミが昔からとっている精神世界に入るための儀式のようなモノである。

シラガミの師匠から教わり現在までも行い続けている所作であった。

「お、親父！！この状況の説明は……」

そこまでシラガミの耳に入っていたが脱力した肉体から解放されたシラガミの精神は、直後に深遠なる闇の部屋に消えて行ったようだ。

\*\*\*\*

月南が狂気に堕ちかけている闇の部屋

先程の月南とは、外見がかなり変容して筋肉が不自然なほど発達しており、ちよつとの刺激で外に飛び出しそうな気配であった。

「遅かったじゃねーか…何してたんだよ兄貴!？」

「少し邪魔が入ったからだ…それにしても…かなり粗い術式だな…あんなに筋肉を発達させたところで何の役にもたたないのに…」

過剰に搭載した筋肉や付け焼き刃の知識を求めるのは弱い者のする最後の抵抗であると確信しているシラガミは、ネイピアにある命令を下した。

「おい…ネイピア…お前とはインストールは、99%終わっているよな?…ドッペルゲンガーを作るから外に出て、対狂気用に鍛えたオレの弟子の「キリン」と「ユグド」を呼び寄せろ!」

シラガミの予想外の発言に半眼だった眼が大きく開き怪訝そうな表情をネイピアは、浮かべた。

「兄貴…なんでそんなことするんだよ?…粗い術式ならアンタが吹き飛ばせば良いじゃないか?…わざわざ俺のドッペルゲンガーを作るまでもないんじゃない?」

ネイピアの鋭い洞察力でシラガミの考えを一瞬で理解してしまった。

しかし、そんな乱暴な措置が許されるだろうか？

姉さんが聞いたら激怒するだろうな……とそんな事を頭に巡らせながらシラガミとの話しを進める。

「……月南自身に解かせるんだな……失敗したら「ゲシュタルト崩壊」で月南を破壊するのか？……フフ、俺は構わないぜ……」

IQが200以上のネイピアの理解力の早さに普通ならば驚くところであろうがシラガミは、慣れっころしく相応の対応をした。

「……さすがだ……早速、ドッペルゲンガーを作るから頼んだぞ……だが、オレの弟子はあくまでも保険だ……狂気を打ち破れるのは月南自身に行わす」

巫女姿の金髪美女のシラガミが左手にグニャグニャと動くスライムのようなモノが出現して人型に形を整えている。

「あゝあゝ早くインストールを終えてくれりゃこんな面倒なことに巻き込まれることは、なかったのに……あと、1%にも満たない記憶だし……ちようどシラガミの物心付いた辺りから9歳までの記憶が無いし……早く生意気だったシラガミのガキ時代を見たいぜ……」

ケラケラと目を吊り上げて笑う巫女姿のネイピアだったがシラガミのこの後の発言に黙り、三度半眼に戻した。

「バカを言え……オレのガキの頃の記憶は最悪だ……インストールすれば一秒も保たないで発狂しちまう……これを知ってるのはオレだけで良い……」

「アンタがそこまで言うなんて珍しいな……案外、昔惚れた女に書いた拙いラブレターが封印されていると思ったが……ふん、まあ良い……暇潰しになるからやりますよ……」

シラガミが人型に整えたグミのような感触のする物体をネイピアに渡し、あの作戦を実行を指揮した。

「じゃあ……オレは暫く出ていかないから……頼んだぞネイピア……ドッペルゲンガー解放……」

シラガミが指をパチンツと鳴らすとネイピアの手にあったグミが勢

いよく大きくなりネイピアの身体を巻き込んで蟬が滴り落ちる精神世界の天井を突き破って消えて行った。

ドッペルゲンガー……自分とそっくりな人物を目撃してしまう現象かの有名な小説家「芥川龍之介」も体験したのである。

1927年7月、芥川は近所の人に銀座のデパートで歩いているのを目撃した。

その人は、芥川らしき人物に声をかけたが、何ら反応はなかった。翌日そのことを芥川に話したところ、その日彼はどこにも行かず、一日中家にこもっていたという。

そんな奇妙な出来事から数日後に彼が服毒自殺をしたことから更に、不気味さが増し、不吉の象徴となっている。

\*\*\*\*\*

ボリア邸へ

シラガミ（父親）の命令により孫達に現状を説明しとけ！！という無茶振りに終始困ったことになったと顔を向き合わせるヴルムとカゲタ。

「兄貴：どうする？…そのまんま伝えたら絶対マズいと思うが」

「その前に信じてくれんだろ……言ったらボケたと思われそうじゃ……くう……！！親父め！！」

いきなり孫達に目の前の金髪美女が「お前達の曾祖父だ！！」っと言った所、いかに柔軟な頭を持った輩でも「ハイハイ、おじいさん分かった分かった」

というつまらない返事と共に施設ディサービスに入居されるのは目に見えている。「なあ……さつきから何コソコソとしゃべってんだよ？ジジイ同士顔を向き合わせて……」

コクシキがたまらずに声をかけたがその返答にも困るのだ。

「い、いや……少し待っ……」

時間をとった方が良いと判断したヴルムは、弟と共に部屋の隅に移動しようとしたその時……

ティオンの呪眼が具に（つぶさに）シラガミの身体から何かが出てくるのを察知した。

「お兄様…アイツが出てきそうです……ネイピアが…」

「な、何!？」

ヴルム達は、咄嗟に身構える。

ネイピアは、シラガミの人格の1人だが…シラガミの子供達とは、相性が最悪で幾度となく喧嘩をしていたためであった。

不意にシラガミの身体から絵具のようにグニャグニャとした何が飛び出してきてヴルム達の目の前に醜い音を立てて床に着地した。凶凶しい（まがまがしい）魔力を放ちながら人型に姿を変える物体に恐怖を感じてしまい、思わず成り行きを見守ってしまう一同。

「久しぶりじゃねーか!! ヴルム」

現れたのは神社で見かける巫女服を纏いし金髪の女性であったが口調は神に仕える気が毛頭ないと思われる程乱暴であった。

単細胞の生き物が分裂するかの如く座禅を組んでいる美女からもう一人の金髪美女が説明なしに出てくれば驚かない奴はいない。

「なっ!! どどどういうことだよ!! 一体何がこの娘に起きているのでしょうか？」

教科書にも出てこない数々の不可思議な現象にショートカットの侍女を含め、頭がショート寸前のコクシキ達。

「あっ!?! ……お前ら説明してねーのかよ!!」

首の骨格を確かめるようにゴキゴキッと豪快に鳴らしながらネイピアが言った。「いや!! この状況を説明しろと言う方が無理じゃろ!!」

「…だからお前らはバカなんだよ……もういいや、お前らはこの計画に加わるな…」

「計画？」

そうヴルムは言ったがネイピアは、聞こえていない素振りを見せて、シラガミの後ろに立ち、大きく両手を前に出し

「出でよ…ドール…サテュロス…」

と言って両手に力を込めるとまばゆいばかりの黒き閃光が針のように広がり、そして徐々に閃光は、二ヶ所に集まり出した。

「お久しぶりでございます…ボス」

「おひさーなんだな♪」

出てきたのは、二人の双子であった。

容姿は、ショートカットであるが前髪が少しだけ長く「ドール」は、左目が「サテュロス」は、右目が白い髪に隠れている。

二人共、病的にまで白い肌を黒く破れた布キレが覆っているだけであつた。

サテュロスは、表情を崩さずに冷静沈着に佇んでいるが、ドールは、好奇心旺盛といった感じでピョンピョンと飛び回っている。

「今回は、こういった処遇でございますか？」

「いや…今回は俺の意志ではない…失敗の許されないシラガミの意志だ」

「!!!!!!」

思わず凍り付くサテュロスとドール。

ネイピアの部下である二匹であつたがシラガミの存在は遥かに畏怖の感情が強かった。

「非常事態「C」だ…世界に散らばっているシラガミの弟子の内「キリン」と「ユグド」を呼んでこい!!」

「!…いよいよでございますか…承りました」

「ドール分かった!!行ってくるよー!!」

指令を貰った二匹は、窓を大きく開け広げて太陽が差し込んでいる都市に身を投げた。

※サテュロスとドール……ネイピアと一緒にいたティンダロスの猶

犬の協力者。ティンダロスは、鋭角の角度に移動出来るため、地震等を起こして亀裂を作る。

ボリア邸の近くまでやってきた溟邏は、部屋から飛び出してきた二匹の影が都市を離れていくのを目撃していた。

「あれは…ネイピアの部下じゃ…何か起こっておるのか？」

太陽を眩しそうに目を萎め、しなやかで美しい黒髪を翻してボリア邸へと移動を開始した。

この世界を創った暗黒神について我々が知り得ている情報は断片に過ぎないだろうか？

広大な暗黒の迷宮がシラガミ達や人間を翻弄して絶望へと誘うかも不明である…

## 混在（11）、前夜（前書き）

正直…告白するのを迷ったんですけど…あえて言っちゃいます。  
実は「幻神月花」、まだプロローグの段階なんです！！やべえ、ど  
んだけ長くなるんだよ！！！！  
分かりにくい小説ですが読んで頂けたら幸いです。

## 混在（11）、前夜

時刻は、黄昏時を指した頃ネイピアの部下である人間の定義に当てはまらない構造をしている怪物「サテュロス」と「ドール」は、病的にまで白く華奢な両足からは、想像できない程の跳躍を駆使して高速移動していった。

ドールは麒麟へ

サテュロスはユグド

そのように担当を決めて呼びに行つたのだ。

「ドール」

「あっ！！いたぞいたぞ！！麒麟課長を見つけたでござる」

ドールがやって来たのは、休日の白邏高校の屋上。

その場でシラガミの弟子である麒麟が夢中でカエルの玩具で遊んでいた。

麒麟は、骸骨の面から目をキラキラさせて持ち上げてみたりと好奇心たっぷりといった感じであつた。

「ん？…あっ！！ドールちゃん久しぶり！！」

頭に深々とかぶっていたフードを捲り上げて、骸骨の面を外した麒麟。

面を取った顔は、まだ年齢が14歳程の少女であつた。しかし、その身体は黄昏の光に照らしだされ朧月のように不鮮明な色合いの不思議な人間であつた…もともと彼女が人間だったのは数百年前の事であるが…

ニホン建国時、世の中がまだ不安定で戦争があちこちで頻発していた頃。

まだ徴兵制度のなかったニホンで女性でありながら軍に入隊した人がいた。



シラガミ皇帝の意志に賛同し、厳しい入隊試験をくぐり抜けてニホン国の守備をしていた。

皇帝の姿を見たことはなかったが：別の国の戦争で被害を受けた住人や親を失った戦争孤児に対して差別なくニホン国に迎え入れる「この国」が好きだった。

勤務時は国の関所を警護し休憩や非番になったら食料を買い込んで孤児施設に出向くことが楽しみになった。

だが：運命は残酷だった：孤児施設を襲った盗賊団の銃弾が彼女のこめかみを貫き、彼女は絶命したのだ。志し半ばで命を断たれた彼女の想いを理解したシラガミ皇帝が特殊な術を彼女に施して幽霊としてこの世への存在を許した。

シラガミの弟子として……

幽霊となっても純粹さは、薄れずに猫のようにぼっちり開いた眼が印象的なかわいらしい女性である。

「ドールちゃん！このね人間さんがくれたカエルの玩具おもしろいよ〜！」

キリンが薄らした手でカエルの側面にあるネジをグリグリ回す：するとカエルは歯車の軋む音と共にその場ピョコピョコと飛び回った。  
「ホントだ！！ドールもやってみた……あっ……ダメだ……シラガミ様からの仕事があったんだ」

最初は飛び回るカエルの姿に目をキラキラさせていたが最強の王であるシラガミの指令があったことを思い出して絵に描いたように頭だけを垂直に落下させる（首があるので胸の辺りで強制的に止まる）

「ふえっ！！お師匠様から？」

「うん：それをキリンに伝えるためにドール頑張った！！えっとね：非常事態「C」<sup>クレイジィ</sup>だから早く来いだって！」

「はわわわっ！！分かりました！！！」

シラガミの命令に一瞬戸惑うが直ぐ様ビシッと敬礼するキリン。

\*\*\*\*\*

ドールと同じくネイピアに忠誠を誓う怪物「サテュロス」も弟子の中で一番の問題発言をするお調子者の「ユグド」の所に来ていた。黄昏時の神南備の山に何故か木の上でうたた寝をしている。

「カアー、カアー…スゥ」

「おい！！いい加減に起きろよユグド！！シラガミ様から指令が出ているんだぞ！！」クセであるカラスの鳴き声のようないびき鼾で腕を組んで飄々と寝ている。

骸骨の面が重力の影響で顔からズレているが顔の部分は、黒い布で覆われているため表情は読み取れない。牛の髀髀をアクセサリとする奇妙な黒衣が不気味さを倍増させているが……

サテュロスの起こす声で目を覚ましたユグドは、見た目からは想像出来ない位の女性の声（いわゆるアニメ声）で返事をした。

「おはよう！！べ、別にアンタを待ったためにここにいたわけじゃないからね！！」

その声に気分を害したのかサテュロスは、ユグドの頭をポカンッ！！と殴った。

「ぎゃあ！！痛いっすよ先輩……」

今度は、ちゃんとした男の声だ。

「なんだその気持ち悪い声は！？」

「あれ？知らないんすか！！人間世界でやってるアニメの主人公の声でっせ！！…声帯模写でやってみたんですよ♪」

「知らん……それに、お前語尾が全部おかしいぞ」

「今、アニメで現代語の勉強をしてるんでごわす……わっちの語学能力はいいかいな？」

ごわすって……………

サテュロスは、悩んだ…こいつを本当に連れて行った方がいいのかを……

シラガミ様に敬語を使わないし：戦力としても微妙だし……

ブツブツと独り言を言っているサテュロスにユグドは、何かを思いついたように指をパチンと鳴らして

「コラ！！オレが連れて来いと言ったんだからしつかり連れて来い！！オレの言うことが聞けんのか！」

激しく起こっている時のシラガミ（男時）の聲がして反射的にサテュロスは、その場で頭を下げる。

「そんな滅相にも……」

不意に目だけを上に上げると右手でピースしているユグドの姿が……

ブチンッ！！

「てんめえ！！ぶっ殺してやる！！」

「ヒヤハハハ！！わっちの声帯模写も凄いじゃろ！！……捕まえてご覧なさい！！」

またしてもアニメ声でサテュロスを挑発するユグド。そのようすキレたサテュロスは、右腕を狼の口へと変容させてユグド目がけて殴りつけるがユグドは、直ぐ様反応して別の木に移動していた。

「せえんぱい！！早く行かないといけないんでしょ！！非常事態「C」が発動されたから」

ユグドは、山を下りるように腕を振って一目散に走っていくがその後ろでサテュロスが高速移動でユグドを追いかけて行ったのであった。

ふと……

「アレッ……俺、ユグドに命令のこと伝えたっけ……？」

こんな疑問も今となってはどうでもよく、とりあえずユグドをぶちのめすことだけに焦点を当てることにした。

\*\*\*\*\*

再びボリア邸へ

「ま…マジかよ！」

「ああ、本当だ…：目の前で座禅を組んでいるのがお前達の曾祖父だ」

シラガミのドッペルゲンガーとして外に出された別人格のネイピアがストレートに説明した。

「おい！！ネイピア…いささか表現が鋭すぎるぞ！！もっと言い方が…」

「お前バカか…：もはや上手く隠すとかどうたら次元じゃないだろ！！…証拠はない…信じるか信じないかは勝手にやってろ」

「でも…一応お父様にご相談なされた方がよろしいのでは？」

「ああ…ネイピアよりも父さんの方が信用があるからな」

ネイピアでは、孫達への説明は不十分と考えてティオンとカゲタが諭すかのように言った。

ネイピアは昔から悪ふざけが酷かったのでシラガミから言った時が上手くいく可能性を示唆してのことだが…

というのは建前で本当は、シラガミと孫達との会話の場を設けたいといったことが本音である。

「…：まあ、大っぴらに見ればそっちの方が好ましいだろう…：おおい、兄貴出てくれるか？」

ネイピアが目を閉じて座禅している頭をコツコツと軽く数回叩いて促す。

すると、やはり狂気の術式が弱いらしく簡単に狂気の波長を押し留めてシラガミが目を開けた。

「…：別にオレが出た所でコイツらの納得するような物なんかないぜ…：」

全身から迸る刺青の毒々しい紋様が心臓の拍動と調和するように点滅を繰り返している。

「待って…じいちゃん！」

シラガミの曾孫であるノゾミが嘆を發した。

「本当にこの女性がじいちゃん達の父親なんなのか？」いつになく鋭い目付きで訊きヴルム達の反応を待つ。「ああ：儂らでも信じるのが難しいが：この人に育てられた！」

「本当に？」

「本当だ！」

ノゾミはその会話の後、一瞬悩んだ素振りを見せて：「わかった信じる」

あまりに柔軟な脳ミソが現状を受け入れたようだ。

「「うえっ！！？」」

ノゾミのあっさりした解釈に思わずすっとんきょうな声を上げるが、シラガミだけは目を大きく開き、感心した。

「クククッ！！なかなか面白いなお前」

「へへッ！一応ボリア家の端くれですから……逆にその位のことがないとニホンのリーダーにはなれないからね！」

見た目的には同じ学校に通う同級生の友達にしか見えないが：実際は年齢差、数百年の曾祖父と曾孫である。

「あ、姉貴！！本当に信用するのかよ！？」

当然の反駁：

「いいじゃん！！その方が楽しくなりそう……それにアイツに似ているね……」

アイツ……？

シラガミは細長い耳をピクッと動かして目を細めた。「待てよ！！そうなったら：あの月南が俺の……」おったおった！！何をしているんじゃない？シラガミ……」

コクシキの発言を妨害したのは、かつてシラガミと共に旅をしていた溟邏であった。

艶のある腰まで長い髪、漆黒の瞳が妖麗な美しさを醸し出している。窓から易々とボリア邸に侵入した溟邏は、直ぐ様シラガミの女の身体に異変があることを察知した。

「ど、どうしたんじゃ!!…まさか狂気とやらに取り付かれたのかや?」

「いんや…粗い術式の狂気だから大丈夫だぜ…面と向かって話すのは久しぶりだな溟邏姉さん」

シラガミと瓜二つの外見だが、何を考えているかイマイチ掴めないネイピアが首を右に傾けて言った。

「ネイピアか…相変わらず不快な匂いじゃな…それより粗い術式ならばどうして弾き返さないのじゃ? 簡単じゃろうに」

ティンダロスの猟犬から微量に発せられるひどく刺激を伴う悪臭（実体かしていない時は人間には分からない）に敏感に反応に、あからさまに嫌な顔をした。「溟邏か…隠していても仕方ないな…」

シラガミは、大きく深呼吸をしてから溟邏達に計画の話を初めた。

「明日の朝…月南を狂気の世界に完全に染まらせる!」シラガミは、その情報だけで良いと判断したのかそれだけを言った。

しかし、ネイピアは独自の判断でシラガミの後付けを行った。

「…：簡単に言えば月南が俺達の人格の一つとしての資格があるかどうかのテストだな…：」

「余計なことを言うな…」

「別にいいじゃないか…」

シラガミがネイピアを睨み付けるがネイピアは臆することなく不気味な笑みを浮かべた。

「もし…月南に資格がなかったら…：狂気に完全に飲み込まれたらどうするつもりじゃ?」

今にも溟邏は狐化しそうなほど険しい目をしている。「…：最悪の場合…月南を強制的にシャットダウンして脳回路からゲシュタルト崩壊で人格を破壊する…：オレの能力でな…：」

シラガミの中とは、この先加速していくであろう神との戦いに簡単に狂気に堕ちてしまうような脆弱な精神の人格は有しているだけ危険と判断してのことだ。

無論…無理やり人格のゲシュタルト崩壊を起こすのだから記憶障害

も必ず引き起こされてしまいが致しかたないと思っている。

しかし、溟邏は月南の消失に黙っている訳にはいかない。

封印から解き放たれ月南の家に厄介になっていたがこれほど他人を思いやる人格は珍しかった……まだインストールが完全に終わってなく自分が何者かわからぬ現状に立ち向かいながらも自分以外の者達への敬意を忘れない心。

月南は優しすぎるのだ……その結果、村からもあれほど信頼されるはずがない……

「まだ……他に手はあるじゃろ!! そんな乱暴な方法で狂気に打ち勝たせるなんて……月南は何もしておらぬのに!!」

溟邏が絞りだすように言ったが……次のシラガミの声はあまりに冷たく、そして正しい見解からの言葉だった。

「溟邏……オレは遊びでここまで生きてきたわけじゃないぞ!……否応なしに外なる神との戦争に参加しなければならぬ……少しでも揺らぎを無くさなければならぬ」

相手は狂気の総本山である「外なる神」!……

心の隙間に入り込み精神を破壊する

努々（ゆめゆめ）忘れるなかれ……万物の王はシラガミの首を狙っていることを……

シラガミの生きてきた800年間は、まさに狂気との戦いであった。他の人間とは違い「死んで逃げる」ことなんて出来ない……何度、自分の罪深さに自決を図ろうとしたことか……

師匠の目を盗んでは、包丁で手首を切り落とそうとしたが、即死でなければエイボンの魔術で身体が再生し死ぬことが出来ない。

シラガミは無意識に悟らざるを得なかった。

己が因果の鎖から解放されるのは「神に勝つだけ」ということを……

シラガミの淡々と冷淡な口調にゾクツと一同が畏れを感じたがコク

シキだけは、我慢出来ずに言う。

「待てよ!!」

あまりに大きい声だったのでシラガミも冷たい目をしながらそちらを見た。

「俺のジジイの親父だが知らねーが!!勝手過ぎんだろーが!!…月南は関係ないだろ」

「おま、コクシキ!親父になんて失礼なこと言うんだ!!」

「ジジイは黙ってろ!!こんな小娘の戯れ言に…月南を返せよ!!」

座禅を組んでいるシラガミ目がけて狐化したコクシキが殴りかかるうとするが…「シラガミに手を出すのは、わらわが許さんぞ」

溟邏の九本の尻尾に力強くで抑え込まれ、身動きが取れなくなった。

「クッ!!離せよ」

「何処の門下かは、知らんが…わらわの旦那に手を出そうと言うのならわらわが相手になるぞな…」

旦那……!!?

シラガミの子供達は一斉にコクシキを抑え込んでいる妖麗で美しい美女を見た。「ま、まさか…!」

「姿形が変わり過ぎだろ…」「でも…呪眼ではお母様の波長がさっきから…」

「早く言えよ!!」

なんとヴルム達の母親は、妖怪の総大将「九尾の暗狐」である溟邏だったのだ…

「マジで母さんかよ…どう見ても今時の若い娘だぞ…」

カゲタは信じられないようなモノを見るかのように溟邏を見るが、溟邏は訝しげに三人組を見ていた。

「なんじゃ…こんな奴、わらわは知らぬぞ」



首を傾げる溟羅にシラガミがそのままの態勢で溟羅に説明した。

「コイツらは、オレ達の子供のヴルムとカゲタとティオンだ……あれから200年近い経ってるんだ容姿は変わるだろ……」

溟羅は、あからさまに動揺し、冷や汗がタラタラと流れ出てきた。

「それで……今お前が叩き付けているガキは、ヴルムの孫……つまりお前の曾孫だな」

「な、なんじゃとおおー!!」

衝撃的な出会いであった。

## 混在(12)、過ち(前書き)

大変遅くなりました。

もう少しで序章が終わります。

私は軽く風邪を引きましたが皆さんは大丈夫だったのでしょうか？

## 混在(12)、過ち

自分の曾孫とは知らずに床に叩きつけてしまった溟邏…顔の表情は動揺一色だ。溟邏は、九本の尻尾をコクシキからゆっくり放した。

「すまぬ…その…（なんで早く言わないのじゃ）！！」

温かい家庭を目指して頑張ってきた溟邏にとって暴力はどうしようもなく子供との溝を深めてしまう。心（や）ってしまった！！孫に嫌われるのは最悪なのに！！）そう思っても事態は好転しない。

「いい…別に興味がないから…」

曾孫の一言に絶望への階段をダッシュで駆け上がってしまった溟邏。  
漫画で言えば顔に縦線が大量に入る所である。

興味がない…これほどダメージを与える言葉はそんなにないだろう…

「ヒヤハハハッ！！なかなかいないぜ溟邏姉さん！！初対面で叩きつけるばあちゃんはや！！」愉快そうにネイピアが腹を抱えて笑う。

「うるさいわ！！大体じゃな！！そういうことは、始めに伝えて貰わんと分かんじやろ、戦争時代からシラガミの命を狙う輩が大勢おったから…ううう、言い訳にしかなくとらん…お小遣いをあげれば良いか！」月刊誌「孫友」（敬老社出版）を手にとり必死でペー  
ジをめくる溟邏。

何処から取り出したんだ…

溟邏の抑え込みから解放されたコクシキは、狐姿から人間の姿に戻りシラガミに詰め寄った。「俺には、てめえが月南を乗っ取るための策略にしか見えん…：てめえをぶっ飛ばしてでも月南を解放させて貰うぞ！！」

シラガミの胸ぐらを掴み上げ不良らしく睨み付けた。

「コク！！そういう言い方はないだろ…ちゃんと話合って…」

「姉貴は黙ってろ！！いくらジジイのオヤジだからって…些か勝手過ぎるぞ」

しかし、シラガミは表情を一つ崩すことなく言う。

「確かに、お前達と会うのは早すぎたとは思っている…だが、月南の狂気進行は事実だ…何も知らないガキが太刀打ち出来る代物じゃない」

シラガミの強靱な力とスピードでコクシキの腕を振り解きコクシキの頭に手をかざした。コクシキは、金縛りにでもあったかのように動けなくなる。

「月南の現状を見せてやる…それで分かるはずだ」

>>ダウンロード<<プログラム開始

シラガミの掌から螺旋状のデータがコクシキの頭に鋭く入って行った。

コクシキの脳に打ち込んだ記憶の欠片は、まるで雑音のように粗い画像となってコクシキの脳裏に映像として映して出される。

溶けた蠟のような白濁した鍾乳石の奥深くに紫色の殻に入っている月南を見た。「月南…!!」

不自然に盛り上がった筋肉と刺青があのような優しい月南のイメージを打ち碎いた。

あのような月南が…人を壊すために造られたような身体。

事態は、曾祖父の言った通りだった。

粗い画像が映し終わると場所は再び、見慣れた祖父の部屋に変わった。

「はあ…はあ…」

完全に怯えたようすのコクシキにシラガミが言う。

さっきまで元気だったじゃねーか…なんでそうなっちゃったんだよ…状況整理もままならない…

コクシキの未熟な精神は、壊れてしまいそうなダメージを負っていた。

ガンッ!!

ネイピアが高速移動でコクシキの背後に回り、コクシキの首に鋭い

手刀を浴びせ意識を失わせた。

「まったく：グダグダうるせーな：第一シラガミ：ちゃんと考えてから行動しろ：お前の軽率の行動に反吐がでら：」

ネイピアは、シラガミがちゃんと月南のことについて詳しく知っていればこのような事態（狂気）は未然に防げたはずだし、曾孫もこんなツライ思いもしなくて済んだはずであと言いたいようである。シラガミが家族に会いさえしなければ：

「親父：」

「ネイピアの言うとおりだ：全責任はオレにある：オレの行動がこんな事態を招いてしまった。済まない」

「俺達は本来人間とは関わりを持ってはいけない闇の一族だったはずだ：慎重に行動しないとっこいつらも神に処刑されちまうぜ：」  
ネイピアは金髪美女の巫女姿のまま四つん這いとなり窘めるように言った。

シラガミが最後の生き残りとなったハイパーボリア人は、この世界を観察している巨大な目玉から零れ落ちた「黒い涙」から派生したと幼少時代のシラガミは神話の本で見っていた。

そこには、こう記されていた：

闇なる一族「ハイパーボリア人」よ：

この世界にはもう一つの種族が存在していますが：

決して関わりを持ってはいけません：

彼らと身体の定義が違うのですから理解し合うことは絶対にないでしょ：

我々の生きる場所は漆黒の闇の中：ここしかないのです。

しかし、シラガミの兄「エイボン」が知ってはいけない真実を知ってしまい：ハイパーボリアは滅亡の道を辿ってしまった。

そのため、シラガミの安住の地はなくなり、理解し合うことのできない人間の世界に入るしか彼には残されていなかったのだ。

何百年も人間世界に生活していく内に支えてくれる妻や子供に恵まれ、彼の安息の地が出来たと一瞬考えてしまったが：原爆か兵器として使われた限界大戦が彼の安住の地を殺してしまいました。

人間の定義から大きく外れたシラガミのおぞましい身体は、現在この場所においてはならないと警鐘をならしている。

神から逃れるために闇を離れたシラガミは、家族を守るために光からも離れるのであろうか：

立派に仕事をしている子供達を見ていると：神から狙われている咎人から離れた方が良くと考えてしまう。

だけどサミシイな：そう思うのも勝手か：  
だったらとるべき行動は一つ。

シラガミは自身の子供と溟邏、曾孫の様子を一望すると諦めと踏み切りがついたように静かな笑みを浮かべた。

「シラガミ：何を考えておるのじゃ：」溟邏は悲しげなる表情だ。

「溟邏、ヴルム、カゲタ、ティオン：話が二転三転してしまったな：お前らといると居心地が良くて忘れてしまう：オレだけで十分だよな（神を敵に回すのは）：」

シラガミは最後の部分をわざと声のトーンを低くして誰にも聴かれないようにした。

（コイツらは関係ない！！：オレが神に勝てば良い：それだけだ）

「安心しろ：お前達の未来は必ずオレが守ってやるから：こんなバカな父親でごめんな：でもありがとう：」

家族と一緒に過ごしたいけど、オレはこの世界を創った神から怒りを買っているからな：普通の人生を歩んでみたかったぜ：ヒゲを生やして、顔がシワだらけになりながらも大きくなった子供達と孫に囲まれて暮れたかった。

いや、贅沢は言わん：結婚できただけでも良かったじゃねーか！！

：絶対、一人で光の世界を走って行くのが限界だと思っていたから：

「シラガミ、何を言っておる：」

「そうだぞ親父：いつもの親父らしく厳格で強い親父になってくれ

よ」

「父さんは絶対に簡単に意見を変える人じゃないはず」

「ちょっと抜けてる所がお父様にはありますけどね…でも信念を持  
っているので私は好きですよ」

「何！？ティオン！！わらわのほうがシラガミを好いておるぞ！！」  
妙な嫉妬…でもそれはずっと孤独に生きてきたシラガミにとっては  
嬉しいものである。

「縁起でもないこと言うなよ！！俺達は家族だろ…子供だからって  
頼っちゃいけないことはないはずだ」

「フフフ…優しいな…だが決めたことだし、それがあるべき姿なの  
だろうと考えている…行くぞネイピア」

ネイピアは四つん這いの体勢からまるで四足動物が立ち上がるかの  
如く起き上がり首をカクカクと動かしながらシラガミを鑑みた。

「やっとな俺の忠告を聞いたな…これが俺達だ…生きているだけで大  
罪の者だ」

ネイピアの瞳が不気味に黄色い閃光を放っているかのように見えた  
（実際に光っているわけではないが、彼（彼女）の言動と雰囲気か  
ら感じとれる感覚であった）

「これから闇の戦いが起きるのは明白だ…少しでも弱みは削ってお  
いた方が芳しい…たとえば家族であってもだ」最後の審判を踏まえて  
のネイピアの策略であった。

ネイピアの人格が生まれたのは、時期が悪かったのか様々な国が領  
土を広げんとして戦争が多く勃発した時期である。

ネイピアは、そこで天才軍師としてシラガミの創設した国「ニホン」  
を戦争から守り、幾多の勝利をもたらした影の功労者として活躍し  
ていた。

そこでの彼（彼女）の口癖は、「敵国に攻める前や攻められる前に  
自分の国の不利益な情報は出来るだけ廃棄しろ、敵は容赦なく弱点  
を突いてくる。その前に弱点を無くすことが先決だ」

ニホン国の頭脳としての言葉であり、これからシラガミを狙ってく

るのは暗黒の邪神「外なる神」

家族は、どう引っくり返っても不利な状況しか作り得ないのだ。昔は仕方ないと思っていたが今は違う。

シラガミがいなくてもニホン国はヴルムを中心に動いており、むしろシラガミが入ってこなければ好都合のようであった。

「さて、コイツらから離れて、暗黒神を倒す方法でも…ガンッ！！」

ネイピアの身体が大きく揺らぎ、床に殴り倒された。

拳を振りおろしたのは、シラガミの曾孫「ノゾミ」だった。

「…よし！！話を聴いてはつきりした！！！！お前が悪い！！！！」  
倒れこみ殴られた頬を擦っているネイピアにノゾミがビシッ！！と指差した。

「家族って云うもんは、不利とか利益との話しじゃない！！！！家族は心で繋がっているもの…お前がエラそうに定義するな！！！！」

荒い息づかいで「さあ、立て！！！！次はコクシキの分だ」と言わん限りのファイティングポーズを取るノゾミだが溟邏達は顔面蒼白になっていた。

「一番怒らせてはならない奴を…」

ネイピアの悪魔の頭脳の恐ろしさを知っている者達が固唾を呑んで見守る。

「小娘が生意気な…そういや試してなかったな…シラガミの血を引く者が外傷に対して不死かどうかという実験をな…生皮を剥いでやろう」

両手の指の関節を外してプランプランさせながら左右に微妙に揺れながらゆっくりノゾミに這って近づくネイピアにシラガミが瞬時に止めに入った。

「いい加減にしろ…ムキになるな」

ネイピアの右手をシラガミの左手で握り進行を止めたようだ。そしてノゾミに向かって穏やかな表情を浮かべて「心で繋がっているか…そうだと良いな…こんなオレにも繋がっていれば嬉しいぜ…」



「……!!」ノゾミはシラガミの笑みに見覚えがあった……  
(やっぱりそっくりだ……)

幼い頃からノゾミとコクシキを守ってくれた「あの人」の面影と目の前で穏やかな笑みを浮かべている女性と重なったのだ。

シラガミと同じように強い信念を持っていた人と……

「どけよシラガミ……この女に頬を殴られたんだぜ……やり返せろよ」

「やめろよ……今回はノゾミの方が上だ……それ以上言うならオレが相手になる」

「……!!……フッフ冗談は止めろ……さすがに俺も闇の帝王と戦って勝てると思ってねーよ……」

\*\*\*\*\*

何処かの異空間へ

白色か漆黒かもわからないほど混ざり合い渦のよううねりの中で白髪のツインテールの少女と無気味に眼球が収まっているはずの場所にポツカリと穴が空いている執事姿の男性が話しをしていた。

白髪のツインテールの少女は、中世貴族が着ているようなドレス姿のまま胡坐あぐらをかいている。

「作戦は、首尾よく進んでおります」

唸りのある闇の中で盲目の執事が一礼をしながら言った。

「ルルイエがシラガミの人格の一人「月南」の脳内に入り込み、狂気へと誘っております」

少女は蛸のぬいぐるみだけを愛でるかののように胸元のすっぽりと蛸を埋め男の話しに興味無さげに聴いている。

「あとは頭がわたくしをシラガミの精神に送って頂ければシラガミの動きを止めるだけでなく、精神を破壊するあの記憶を流し込めば頭の目的に一步近づくことでしょう」

どうやら幼そうな顔をしている少女が男のボスらしい……

「良いでしょう……シラガミの精神を破壊出来るのならばなやって

下さい……でもしくじったら終わりですよ……それだけシラガミの能力は強大ですから……」

「御意」盲目の執事は笑みを浮かべて言った。

>>ハッキング<<ツインテールの少女は掌から暗黒の光を放ち、盲目の執事は周囲に溶け込むように消えていきシラガミの精神世界へと送り出した。

シラガミに対して強い憎しみを持つ少女は、胸元に抱いていた蛸のぬいぐるみを無表情に引き裂いた。

無残にただの布切れになった物体に対して「壊れちゃった……でも新しいおもちゃがあるから大丈夫……」

引き裂いた時に首に巻かれた包帯がほどけ、生々しい傷痕が姿を見せた。

それはギロチンを受けた後のようにくつきりと……

\*\*\*\*\*

異変はシラガミに容赦なく伝わった。

「がは……く……」

シラガミの頭に強烈な電気信号が足の指先から記憶の管理をしている海馬目掛けて突き抜けるような感覚に襲われ全身が痙攣している。心の臓の拍動に合わせて電気信号は周囲に馴染むかの如く伸び縮みしているかのようだった。

その異変に真っ先に動いたのは、悪魔の頭脳と呼ばれるネイピアであつた。

「！……ハッキングか……」

ネイピアは急いで痙攣しているシラガミの金色の髪が生えた頭に手をやり脳ハッキングを未然に防ごうとした……

それは、シラガミの身を守る為でなく……ハッキングをかけた人物との接触を図るためだったが。

「あっちの方が演算が早いや……やられたか……」

ネイピアは、シラガミにハッキングをした人物は知らないがとりあ

えずハッキングしたモノに対して「ご愁傷様…」と呟いた。

さて、シラガミの脳がハッキングされたということは…月南の狂気を抑えていた力がなくなるから…狂気が遠慮なく出てきやがるな。

「シラガミの倅達…少し離れてな…」

「ネイピア！一体何が起きたんじゃ？」

「シラガミの脳内に侵入したバカがいてな…今はそいつの影響をもろに受けているようなもんだ…狂気に耐性のない奴は下がっていたほうが精神のためだぜ…」

シラガミの圧力から解き放たれたドス黒い狂気の波長が「見えているのに存在が確認出来ない不可思議な物体」として月南の身体から溢れだす。

「ちよいと…最良のシナリオから外れるが…俺の判断でやらせて貰うぜ…」

ネイピアは、今着ている巫女姿の裾を太ももが露出するまで捲り上げ帯の部分で固定するようにして両足の可動範囲を広げた。

露わになった足は、言動とは結びつかない白く華奢で非常にかわいらしい印象をうける艶かしい足であった。

「さてと…兄ちゃんと少し喧嘩でもしようか…月南」

\*\*\*\*\*

シラガミの眼が視力を取り戻した時、辺りは見慣れた景色が広がっていた。

優れた科学力と魔力を用いて高度な古代文明を築いた暗黒の一族が暮らしていた場所。

「ハイパーボリア大陸」であった…

「なんで…」

シラガミのかつての故郷を信じられないといった表情で辺りを見渡していた。

すると、空が不気味な虹色に包まれて暗黒の落雷がハイパーボリア

大陸に降り注いだ。

外なる神による（知ってはいけない真実を知った代償）裁きの前兆の異常気象である。

そうシラガミが全てを失った瞬間であり、シラガミの壮絶な人生が始まった瞬間でもあった…

### 混在(13)、不完全兵器(前書き)

日夜続く豪雪と寒さで風邪をぶり返して寝込んでいました。

最近寒いですね…

早く暖かい春が来てくれることを願っています。

## 混在（13）、不完全兵器

名状しがたき狂気の波長が辺りに込み上げ月南の肉体は、為す術なく堕ちていった。

限らない狂気の紫色の感じが視覚を刺激する。

「ギャハハハッ！！ついにあのシラガミの身体を手に入れたぜ！  
！これで頭の計画も円滑に進む！！」

全身に赤く変色した刺青が迸る中で月南の中にいる何かが狡猾そうに笑みを浮かべた。

その存在は、明かに温厚な月奈とは違い狂眼（我儘を貫き通す為に外部の視覚情報を遮断するように瞳の上半分を瞼で覆う）

悪魔の頭脳を誇るネイピアが狂気と向かいあった。

「へえゝ：俺にはシラガミがそんな簡単に壊せる奴じゃないけどな  
：」

「ククク！どんな屈強な存在でも精神を崩してしまえば赤子の手をひねる程度にまで弱体化してしまうのさ！！この状況になったら我々の勝利は確定されているんだぜ！！」

狂気月奈は両手いっぱい手を広げて火炎系の魔術の詠唱を始め、掌から赤色の火の玉が形成された。

球形状態の火の玉は中心に落ち込むように乱流を起こしエントロピー（無秩序の度合い）を低める。つまり温度が分子の運動の加速によって上昇していくことを意味している。

そしてこの場を破壊出来るだけの火力になった所で火の玉をネイピア目がけて投げつけた。

ヴルムの英国様式の部屋がオレンジ色に包まれる。

「フッフ：俺にはそんな低級の魔術は通用しないんでね……」  
「角度移動」：」

ネイピアと狂気月南、赤色の火の玉がそれぞれ空間の一点に吸い込まれるように消えていった。

一瞬、次元が揺らいだようである。

目の前の光景にハッと息を飲んだが一瞬で消えた二人の行方をノゾミ達はキョロキョロと探した。

廊下を見てみるが姿はおろか気配すらない。

不思議なことであろう…さっきまで確かに部屋にいたのにネイピアの一言の術で消失してしまったのだ。

ノゾミは、先ほどネイピア達が消える時のことを回想して気付いた。  
(さっきの…どっかで見たことある…)

昔、絵本感覚で読んだ宇宙の本…そう、ブラックホールに似ているんだ。

ネイピアの角度移動とブラックホールがなんとなく似ていることを直感で知った。

子供のころはショックを受けて何日も寝れない記憶があるから間違いない。

ボリア邸の庭から会話の声が聞こえてきたので窓辺から庭を見た。

「な、何をしたキサマ…!？」「シラガミと人格が分かれた時に手にいれた特殊能力さ…魔術のどの定義にも当てはまらない「角度移動」…鋭角すべてが俺の移動圏内だ」

出現した所は、秋に銀杏を実らせるイチヨウの木の枝が作りだしている鋭角である。

角度移動…ネイピアの特殊能力。90度以下の角度(鋭角)の場合所へ瞬間移動することが出来る能力。

ティンダロスの獵犬と同じ能力だがネイピアは無臭で出現するため接近に気が付くのは容易でない。

「さて…俺ばかり見ていいのかな?…足下注意だぜ」

ネイピアの指が上を指しながらそうはつきり言った。すると当然、狂気月南は足下へ視線をずらして警戒するが、春の若々しい新芽の芝が生い茂るだけであった。

すると突然、狂気月南の頭上から先程角度移動で一緒に飛ばされた火の玉が降ってきて押し潰された。

「ぐあああっ!!」

勿論、本当に狂気に侵されているのならば、ネイピアの声にも耳を傾けないはずだが反応したことにネイピアは見逃さなかった。

まだ：不完全のようだな♪

「おっと、ニホン語だと足下は下を意味するのか……言語って難しいな」

ボリア邸の壮麗な造りの屋根から突き出す樋が生み出す鋭角が火の玉の移動を助長したのだ。

「グウウ!! キサマ：この身体はシラガミの身体だぞ：どうなってもいいのか!？」

「ハイパーボリアに対してあまり理解してねえみたいだな……俺達「闇の一族」がその程度でやられる訳ないだろ……」

逆上する狂気月南に対してネイピアは何かを思いついたように口を大きく開けた。

（んっ!! 待てよ：シラガミは現在精神世界にいるだろ……ということとはシラガミの能力が使えるはずじゃん!! やったね：あの能力は爽快でストレスがぶっ飛びそうだからな：やってみるか）

ネイピアは頭に掌を翳してシラガミ能力専用の回路を探しだして高笑いをした。

「ヒヤハハハ!! 見つけたぜ：シラガミがこの能力で大国を1人で叩き潰した程の異形の能力「髑」!!」

ネイピアがシラガミの二大兵器の1つを出そうとするが：周りに変化がなく続けて何度やっても状況は同じであった。

「何で使えねえんだ? …んっ!! …なんだよ女の姿じゃ出せねえのかよ!!」

ネイピアが脳回路を再び調べてみてはつきりした条件だった。

（クソ：シラガミがいない今がチャンスだったのにな……俺にやらせろと言うと「危険過ぎる」の一点ばりだからな……アレッ! でも



「體」は使えるのか……髑が使えないと威力半減だけど……」

ネイピアは、手首まであった巫女服の袖を無理やり引きちぎって両肩が見えるようにし帯まで裾を上げた袴も短くした。

「俺の呼び声に応えよ……體！！」

すると、露出範囲が広がったネイピアの両腕にまわり付き渦のような黒い粒が発生してネイピアの皮膚を削るようにして両腕の骨が出てきた。

理科室で見たような骸骨の灰色と白の間くらいの骨が意思の通りに稼働した。さらに、骨は変形して右腕と左腕で別々の剣となり、まるでネイピアの両腕から剣が生えたかのような状態になる。

「モデルは「ダインスレフ」と「テュルフィン」って所かな……  
ついでにカナリスも起動させておくか……」

そう言うとなイピアの脊柱がメキメキと肌を突き破ってに変形した。神話の挿絵等に描かれるような悪魔や邪神の人間離れた姿を見せつけるかの如くアバラ骨が脊柱を支えるようにせり出す。

その姿は重戦車のようにも見える。

金髪美女のあまりに恐ろしい姿にノゾミは目をぱちくりさせた。

「何の……あれ？」

「あやつめ……シラガミの能力を使っておるな……じゃが體は、髑と併用して初めて威力が出せるのに……女の成りでは無理か」

ノゾミの驚嘆の声に溟邏が簡単に解説する。

「シラガミの能力は、傍から見れば魔王が扱えそうな恐ろしい能力じゃ……じゃがシラガミはそれを己の信念の為、蔑まれた弱き民の為に使い戦ってきたのじゃ……今ネイピアが出しているのは「體」と言ってな……簡単に言えば呪われた武器を製造する術じゃ」

元々暗黒の技術で造り上げた代物は、人間達に災いをもたらす「呪い」として忌み嫌われてきた。

闇のエネルギーが強過ぎて光の民である人間には磁石が反発するかのように拒み、人格を破壊してしまう。まだニホン国が出来たばかりの頃……シラガミの能力のおかげで「東の国に魔王が復活して生け

贅の人間を捕らえにやってくるぞ!!」とよく云われたものだ。

そういえば「勇者」という者がシラガミの首を狙いにきたかのう…  
…クスッと微かに涙羅はほほ笑む。

視点は再びネイピア達に戻る。

完全に戦闘形態に変化したネイピアは、自分の身体を確認するように見る。

「ハハハッ!! 中々楽しめそうだ…カナリス」

背中から出現した脊柱がパキパキと音を立てて闇のエネルギーをアバラ骨が木の根っこのようにグングンと脊柱に貯めていく。そして黒き光の目映さが最大となった段階で突起したカナリスが遙か上空目がけて闇の弾丸を打ち出した。

耳を劈く(つんざく)程の爆音と共に空気を切り裂く弾道にネイピアが作用反作用の反動を堪えるため力を入れた足が地面に深くめり込んだ。

「&角度移動」

重力に逆らいながら突き進む闇の弾丸が一点に吸収されるように消えた。

そして出現したのは人体が作りだす鋭角…脇である。

脇に出現した弾丸を狂気月南は避けきれはるがなく反時計廻りに回転する闇の輝弾が狂気月南の脇腹に強烈に突き刺さる。

しかし、即死以外に動きを止めることがないハイパーボリアの身体は、高速で身体のリハビリが始まる。

一瞬、痛さでたじろぐ狂気月南だが、ネイピアは間合いを一気に詰めた。

「よそ見していいのかな!!…」

「!!!!」

ネイピアの右手剣が縦一文字に切り付けるが狂気月南は、一歩退いてなんとか間髪一髪で躲したがネイピアは更に踏み込んで横に左手剣

で切り付ける。

（浅いか……）

ネイピアの剣は、狂気月南の胴体部分の内臓まで達せず表層部分で空振りのように大振りとなる。

「ク、クソ……!!」

「……中々素早いな……シラガミの身体に感謝しろよ……」

皮膚の表層部分を修復した狂気月南は、一旦間合いを取ろうとするネイピア目がけて渾身の拳を横に切り、ネイピアの顔面を潰そうとするが。

「あらよつと……」

ネイピアは、バック天をして狂気月南の顎にクリーンヒットした。いくらハイパーボリア人でもそこを打たれては、暫く脳の揺らぎが治まらない。「もういっちょ……」

ネイピアは、先程のバック天から逆立ちしてから右手剣を軸にしその場でクルリと一回転した。両足を広げていたため狂気月南の首根っこを蹴り付けてよろめかせた。

「いい加減に俺の弟を解放しろよ……このままやつても俺には勝てないぜ……」

ネイピアが十分に間合いを取り再び両手を前に出す構えをした。

「クソが……頭の邪魔はさせん……我々の存在理由を奪うなああ！  
！水壘連弾」

狂気月南が両手から水の蟲を排出して弾を造り出しネイピアに向けて放す。

1匹1匹が小さな水を司る蟲が集合して波のようにうねりながら飛んでいく。

「……ケツ……バカが……角度移術……」

ネイピアの能力焦点が合わさった空間が歪み出し水壘が消えていった。

そして、ネイピアは狂気月南の周りの至る所にある鋭角から水壘を出現させた。……勿論、ベクトルは狂気月南に向けて……

ネイピアは、ハイパーボリア人の唯一動きを止めることができる心の臓をわざと反らすようにコントロールしていた。

主の身体を鋭く貫くと同時に闇の一族に膨大な魔力に水蟲は蒸発してその場で消失した。

「ギガアアアアアアア！こざかしい技めええええ！！」

「よっぽど俺の能力が嫌らしいな……だが、角度を舐めるなよ……数学的に云えば「角度」の概念は「0次元」だ……つまりありとあらゆる次元に対して絶対的な干渉力を持っている」

と豪語しているネイピアだが、次元が上がれば上がる程「角度」という概念は、曖昧模糊のようになってしまい扱うのがかなり難しい。しかし、そこは策士として不敵な笑みを浮かべてのんびんたたりと説明するのはネイピアの常套手段である。

「……（このままでは……）勝てんのか……？」荒く息をしながら狂気月南は言った。

「言っとくが……相方がシラガミに攻撃しているようだが……シラガミは俺よりも遥かに強いんだぜ……てめえらのようなカスが暗黒の一族に手をかけるからこうなったんだ……お前らの頭のおつむの具合が丸分かりだな」

ネイピアが挑発するように長い金髪の頭を右手剣でコツコツ叩いた。

「く……か、頭の悪口は絶対に許さないぞ……我々に存在理由を与えてくれた……あの御方を……！！」

狂気月南は、足に力を込めて一気に蹴りだした。

ネイピアの首元まで水平移動で飛んできた狂気月南に対してネイピアは、両手の剣を交差して受け止めた。しかし、身体の上部に力の重心が移動したためネイピアの身体が浮き上がってしまった。

「どうだ……！たとえばキサマ自慢の角度移動でも無駄だ……！その前に首を刎ねてやる……！たとえばハイパーボリア人でも首を刎ねれば暫く動くことが出来ないはずだ……！！」

狂気月南は、両腕の筋肉を更に隆起させてネイピアを倒すのに全神経を集中させた。

パツと見では絶望的な状況であるがネイピアは嘲笑うようにクスクスと笑みを浮かべた。

「フフフ…」

「何がおかしい!!」

ネイピアの不気味な笑みにゾクツと背筋が冷たくなるのを感じた。

「あまりにバカな手段に出たのでな……今の俺にはシラガミの兵器の一つを持っているんだぜ……」

ネイピアの右膝が変形を始めて黒いレーザー砲の主砲が暗黒の魔力を充填し、狂気月南の腸<sup>はらわた</sup>を貫いた。

「ガアッ…」

ドス黒い何かが身体の中でドロっと沈澱したかのような感覚を受ける。

しかし狂気月南は、決して手の力を緩めずにネイピアの首を刎ねようとする。

全ては、自分を生み出して下さった頭の為に……

（揺るぎない忠誠心か……クク……そんなモノ俺の前では意味を成さないがな……）ネイピアは、左手で狂気月南の攻撃を防ぎながら右手にかかっている「體」を解いて狂気月南の頭に乗せた。「やっとな俺のチカラの範囲に入ってくれたな……俺の自慢の技が角度移動と言ったつもりはないんだが……なぜか多くの輩が妙な勘違いをしていて不思議だ……俺にはシラガミのような魔術もなければ体術もないんでね……」

ネイピアは、妖麗な微笑を浮かべて言った。

「闇の一族は、首を刎ねた程度じゃあ止まらないんだよ……お前が言っているのは人間の即死の定義さ……つまりお前のやっていることは……完全に無駄な努力……」

狂気月南の目の前に巨大な骸骨が現れ、嘲笑うように「ケーケー……」と指さして笑った。

彼は、初めて目の前の存在を怯えた……今まで見てきた生命体とは、あまりに桁違いの物体……

底知れぬ存在に自分が消えていくような希有な感覚に襲われる。そう、パレットの上で出した鮮やかな色の絵具が黒い絵具に塗り潰されるような感覚である。

「恐れたな……恐怖は心に隙を生む……俺が最も得意なことは相手の価値観をずらす「洗脳」だ……」

ネイピアが生み出した闇の霧が狂気を打ち壊すようにグルグルと回転して月南の身体から丸い球体の物質を引き剥がした。

それによってすっかり狂気が抜けた月南は、ぐったりとその場に倒れこむ。

先程までであった狂気の凶凶しい文様が消え、元の綺麗な姿に変わった。

「簡単に闇の末裔（俺達）を打ち碎けると思うなよ……クソヤロー」月南にまとりついて狂気の波長を送り続けていた元凶がネイピア達の前に引きずり出された。

外形は、蛸の姿で8本の足をチカラなく地面に伸ばしている。

ネイピアの支配下にあるらしく眼は虚ろだ。

「だああ！！結局、俺が片付けちゃった！！」

ネイピアは、腰を解いて元の金髪美女の姿に戻り、悔しそうに叫んだ。

面倒なことは、全部シラガミの弟子に押しつけて自分は観察に徹しようと考えていたから……苦虫を噛み潰したような顔でイライラを爆発させた。

非常に露出のある服装であったためヴルム達も目のやり場に困る。

「とりあえず服を着て貰わんと……大騒ぎになる前に……」

\*\*\*\*\*

シラガミの精神世界

「クケケケ！！さすがのシラガミも一族滅亡の記憶を見せられれば壊れちまうだろう……そろそろブツ壊れた頃かな？」

シラガミが盲目の執事に見せられているのは、「知ってはいけない真実を知った罪」でハイパーボリア人が神に処刑されていく記憶だ

った。

空が虹色になり暗黒の雷がハイパーボリア大陸を覆いつくした：シラガミ以外の同種は「神の裁判」にかけられ全員処刑された忌まわしき記憶。

そんな記憶を見せられて先程からピクリとも動かないシラガミの精神破壊を確認するためにシラガミの首元を舐め回す盲目の執事だが……

ガシッ！！

シラガミの華奢な腕が盲目の執事の首を握り締めてそのまま静かに立ち上がった。

その手からヒヤリとした感触が伝わる。

「てめえか……」

「びゃ、びゃかな！！？ ト라우マの記憶を呼び起こしているんだぞ！！なぜ自我を保てる？」

「オレは精神攻撃してくる奴には容赦しない……」

首を締められて持ち上げられる盲目の執事の眼に恐ろしい化け物の恐怖が刻まれる。「髑……<sup>ドク</sup>……雅……<sup>みやび</sup>……」

シラガミがそう唱えると盲目の執事の身体が黒く光だし、全身の骨が一斉に軋みだす。

「あが……ぎゃああああー！！やめ、やめでぐれええ！！」

次の瞬間盲目の執事は、強烈なチカラでバラバラにされたような肉塊に姿を変えた。

\*\*\*\*\*

狂気と激しい戦闘を終えてその場でへたりと座り込むネイピア。

「あゝしんど…女の身体じゃ本気も出ねえ…」

すると、そんなネイピアの元にヴルム達と厚手のコートを持った侍女がやって来た。

ネイピアは、侍女から渡されたコートを無言で着た。「終わったの

か…？」

「とりあえずな…：あとは、コイツから情報を絞り取り本格的に洗脳した後、スパイとして送り返してやるつもりだ」

あまりに人間離れたネイピアの戦闘に反射的に恐れを抱いてしまったノゾミは、ヴルム（祖父）の後ろに隠れてしまう。

「ノゾミ…：俺が怖いか？…だが、お前は確かに言ったな…：家族は絆で繋がっていると…：フッフ、言っておくがシラガミは、俺よりも遥かに強く化け物クラスのチカラと能力を持っている…：生半可の心持ちでシラガミに会うのは止めろよ…：」

「ネイピア…：」 溟邏が思わず口を開いた。

「…：人は、自分より圧倒的なチカラを妬み…：迫害する…：俺の記憶にはないがシラガミは幼少時代に人間達から忌み子として激しい迫害や差別を受けてきたらしい…：所詮、人間と闇が分かち合うことなど無理な話かもな…：」

ネイピアが一瞥しながら言い放った。

神によって闇から居場所がなくなったシラガミは、人間世界に足を踏み入れた。このまま闇にいたら神に殺されてしまう…：子供ながらに感じたシラガミは、行く宛てもないまま彷徨い歩いたそうだが、運命は残酷だった。特質的なシラガミの身体を人間が理解出来るはずもなく悪魔の使いとして人々から恐れられ差別された。

まだ身の守りの術を知らない8歳の時である。

ネイピアは、少し歩いた後に立ち止まり「本当に、シラガミを家族として認めるならば…：アイツの前で怯えるな！！…：アイツはずっと一人で孤独に生きてきた…：永劫にも近い歲月の中で…：」

ネイピアは自身の女の姿でチカラの入りを確かめるようにグーパ―と掌をしきりに動かしていた。

「だがな…：アイツは本当に家族が出来たことを心から喜んでいて…：少しでも父親らしいことをしようと別の他人に意見を仰いで不器用なり頑張っていた…：ヴルム（シラガミの子供）が産まれ時にシラガミは、神の粛正から初めて笑みを浮かべた」



「……………」

ネイピアがクルリと振り返りノゾミ達を鑑みる。

「アイツを悲しませることは俺が絶対に許さないからな……たとえお前らでも容赦しない……分かったか……!!」

「じゃあ!つまり……」

「親父と暮らすを認めてくれるのか……?」

溟邏とヴルムが信じられないモノを見るように言った。

つまりネイピアがみんなと暮らすことを遠回しに認めたことを表していた。

「何を企んでおる……お主が軽々しく意見を変える奴でないと認識しておるが……」

「ククク……さすが姉さんだ……この身体では神に勝つのが不可能と判断したからだ……」

先程の戦闘でネイピアはもう一つ気付いてしまった。

全盛のころのチカラが女性の姿では出せていないことを……

「まいったぜ……ここまで身体が動かないとは……これじゃシラガミも同じだな……」

俺とシラガミは、本来「男」（訓練した性別が）として幾多の戦争を乗り越えてきたが……女の成りでは骨格の形成状態が男の時と大分違ってくるから厄介……

無論……普通の人間であればそんなに変化していないのだが……シラガミは違う。

（クソ……!輪廻学の制約がここで効いてくるとは……考えてなかったぜ……）

「あ、あの……ネイピアさん」ノゾミが何かを言いたげにネイピアの顔を覗きこんだ。

「ん!……あ、悪り……スマンな納得のいく説明が出来なくて俺もかなり混乱してるんだ……一度整理してからまた説明する」

まだ推測段階から脱却できていないから説明するのは野暮だとネイピアは判断してのことだった。

ネイピアはモヤモヤした気分を払うようにノゾミにある提案（ドキリ？）を持ちかけた。

「そうだ！ノゾミ…」

「は！！はい！」

「アイツが帰ってきたらアイツにふさわしい名称で呼んでやってくれ……」

「ふさわしい名称……？」

「簡単なことだ…爺ちゃんって言ってやれ……かなり喜ぶぞ…」

「えっ！！？なんか照れちゃいます／＼」

「アイツはその言葉に強い憧れを抱いているからな…孫、つまりお前達の父が産まれたばかりのころの限界大戦が始まっちゃったから呼んで貰える機会が無くなったからな…シラガミがどんな反応するか見てみようぜ」

家族として絆の象徴である不思議な言葉。

その絆が闇の一族であることを忘れさせてくれる。

「はい！！」

ノゾミは、元気よく返事した。

## 混在（14）、静かなる移ろい（前書き）

今回から手直しを考えて2000文字前後の文字数にします。  
かなり難解であるため短くまとめられていた方が読みやすいであろうと判断することです。

## 混在（14）、静かなる移ろい

唸りの狂気空間へ

崇高なる貴族が身に付けるようなドレスを着ているツインテールの女性が片目の潰れた熊のぬいぐるみを抱いている。

「だから言ったであろう：シラガミの力を甘く見るなど……」

ツインテールの女性が先のシラガミの頭にハッキングして送った者達の無惨な姿を撫でながら言う。

バラバラに引き裂かれた「盲目の執事」にシラガミの側近達を殺そうとした「蛸」……

どのような経緯で戻ってきたのかわからないが……狂気の空間に出現したのだ。ツインテールの女性は、二体の奇妙な残骸に手をかけて白色の眼が紫色に変色して凶凶しい波長が辺りに立ち込めた。

彼女のドロツとした狂気の波長は二体を包み込み、みるみる内に傷を修復していった。

盲目の執事は、眼底がぽっかりと空いた不気味なぬいぐるみとなり、蛸も催眠状態から抜け出してギシギシの音と共に動き出した。

「申し訳ありませんでした!!」

「全く：厄介なのはシラガミだけではないのですよ……その側近達も我々よりも遥かに強大な実力を持っているのです」

「ご主人様よりも強いのですか!？」

「何も策が無く…正面からぶつかればシラガミの方が強いでしょう……だが今回のことは良い試金石になりましたからその点では、褒めて差し上げます」

「ありがとうございます!!」

かつて無機質で無感情であった我々に命を吹き込んでくれたご主人様……その感謝の気持ちを忘れないように大きな声で叫んだ。

「さて…次は暫くの間を滅ぼすとしましょう…準備をしてください」  
ツインテールの女性は、踵を返して唸りの奥深くに消えていった。

\*\*\*\*\*

冷たい牢獄に閉じ込められたようだった。

月南は、あのおぞましい感情に対抗するために自分の今までの足跡を回想していた。

2年前に無我夢中で土の中から這い出して霊山を彷徨っている所を  
隣靜に発見されてからが「ボク」の始まりだった。

自分はなぜ墓の中にいたのだろう……？

生き返ったの？

それじゃあ…なんで生き返ったの……？

この疑問が常に頭によぎるけど明確な答えが得られないでいた。

ボクはナニモノ？

\*\*\*\*\*

未だに意識が戻らないシラガミ（月南）の側をボリア一族が見守っている。

「……という訳で、コイツは現在の人格である月南だ…形而上俺の弟となるだろうな…」

女のネイピアが面倒くさそうにベッドで横たわる月南を指さして言った。

「つまり儂らの叔父にあたるのか……」

「なんか複雑になったな……ネイピア、父さんは何をしているんだ？」

カゲタがネイピアに質問するとネイピアは、視線を上に向けて考え事をした後に抑揚のない声で答えてくれた。

「兄貴は、月南に記憶を打ち込むインストールのプログラムを作りに行ってるぜ……だが、少々微妙になっちゃった…」

「微妙？」

「まだ憶測の段階だから言わない方が良さだろう…兄貴が帰ってくればわかることだし…それに親族全員に報告をしないとならないだろう？」「最強の帝王」が復活したとな…」

女のネイピアが自信満々に腕を組む。

「そもいかんじゃろ！！無用な混乱を招いてしまうわ！！」

妖怪の長であった瑞祥ずいしょうの一人娘でシラガミの妻となった溟邏が普段の状態では考えられない程まともな事を言った。

「おおっ！！姉さんの口からそんな言葉を聴けるとはな……」

「なんじゃと！！わらわだってシラガミに追い付くために日々訓練

をしておるわ!!」

ムキー!! 馬鹿にしおって!! 溟羅が顔を真っ赤にしてネイピアを睨み付けた。

「まあ姉さんの言う通りで下手に兄貴が生きていると世の中に伝えたら大混乱になるだろうな……」

なんせニホン国を創設した伝説クラスの帝王である「シラガミ」が生きていると知らればな……最初は嘘として処理されるだろうがリスクは出来る限りの回避したいものだ。

「つまり俺の兄貴であるシラガミが生きていることはここにいる者達の秘密にした方が良くし、これまで通りにニホン国の主権はヴルムに任せる」

「うむ、了解した」

「でも、ネイピアさんが決めちゃって良いのでしょうか?…お父様の意見も参考にした方がよろしいかと…」

さすがにネイピアの独裁形態ではマズいのでは…という意味でティオンが言ったが前述した通り「ネイピアとシラガミはインストールの結果で思考パターンが似ている」ということなので問題ないだろう。

シラガミの判断はネイピアの判断。

その逆にネイピアの判断ならば帝王シラガミの判断であるのだ。

「大丈夫だ…兄貴がいたとしても同じことを言うはずだ……」

人間社会の中核をなす不可思議な存在。

この先の展開は……

闇の帝王「シラガミ」

悪魔の頭脳「ネイピア」

真っ白な人格「月南」

を中心に話が進んでいくだろう。

運命の時計が静かに動き始めた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5289/>

---

幻神月花

2011年10月9日23時43分発行